

い軍犬が戦死して居るのを見て、予は遽かにダルのことを思ひ出し、そこら當りにゐた兵隊に聞いて見たところが第二大隊のある兵卒が「それは私が知つてゐます、二十七日の夜第二大隊が敵の陣地前四五十米突まで接近したときにダンは同隊について来てゐたが、其の夜敵の機關銃にやられて戦死をしたといつた。大連以來、予の愛犬となり、尾を振つて媚を呈し、多くの兵士に可愛がられた。彼が、四五十日の薄い縁で戦死するに至つた不憫さよ。ダルも戦争さへなければ、旨いものを食つて、元の主人に可愛がられたであらうに、思ひもかけぬ日本士官の後に尾いて、露營もしたり、戦場にも現はれたりして、トウ／＼名譽の戦死を遂げてしまつた。

凡て動物の最期は、戦役の悲劇中の一つであつた。犬につけてまた思ふのは軍馬である。軍馬はその優秀なる速力と忍耐とによりて、或は勇士を乗せて敵前を驅り、或は彈藥糧食を運搬するのである。幾百の騎兵は、己れの脚下に其の乗馬を射殺せられた。幾多の馬は傷つきたるまゝ、戦場に殘された。兵士は數次己れの乗馬の苦悶を救けんとして、銃口を其の頸に當つるの己むを得ざるに至つて慟哭するものもあつた。馬は茫々たる平原の淋しき進軍に、荒涼たる戦場の露營の夕べに、最も忠實にしてまた愛らしき戦友であつた。彼等は眼中に慈愛の薄暗き影と不可思議の光とを有して、人間の威力を尊敬するところの、愛すべき忠僕である。

仙臺の呉服屋の主人に大内源太衛門といふ人があつたが、兵士の出征を見送る人はあつても、軍馬の出征を見送る人のなきは遺憾である、また彼等軍馬に取つて、まことに不惑至極であるとして、厩の前へ行つて、一々丁寧に頭を下げて、「この度は御苦勞様で御座います、何分御願ひいたします。」といつたさうで、それは熱心な奇特な人であつたが、戦後に軍馬の戦功を永遠に傳へねばならぬとあつて、獨力で仙臺櫻ヶ岡公園に軍馬の銅像を建てた。予は先年仙臺に往つたとき、大内家を訪問し、銅像も見た。大内氏は故人となつたが、此の志が軍馬の愛すべく、一般動物の愛すべきを誨へて、世道人心を益したことは、甚だ少くない。軍馬もかゝる奇特の人によつて、長く功績も傳はり追悼もされる譯であれば、また以て瞑すべきである。

「國民の偉大なるは、人民の數多きこと、若くは其の領土の廣大なることにあらずして、都て其の國民の抱ける憐愍の情の宏大にして正しきにある也。」
 これは此の程南亞弗利加フオート、エリザベスなる處で除幕式の行はれた軍馬の銅像の碑銘である。これは英杜戰爭に殉じた軍馬に對し、感謝の誠意を表せんがため、公衆の義捐によつて建設された者である。人間は己が慾望を恣にせんとして、老いて疲れたる馬の汗を絞つて絞つて絞つて殺して、其の揚句には、皮も骨も賣り飛ばして酒食を貪つて居る。彼の鬼のやうな面魂のガタ馬車の馭者の太き鞭を見よ。彼等は瘠せた馬の腰を火の出るほど殴り飛ばして、ビュンビュンと風を切つて唸らせてゐるではないか。槍が降らうと、火が降らうと、血の涙、血の汗を流して、殴られづめに驅つてゐる馬も、我等と同じ生類である。憐むべき啞友である。

京城から海城へ行く途中、牛を徵發したところが、中にドウ引つ張つても叩いても、前へ行かうとせぬ牛があつた。「子に引かされて行けぬのであらう」と、子を連れて來たところが喜び勇んで行進したといふ話を聞いたこともある。

重荷負ふ、坂路を登る親牛に、

子牛よりそふ村時雨かな。(大隈言道)

親子の情は動物とても同じことである。或る人間の一種よりは、むしろ情愛の深いところがあるとも思ふが、予はこゝに兵作と愛馬との感すべき物語をしたい。

本田兵作は輜重輸卒であつた。七月二十六日太白山に於いて、兵作は馬の輜を取つて、小行李の位置——或る山陰——にをつた。兵作は愛馬の鬣を撫てつゝ、耳を戦線に傾けて、銃聲を聞いてゐたが、忽ち百雷の一時に落下したる如き、轟然たる爆鳴動揺が起ると共に、濛々たる硝煙に包まれて、仰向けに打ち倒れた。馬は彈藥箱をグワラ／＼と振つて鬣を逆立て、ヒヒンと一聲高く嘶いた。
 兵作は擔架に乗せられて、野戰病院へ送らるゝことになつた。馬は主人に別るゝとは知らず、擔架の後から首を垂れて、しを／＼として従ふさまは、哀れにもいぢらしかつた。そしていくら鞭を引張つても引張つても、振返りもしなかつた。兵作は擔架の上で別れを惜しみ、愛馬を見て涙を流した。

兵作が豫備病院の病室で苦悶してゐた時も、愛馬のことは忘れなかつた。戦友に宛て、熊野は誰が持つてゐるか。元氣であるか。飼葉はかうしてやつてくれ、大事にしてやつてくれといふやうなことをばかりを書いて送つて、一言も我身の負傷のことは言はなかつた。熊野といふのは兵作が愛馬の名である。話は三年を過ぎて、平和克復後、兵作は恩賜金を元手として、小間物行商を始めた。何がさて律義者であるから、あの村でも此の町でも大もてであつた。ある日のことである。彼は重き荷を背負うて夜晝峠といふ難所に差し掛つた。すると「ドゥー！ドゥー！畜生ッ！」といふ馬を追ふ馬子の罵る聲が峠から下りて来た。兵作はトボクとして登りつゝ見上げれば、今し峠を踏えたる一頭の荷馬が、太い材木を山のやうに縛りつけられて、馬子に鞭打たれつゝ下り坂を追はれて来るのであつた。「ドゥー！ドゥー！畜生ッ！」どちらが畜生だか分らぬぐらゐてある。兵作は可哀相なものだなどと思ひながら、摺り違ひさまに行すぎやうとすると、何事か？荷馬はバタツと立ち止つた。馬は忽ちヒューンと、生木の太い鞭を喰らはされた。鬘にはバラ／＼と木の葉が無慙に散つた。けれども馬は

動かなかつた。さうして哀れにも悲しき嘶聲を發しながら、兵作に縋れ寄るのであつた。兵作はハツと思つて其の面をつく／＼見れば、萬里異郷の空雨に風に辛苦艱難を共にした熊野——その熊野であつた。山陰で辛い別れをした其の熊野であつた。どこにドウしてゐるか、死にてもしたかと思つて片時も忘れてはゐなかつた、其の愛馬熊野であつた。熊野が姿の變つた兵作を見忘れてゐなかつたのは、何たる可愛い心ぞ。かゝるところで、かゝる姿で廻り會はうとは、有爲轉變の世には、これはまた如何なる佛の引合せぞ！兵作は愛馬の昔に變る姿を見て泣いた。

馬子は何が何やらサツパリ分らず、小間物屋と馬とを等分に眺めながら、これは御親類筋で、もあるかといつた風で、脚へ煙管で、不思議さうに呆れてゐるのであつた。それは呆れたに違ひない。

「おまいさん、愚圖々々してゐると、今に雨が落ちて來ますぜ。ドゥー！ドゥー！動かんかッ！」

「馬方さん。イヤ、この馬はナ、わたくしが戦争に行つたとき、連れてをつた馬です。

久し振りに會ひましたが、よく忘れずにゐてくれました。どうぞ馬方さん可愛がつてやつておくれなさい。」

「フン、あんたが連れてをつた馬かな。フーン……ドッ！ドッ！」

馬子は轡をグイと引いた。兵作は愛馬の後姿を見て、新しき涙が止まらなかつた。

大粒の雨がポタリ／＼と落ちて来た。ヒヒヒンと嘶が籠から聞えた。エーホーといふやうな馬子の歌も聞えた。

第十八 蠅と蚊

老座山の占領後、敵の陣地には立派な寢臺があつた。どなた様のお蔭か、戦争に何のことか、贅澤な沙汰である。どうせ傲岸なる將校が之れに踞してウイスキでも飲んでゐたのであらう。寫真器械もあつた。寫真でも寫して遊んでゐやうなどは、チト戦争には旨過ぎる。日本軍突撃の狀でも寫すつもりでゐたらうか。トランプがあつた。トランプで勝つても戦争で敗けては何の役にも立たぬ。

菓子が澤山にあつた。これは難有く頂戴したことはない。牛肉が鍋にかけてあつた。これは御親切な置土産で、丁度煮え加減がよくて、何より結構な頂戴物であつた。子供の玩具があつた。これだけは合點が行かなかつた。南山の司令塔にも、子供の衣物があつたり、婦人の化粧道具があつたりしたので、一體どうしたことかと皆驚いたのであつたが、南山は半要塞で、暫く保養する餘裕もあつたらう。併し老座山の如き、一時の據點たる陣地で、一度は砲火の

下に立つに至れば、一つの隠蔽物も無き所に子供の玩具があらうとは、どうしても合點のゆかぬことであつた。しかし旅順には將校が家族と一しよに立て籠つてゐたのであるから、戦線に婦人や子供の現れたことは、勿論珍事とするには當らぬであらう。

一つ謎のやうなものが落ちてゐた。ハンカチーフで包んだ物である。解いて見たら、矢張りハンカチーフで包んだ物であつた。「何が入つてをるのか、言ひ當てゝ見ろ。」などと、いひながら解いて見たら、またハンカチーフで包んであつた。餘程大切なものと見えて、何でも四五枚のハンカチーフで丁寧に包んであつた。ものは何かといふと、若い女の寫眞であつた。ヤアと突貫の時のやうな大きな聲を放つて、「見せろ」と、若き女の周圍に娯集して、恐ろしい評判である。「細君だらう」といふものもあれば、「いやナニ、細君ぢやない、細君のなら、コンナに何枚もく包んで、奥の方に仕舞ひ込んで置かなくてもよささうなものだ。キット許嫁だよ。」などと尤もらしいことをいふものもあり、「イヤ藝者だ。」などといふものもあり、とりどりの評判が立つたが、多數決で許嫁といふことに

極つた。すると一體美人かどうかといふ品定めもあつたが、露西亞式はドウも分らんが、日本流のタイプに入れて見ても、中々美人だらうといふことに一決した。成程大切な筈である。この持主たる若い士官を思ひ出すと、死んでしまつたのか、遁げたのか、かといふ問題になつた。死んだとあれば、致方もないが、遁げたとすれば、随分不實な話である、いらぬ世話ながら心配もしてみた。若い士官は越山杳々として雲漢々、吳水悠悠々として風蕭々の感があつたであらう。月に對して泣き、雨に對して泣いたであらう。陣頭に立つときに、幾度か彼は戀人の寫眞を抱いて、熱き涙を落した。荒涼殺伐たる戦場の裡、不運と戦ひ、困苦と戦ふに當りて、胸に織手を置きて、新らしき力を與へたは、容顏花の如き戀人であつたらう。若い士官が若し生きてゐるとすれば、何處にドウして居るか、予の此の話を知るの機會あらば何と思ふであらうか。知らしてやりたいものがある。花間徘徊す、双峽蝶、英雄と佳人と、今果して健在なりや否や、これは知りた

いものである。

旅順の捕虜が長崎に來たときに、或る將校の從卒——無論、嚴めしく武装した從

卒は、不思議にもコザックでもなく男でもなく、實は男装した花嫁であつたといふ珍談があつて、花嫁は神戸の佛蘭西領事館へ送られることになつたところが、將校と所謂従卒とは抱きあつてキッスして、「ア、私の花嫁は神戸へ行くのだ。私は牢に入るのぢや」といつて、群集の見てゐるのも構はず、聲を放つて泣いたといふことがあつたさうだが、コンナ小説みたやうな珍談奇談寧ろ怪談が旅順龍城中には澤山あつたに違ひない。それを思ふとかの老座山の若い露國士官はどうやら優しいところがある。

それから外套を五六枚遺してあつたから、これも無断で頂戴することにした。我軍の露營には至極結構な物であつた。併しムツ／＼としきりに痒いので、調べてみると風がウヨ／＼と占據してゐた。散兵もあれば、密集隊もあるといふ配備で、中々すばらしい風であつた。弾の飛んで來る中で、露兵の血を吸うた風をつぶすなどは、妙なわけであると思つたりした。露軍も外套に風がウヨ／＼してゐるやうでは、大分永い間苦勞を嘗めたものであると思つた。滿洲の風は、一、二、同様に血の吸ひ時だと思つたか、盛んに活動を試みたものである。兵隊が

日當りの好い柳の木の下で風を潰してゐるなどは、戦争より外見られぬ圖であらう。

風で思ひ出すが南京蟲にも閉口した。上陸の其の晩王家屯といふ村へ泊つて、一、の血に飽いた南京君は、忽ち新來の銳氣颯々たる我等に噛み付いたので、皆大弱りに弱らされた。殊に予はドウいふわけか、したゝかやられたので、これは一、の家へ寝るものでないと、以來殆んど屋内へ入らず、聯隊本部で携行した方錐形の黄色の天幕が、予と從軍布教師遠山正導君との宿舍となつて、なんでも支那人の家に厄介になつたのは、戦争中僅か三晩か四晩であつたやうに覺えてゐる。この方錐形の天幕は一種の目標となつたと見えて、閑な日には諸方から集まつて來て面白い話をしたところであつた。予は今にその天幕を懐かしく思ふ。太白山の時であつた。二十六日の夜は其の儘暮れてしまつたが、聯隊本部は太白山を正面にして、ある小屋に這入つた。夜を通じて敵の小銃弾は、小屋の庭や、家根に引き切りなしに落ちてゐた。予は軍旗を持つたまま、聯隊長の側に腰を下して、覺えずトロ／＼とすると、チクリと南京蟲にやられたので、これは

たまらぬと小屋の外へ出て木の葉を敷いて横になつてみたところがブスツ、ヒ
 ユーといふやうな響音を以て小銃弾が飛んで来る。これはたまらぬと内に這
 入れば南京蟲にやられ外へ出れば弾が降つて来るといふ仕末で小屋の後に立
 つたまゝ、暗い雲を眺めながら夜明しをしたことがあつた。いかさま南京蟲に
 は弱らされた。虱のはうが何ばう優しくていゝかも知れぬ。
 南京蟲に次いで恐るべきは蝸である。それこそ支那人が蛇蝸の如く之れを
 恐れるのであるから、恐ろしい奴である。大抵は岩の間に居るが露營などは
 よくやられる。此奴にやられると命がないくらゐに云ふ。形が海老に似た二
 三寸もある奴である。蝦蛄に似てゐるといふ方が近いかも知れぬが、至つて風
 采の上らぬ奴である。一抱へくらゐの石に五六匹も潜伏してゐることがある。
 子供が蝸を見さへすれば捕つて石で叩いて殺して仕舞ふところを見ると、いか
 にも恐ろしい奴に違ひない。南京蟲や虱と同じく夜戦を以て唯一の戦法と心
 得てをる。我等が散兵壕を掘らんとするところは、晝間は敵の防害を受けて作
 業が出来ず、夜になれば蝸にカツとやられる。迂カツには仕事も出来なかつたの

である。

蝸くらゐとはいふものゝ、蝸にはひどく閉口したのである。支那人の内へ這
 入ると蝸の住家として此の家が建てられたのか、將た人間の住家として建てら
 れたのかを疑はしむるほど、蝸が跋扈してゐるから恐ろしいものである。これ
 は決して大袈裟に云ふのではない。我等が飯の分配を受けて歸ると忽ち蝸の一
 大塊團がやつて来て、油断すると飯が一粒も見えないやうに眞黒に蝸集する全
 く黒飯である。初めは誰もこの凄じい飯に一寸手が出ない。けれどもソナ
 ことをいつてゐるわけに行かぬから、蝸を拂ひく搔き込んでをつたが、それも
 しまひには平氣の平左衛門になつた。時には二三疋飯と一所に口へ飛び込ん
 だのもあつたらうとは、何と恐ろしい蝸ではないか。「飯の上に蝸」などといふ
 ソナ上品な定理は、支那では適用の出来ぬ蝸である。彼が攻撃の目標となら
 ぬものは無い、何とも御座れ一面の蝸である。拂へども又來たるなどといふ、ソ
 ナ吞氣な蝸ではないのであるから、随分弱らされた。
 我等が蝸を捕るには天井から幾筋となく繩をぶらさげて置いた。夜になる

と蠅は鈴なりになつて繩に集まつてゐる。其の爲體たら凄じいものであつた。全く蠅の棒が幾條となく天井から下つてゐるのである。我等は細長い紙袋を造つて繩の下から徐に被せて上から蠅を扱きおろしてそれを焼きすてゝをつた。何ても大束でなければ征伐は出来ぬのであるから堪らない。晝は採取網のやうな紙の袋を竹の尖へつけて縦横無盡に振り廻してゐた。當番の兵士が交代で蠅取りであるから戦争も中々骨の折れたものである。

奉天新聞が日露人を比較して蚊と蠅との如しといつたことがあるが面白い観察であると思ふ。日本人は宛も蚊である。露西亞人は宛も蠅であるといつてゐた。露西亞人が途方も無く五月蠅いことは蠅のやうな人種である。露人が滿洲へ來てからといふものはナンだかだとしつこく附き纏つて五月蠅いとは一通りて無い。けれども季候と戦ひ困苦と戦ひ失敗と戦ひ人種と戦ひ兎に角滿洲をあれ程のものにしてしまつたのは豪いといはねばならぬ。それに引きかへ日本人は蠅のやうに五月蠅くはないがなにしろ短兵急で剣つき鐵砲でチク／＼と刺すから何ばう痛いかも知れぬこれは丁度蚊のやうな人種であ

る。露西亞人は五月蠅いかほりに蠅のことであるからボンヤリとしてゐて痛くはない。併し蚊は針を刺して血を吸ひ取るから油斷すると大變である。結局旨いことをしてゐるのもどちらかといつたら日本人であらうとコンナ觀察をしてゐた。味ひのあることのやうに思ふ。それからまた此の蠅と蚊とで日露人の生活の狀態がよく分るといつてゐた。日本人ほど水を濫用する人間もあるまい。滿洲で日本人の住んで居る家の後方を覗いたら水溜りのないところは無い。滿洲のやうに排水の悪いところであるから水の流れやうがない腐敗水がドロ／＼に溜つてゐるから蚊もわかうてはないか。露西亞人となるとこれはまた有名な不潔人種である。臭いものに蠅がたかるの原則に洩れず露西亞人の居るところには蠅が盛んなものである。これで見ても日本人は丁度蚊で露西亞人は丁度蠅であるとのやうに云つてゐた。我等が閉口した蠅も、ハのてはなくて露兵の置土産か。我等は虚無僧の編笠よろしくといふ袋蚊帳を冠つて露兵君の蠅を防いでゐたのである。全く五月蠅い奴であつた。露西亞のハ兵君も中々手にをへぬ代物である。

第十九 高粱の蔭

七月二十九日夜我軍は露軍に一日の休憩を與へたのみで疾雷耳を蔽ふに暇あらざる勢を振ひ露軍の第三抵抗線とする鳳凰山干大山の線に向つて前進攻撃した。敗退したる露軍に猶豫を與へず二十八日來のなだれてあるから一氣に押し倒して敵を潰亂させたのは痛快であつた。

この頃高粱は到る處に繁茂してをつた。我軍は高粱の蔭にかくれて敵の堡壘前に於いて前進した。高粱は滿洲の名物で七尺も八尺もあるから我等が敵の鼻先に隠れてゐても見つかりやうはない。全軍は杖を銜んで高粱の蔭に勢揃へをした。高粱の葉がさわぐと見たは我軍の一時に起つたので足元から鳥が立つたやうな騒ぎであるから草木皆兵といつたやうに高粱皆兵風聲鶴唳皆日本軍の兵隊となつて突撃したから敵は驚いたの驚かぬのでない。露軍の某砲兵中隊の如きは歩兵隊の退却があまり早かつたために砲車を曳いて遁げる暇がなく中隊長は閉塞器を取り去り再び日本軍に使用されざるやうにして棄

て去らなければならなかつた。高粱を刈入れ無かつたのは確かに露軍が一つの手後れてあつたらう。

露軍の一部は大小孤山に隠れ其の他はみな本防禦線に退いた。要塞の任務はこれより漸く重大となつたのである。露軍は金州の失敗に續いて二ヶ月半の間に悉く前進防禦地帯を失ひ日本軍をして要塞の門前に立つに至らしめた。露國皇帝陛下は要塞守兵の勇敢なる行動を賞讃せられ「汝等が無限の勇氣を奮ひ武器の名譽を維持せしことを確信す。神は汝等の犠牲的精神を嘉せられ旅順要塞を守護して敵の侵入を防ぎ給ふべし。汝等努力せざるべからず」との親電を發せられた。踰えて八月一日要塞司令官スミルノフ將軍は「旅順口の勇敢なる防禦者よ我等が露國領土の一隅たる旅順口の要塞に於いて敵を防禦せんがために力を協はすべき時は來れり。我が皇帝陛下及び祖國は我等が其の神聖なる義務を誠實に盡すべきことを期待し給ふ。各員宜しく其の宣誓を記憶し要塞を措いて最早他に行くべきの地なきを思ひ奮闘死守せざるべからず。吾人は祖先と同じく一步も退くことなかるべし。上帝は我等を助くべ

し」との訓令を下した。

ステツセル將軍もまた「我が運非ならば要塞は敵手に落つべし。然れども吾人は辛苦艱難素より厭ふところにあらず。善戦して善死するは予が覺悟なり予と共に最後まで踏み止まるの勇氣なきものは即時要塞を去るべし」と申し聞けた。要塞は堅し、守將の決心は斷乎たり、これより漸く旅順の天地は恐ろしき舞臺となつた。

八月七日、旅順の教會堂には、目前に迫つた不幸と危険とより救ひを得んがため祈禱式を行ひ、市民が鷹集して熱心に讀經しつゝあつた。モロとした唸りが陣地に在る守兵の耳にも達し、兵士は胸の聖像に手をあて、天を仰いて祈つたといふことである。この日天氣晴朗にして市民の祈禱行列は、口々に題目を唱へつゝ、旅順の市街を遶つた。僧侶が跪くと、市民も一齊に跪いて熱心に祈つた。此の時遠雷の轟くが如き音が聞えたが、數秒の後には空氣を摩擦する音響が近く聞ゆると思ふ途端に、一發の砲彈が飛び來つて地上に炸裂した。僧侶も市民も發條で跳ね飛ばされたやうに跳び上がつて、其の面色は土の如く驚愕と恐怖

とのために喪神して釘で地に打ちつけられたやうに立ちすくんだが、漸く我に復ると、我は家に子供を置きたり、我には病婦ありなどと蜘蛛の子を散らすやうに、皆家路を指して歸つたといふことである。

旅順で市民が熱心に神に祈つたり、經文を讀んだりしてゐる間に、我等は大小孤山の攻撃をすまして、總攻撃の仕度をしてゐた。

御馳走もこれが食ひじまひだから、しつかり食つて置けといつたところ、ナニもこれといつて食ふものがあるでなし、一向張り合ひのないものである。黄泥川大上屯にゐた時には、或る兵隊が工夫してカステラを作つたなどといふ後になつて考へてみれば、よくもあんな呑氣なことが出来たものだと思ふやうなこともあつたが、モウ大小孤山の戦闘後は、旨いものも食へなくなつてしまつた。また海軍からバイナップルを買つたことも、前にはあつたが、それも一時の鼻薬で、一度切りであつたから、心細いものである。バイナップルは、海軍が支那人の密輸入船を捕へて沒收したものであつたが、露國で注文したバイナップルが支那人の手から日本の海軍に取られ、海軍から陸軍の我等が分配を受けて、

舌鼓を打つたといふのは、頗る都合のいゝ話で、こんな旨いことも時々ないといかぬが、大小孤山の頂では、モウそんな僭越な野心は起さうにも起らなくなつてしまつた。先づ道明寺繻を水に濕して、露軍から頂戴物の角砂糖を掻き込んで煮て食ふなどは、餘程上等の格であつた。

水に缺乏したことが多かつた。草に宿つた露を手を受けて、顔を洗つたなどいふこともあつた。雨は嫌ひだが、お影で褌袴の洗濯などが出来た。けれども雨の溜り水は、直ぐドロ／＼になつてしまふ。第一線の守備線で、或るところの山の頂上から、兵隊が水筒を持てるだけ肩に引つけて、谷底へこんなドロ／＼水をくみに行つたが、其の泥水が非常に旨かつたのである。何が旨いといつても、木の蔭もない山の上で照りつけられてゐるとき、水筒の口飲み程旨いものもあるまい。その中でも負傷すると、むしろやうに水が欲しくなるが、この時に飲む水は、月世界からでも得て来た水か、水に甘露の味があるといふのも、コンナ水はいふのか。飲みながら息が絶えても、思残りのない味ひである。勿論この水で死んで行くものは多いことである。予が負傷したとき飲んだ泥水血水は何と

もいへぬほど旨かつた。予が士官候補生であつたとき、機動演習で、ナンでも八里里駆足して、敵の側面に迂回運動をやつたとき、咽喉は枯れる水は無し、目は眩んで、先が見えぬといふ烈しいことになつたから、トウ／＼田の中に走り込んで靴を踏みしめ、田水の滲み出たのを手に掬つて飲んだことがあつたが、キラ／＼と赤い金氣のやうなものが浮いてゐたけれど、それでも其の味ひの旨さといつたらなかつた。今に金氣水と泥水血水との珍味は忘れぬ。

大孤山、小孤山は敵の本防禦線を瞰下し得る我軍にとつては、攻撃の據點となるべき要點である。すぐ眼前に見えるのが白銀山、鷄冠山、北砲臺、望臺などで、陸正面の敵の東北堡壘線である。

八月に入つてから、コンナ工合で旅順は範圍を狭められたから、市街では、あちらの檐下にも二人集まり、こちらの辻にも三人集まりして、一體ドウなることだらう。明日にも日本軍が攻撃して来るだらうといふものもあれば、イヤまだ日本軍もさう迂濶にやつて来まい。けれども心配なことは心配だといふものもあり、一體軍艦は何をしてゐるのだらう、海軍の士官はこの先ドウするつもりだ

らうなどと、海軍の非難をするものもあり、取止めのない道聽途説が紛々として、これからドウなることか極めて渾沌たるものであつた。十日になると今まで眠つてをつた旅順港内の軍艦は全力を擧げて港外に出動し、針路を西南に取つて地平線下に旅順口を去つた。これを旅順艦隊が脱走して浦鹽艦隊と合し、海上権を恢復して旅順要塞の運命を頼勢より挽き回さんとするに在つた。

實にこの太平洋艦隊の成否こそ旅順戦役の全局若くは大局を決するものであつた。士官は皆最美の軍服を纏つて、生きては再び還らじと競ひつゝ、艦隊は勇ましく出港した。スミルノフ將軍は黄金山下低砲臺の傍なる電気岩の上に立つて勇ましく波を蹴つて行く艦隊の後姿を眺めつゝ、「神よ、希はくは我が艦隊の上に冥助を垂れたまひ恙無く浦鹽に到着することを得しめたまへ」と祈つた。將軍は軍艦が水平線下に没した後も茫然と目を岩下の水面に落して立つてをつた。其の歸路に就いた時も海上を眺め、腕を拱いて大息してゐたといふことである。

かくして太平洋艦隊は前途に多くの希望を囑せられつゝ、旅順を脱出したが、

其の結果は果してドウであつたらう。

多望なる其の日も將に暮れなんとして、俄かに遙かの沖合にて遠雷の轟くごとき砲聲が聞え、終夜に亘つて絶えなかつたが、天明に至り太陽昇りて海上火の如き折柄旅順艦隊の主部は悲惨たる姿を以て再び港口を指して還り來つた。いふまでもなく、夜來日本艦隊と出會して、かゝる始末となつたのである。艦隊の大部分は歸來したが司令官ウキツトグフトは戦死する、旗艦ツエザレウイチは膠州灣に遁れ、アスコルドは上海に遁れ、ノイヴィツクは遠く北海にのがれて破壊沈没したといふ始末で、艦隊は四離滅裂、果ない有様となつた。スミルノフ將軍の此の報を得たとき、如何に失望したか、察せられる。尤も此の旅順艦隊の脱出はこれ二回目、初度は既に六月二十三日を以て企てられたのであつた。其の時も出ると忽ち日本艦隊に出會したので、港口を指して引返すと、日が暮れかゝる折よしと日本の水雷艇が尾行して襲撃する、砲戦もして見たが思ふやうに行かず、そのみでなく遂に港内へ入る機会を失つて、據處なく港口に投錨して居たところが、まだ錨を入れない内に、早や日本の水雷艇が襲撃して來

た。それで手を引かうにも引くことが出来ず、終夜苦しめられて恐ろしい一夜を明したのであつた。しかし結果はセバストーポリが損傷を蒙つただけで大したこともなかつた。

旅順艦隊の脱出もかゝる始末で遂に奏功せず。日本艦隊は依然たる波濤の統御者で、威風堂々、各艦の檣頭高く日章旗を翻して、いつても出て来いと待ちかまへて居つた。或る外字新聞には、「旅順攻圍に於ける日本陸海軍の姿勢は宛も鼠を捕へたる猫のやうなものだ。どこから食はうか、頭から噛んでやうか、尻から喰らひついてやうか」と舌鼓打ちつゝ、小首を傾げて鼻を蠢めかしてゐるやうなものだ」と書いてあつたが、旅順の鼠も最早我手の物、いつ何時食はうと勝手なやうなものゝ、窮鼠却つて猫を噛むといふこともあり、旅順も随分手剛い鼠ではあつた。

あちらにも五六人、こちらにも七八人、山を登つて行くのもあれば、谷へ隠れるものもある。馬に乗つたのが出て来たかと思ふと、すぐ引つ込んでしまふ。あちらから一人、こちらから一人、丁度蟻のやうに出會頭に何か相談するかと見ると、すぐ分れてしまふ。山の陰で煙の真直ぐに立ち昇るは敵も夕餉の仕度をするのか。今晚は先へ失禮して天幕に這入るとしやう。いづれ明朝また御目にかからうなどと、予等は大孤山の斜面を上つたり下りたりしてゐた。

第二十 天幕長屋

大孤山の裏斜面には、下から上へと段々に幕舎が重なつて宛も一大市街を成したるかの觀があつた。九尺二間ではないが、四尺四方の天幕長屋も、夜に入ると一面に燈火がつくから、十階二十階の西洋館が並んでゐるやうであつた。時は八月十八日此の市街の夜は静かなること墓場の如く、籠に繋がれた馬が脚を上げてコト／＼と土を掻いてゐる音が、夜を通して断えなかつた。馬も眠られなかつたであつたらう。地獄から夜通しに來たやうな、色青ざめた髯のまばらに長く生えた兵隊が、飯盒を下げて山から下りて來た。「鈴木ぢやないか？」「だれか？」「俺だ。」「平尾か、元氣か？」「マア元氣ぢや三瀬はどうしたか？」「あれは死んだ。」「さうか、死んだか？」「コンナ談話を天幕の外と内とでしてゐるのを聞いたこともあつた。「あれは死んだ！」無造作なことである。コロ／＼と何の思案も算段もなしに死ぬる。戰場に老いたる兵隊は、天幕長屋で堅麵麩を入れ、た背負袋を枕とし、雜糞と水筒とを右に置いて、銃を左に置いて、臂を曲げて寝轉

んでゐる。

「戦て、ドンナものですか？」などと向側の天幕で尋ねてゐる。新來の補充兵であらう。「ドンナものッて、一寸いへんが、やつてみれば、すぐわかるよ。」などと分つたやうな分らぬやうなことを老兵が話してゐる。「さうですか？」などと補充兵が感心をしてゐる。「一寸上へ上がつて覗いて來い。敵のゐる山が見えるから。」「さうですか、見ても構ひませんか……オイ一寸見て來んか。」「ヨシ見に行かう。」補充兵がドヤ／＼と立つと、「オイ／＼さう皆行つてはいかん、新來が來たと思つて、ロスキが大きな弾を打つてよこすが承知か。山の上へ行つたら、どこもこゝも死骸だから、踏まんやうにせい。」補充兵之れを聞くと襟から冷水を浴びせかけられたやうに、首をちよめて「止めろ／＼！」

どこでやつてゐるのか、夜中ブスン／＼と小銃の音が聞えてを、つたが頭の上に住る山の歩哨は何の事も無いと見えて、「居るのかしらん。」と思ふほど静かであつた。聞えるか聞えぬくらゐに、「歩哨！どこに住るのか？」といふと、「ハハハこゝに住ります。」とかすかに返辭する。

「何の事も無いか？」

「今晚は妙にやつて来ません。」

「アリヤ何だらう」

「私も何ぢやらうかと、サツキから見てもありますが、火にしては可笑しいし、幽霊火かも知れませう。」

「幽霊でも出さうな晩だ。マア氣をつけてをれ。」

「ハア。」

予は歩哨線を一巡して、我が天幕へ歸つて来た。夜の支配者は深い／＼息をついて、重い夜であつた。北斗星はキラ／＼と輝いてゐた。

天幕に這入ると、皆グ／＼と高軒で寝て居る。臂を曲げて如何にも安樂さうに寝轉んでゐる。「中尉殿歸りましたか」と従卒が眠むさうな眼をこすりながら起き上がった。来た。

「ウム歸つて来た、何のこともなかつたか？」

「さうですか、中尉殿、味噌汁はドウですか？」

「結構だ。出来てるか？一ばい御馳走にならうか。」

「漬物もこゝにあります。」といつて、罐詰の殻を出した。此の晩は従卒と出征前のことから、何やかやと飯盒の口から味噌汁を吸ひ／＼話し明かした。戦争のことを思ひ出すたびに、不自由な生活併し極めて楽しい生活をしたことを思ひ出す。岩おこしのやうな味噌、羊羹のやうな醤油エキスなどは、常に我等の思ひ出になる。

散兵壕を隔て、敵と睨み合つてゐるときでも、そこらあたりに落ち散つてゐる高粱の莖を拾つて火をつけて、帽子を取つて煙の上がるのを防いで、飯盒を吊しても、味噌汁はたけた。何にも無いときには、醤油エキスを舐めてをつても事は足りたのである。

牛肉や福神漬の罐詰の殻は調法なものであつた。杏子の實や、胡瓜や、茄子をきざみ込んで、鹽をふり播いておく一夜漬の樽にもなつた。一夜明くれば漬物がつかつてゐるので、「オイ漬つたぜ」などといつて箸をつゝいて食つた。そして此の小さき樽は、腰に二つも三つも紐をつけて吊り下げてゐた。命は一夜も

測られぬ我等が腰には、一夜漬の罐詰の殻が括りつけてあつた。折角丹精して作つた漬物を食はずに死んだものは幾人か？人間の命は漬物の命にも及ばなんだか？我等は何に譬へんやうもなき果なき此の世の命であると思つた。罐詰の殻は、また之れに水を盛つて戦友の墓に備へられてあつた。我等は戦線に於いて銃火を放ちながら、水筒の水をかたむけて傍らにある忠死の戦友を弔つたこともある。罐詰の殻は、また中に石をぶらさげて鈴として使はれたこともある。露軍の壕底にあつたバラ鐵條網菱形又釘三角又釘などといつて、鐵の太い針金で組合し、其の鐵線の尖端が針のやうになつてゐた障礙物には、この罐詰の殻の鈴が結びつけられてあつた。この障礙物に引つ懸ると、カラン／＼と忠實に報知をするものだから、「それ来た！」と露兵が彈丸を打つてよこす。油断のならば、罐詰の殻であつたが、罐詰の殻ほど、どちらに取つても御役に立つたものは恐らくあるまい。「兵隊さん、お腰のものは何で御座います？」兵隊は腰を振つて、「罐詰の殻で御座います。」「一つ頂戴お供しやう。」といふ恰好で、グワラン／＼と夥しい威勢のいゝものであつたが、「ソラ駆歩！」と號令がかゝると、

邪魔になると見えて、言ひ合したやうに、一つ取つては棄て、一つ取つては棄て、トウ／＼みんな無くして仕舞つて、戦が一落着すると、又々腰に罐詰の殻を吊り始める。吊つたり、捨てたり、なんでも氣ぜはしいことであつた。

胡瓜で思ひ出したが、之れには随分長いものがあつた。二尺も三尺も長い胡瓜があつたから珍しい。ニ、君はこれをボキン／＼と折つて齧り付いてゐた。隠元豆は到る處に在つた。勿論、ニ、君のであるが、時々少しばかり頂戴してをった。時々も時々によるが、ナンでも時々である。味噌汁の實や、煮付には、お詔向であつた。隠元で思ひ出すのは、初めて来て戦の辛いも甘いも知らぬ補充兵が、隠元豆の畑の中で脱糞中、ストンと撃たれて、血塗れになつて匍ひ出して來たことであつた。時と運とだから、何時やられるとも限らんが、先づ脱糞中でよかつた。隠元豆でも胡麻化しつゝあつたのだつたら、未來永劫浮ぶ瀬がないであらう。

いつからか酒といふものを飲んだことがなかつた。酒の味も忘れたくらゐである。元來予は酒を好かぬが、戦地へ來てみると、どうやら飲んでみたいやう

二〇二
な氣にもなつた。大連で露軍の遺失物であつたさうだが、喇叭のやうな形をした瓶の酒を見たことがあつた。飲んだことは無いが、何でもキツイ酒であるとのことである。酒はドウでも、瓶だけは立派なものだと思つてゐたから、安ん心なものであるが、酒のとは長らく縁が切れてゐたから、モウ今度といふ今度は、一命を召上げられるに極つてゐるについては、今生の名残り、迷士への土産に、鱈腹飲んでみたいと思つたこともあつた。ニ、の家から水筒一ぱい三十錢くらゐで焼酎を買つて来て、チュウ／＼と吸つてゐるのもあつた。一ぱい分配に預かつて飲んでみると、五臟六腑にしみ渡るやうで、旨いとも辛いとも思はなかつたが、一種の感じがせずにはをられなかつた。ポツとのぼせた顔に微風がソヨ／＼と吹いて、身の征戦にあるを忘れたやうに、何ともいへぬ心地であつた。「日本から風が来るわい。」などといつて、恍惚としてをつた。帝國萬歲だの、大和櫻などと銘を打つた菰かぶりが到着したこともあつたが、早や喉をグイグイ鳴らして、「幾月目かの御對面。イヤ酒どの、態々遠方まで御苦勞千萬。」などといつて、飲まぬ先から酔つたやうに躍つたりしてゐるものがあつた。「分配す

るから、水筒を持つて来い。」と、布令が廻ると、「ヨシ来た！」と、こんな時には、われ勝ちにと天幕を飛び出して往く。グワラン／＼と水筒の束を肩に掛けて、「何か一つ肴をたのむぜ。」などといつて、驅けつける。後では、「オイ何か無いか？」「味噌汁があります。」「酒の肴に味噌汁はどうもならん……マア味噌汁もよからう。集まつたり／＼。」と、車座になつて、モウやがてお出でになりさうなものだと、花嫁の御輿入を待ち受けてゐるやうに、畏つて居る。「戻つたぞ／＼。」「戻つたか。早く来い。どうだつたか？ 少しか？」「澤山ある／＼。」一同「よろしい／＼。」と氣達のやうに騒ぐ。遙かにボスン！「オヤ銃聲がしたぞ。氣の利かん奴ぢや、ロスキ！君暫く御免なさい、マアさう騒がずと一獻召上がれ。」などと、頗る御機嫌が好い。

二〇三
八月十八日の夜は、第一回總攻撃の前夜であつた。此の酒が末期の酒とならなかつたものは、果して幾人か。當年當時のことを思ふと、予は共に末期の盃を酌み交した戦友の面影が、ア／＼と眼前に浮んで来る。この日夕方、軍は既に明日に於ける總攻撃命令を發し、將士は皆天の一方を望んで、冷かなる夏の一夜

を明かした。予等の目標とするは、旅順要塞中の理想的永久堡壘たる東鶏冠山北砲臺であつた。勿論この時まで、北砲臺でも何砲臺でも覗いて見たわけはなし、「なアに！」と大きに高を括つてをつた。併し皆口に云ふと云はぬだけで、心には「こんどこそは……」と覺悟せぬものはなかつたのである。

第二十一 戦場の子別

死に瀕せる者は死を恐れぬ。死は寧ろ其の人の救助者である。攻撃の前夜は即ち瀕死の前夜であつた。そして我等は決して死を畏れなかつた。人生に最も痛切なる打撃を下すものは死であり、斷腸苦悶せしむるものも亦死である。併し眞面目なる戦場の裡に於いては、最早死といふことが問題でなかつた。生が何やら死が何やら分らぬが我等は此の世に生れ出てより、生きつゝあるか、將たまた死しつゝあるか、死は急に來たるものか、また漸次に來たるものかといふやうな眞面目な問題を考へたりもしないではなかつた。つまり我等はどういふ落着になるものかと考へぬても無かつた。併し我等は「死」そのものが、さして重大事件でもなく、「死」といふものに、何も深甚なる意味のあるものゝやうに思はれなかつた。

迷夢を破るところの死—淺薄なる浮世の空望を辭むるところの死—高遠なる永久の希望を起さしむるところの死—我等は死に臨んで死は斯様なむつか

しいものであると思は無かつた。人世に於いてたゞ一回経験すべき最大事件たるところの死を認めたる時、「死は我等の経験すべきビジネスである。唯我等は之れに従事せねばならぬ」とばかり思つたといふのが正直なる告白である。「瀕死者は未來に就いて考へず寧ろ過去を追想するものである」といふが、吾人は生は何もの？死は何もの？だのいふ面倒なことは知らぬ。ソナことは考へたところで分りもしなかつたが過去の我といふものをしきりに追懐してゐたやうに思ふ。明日は死すべき其の前夜一盃の酒にコロリと横になつて見ても眠られず、あちらへ寝返り、こちらへ寝返り、それよりそれへと過去を追うてゐた。

「モウお母さんは寝てゐるだらうか？」などと何遍も思つた。裏の納屋で牛がコトン／＼とやつてゐるだらうなどと故郷の我家が繪巻物のやうに繰りひろげられて、我といふものがドウして此の繪の中の一人物であつたらうかといふ妙な感じもした。隣り近所の先生達も眼をバチクリしてゐたから、何か思ひ出してゐたのであらう。

子を思ふ親、親思ふ子、此の夜に於いて互に數百里を隔てつゝ、何等の感があつたらう？勇士一度去つて、また家郷を懐はずともいふが、雨に風に、子を思ひ、親を思ふは人情である。

家には病妻病兒あり、身は戦線にありて一刻を測られぬものが、果して幾許人であつたらう。しかし彼等はまた其の背後より「進め」と命するところの親、妻子のあるがゆゑに、那計り勇氣を増したであらうぞ。乳虎の勇は最も怖るべしといふてはないか。

劍山に於いて戦死した露軍の某歩兵中佐の死骸が飛鳥の如き一兵士の背に負はれて山を下り、とある岩陰に横たへられると、年僅かに五才の一幼兒が走り寄つて、中佐の死骸をゆり動かし、「お父さん前へ／＼！」と號令をかけたといふ話が残つてゐる。この幼兒こそ中佐の一子である。中佐の妻は良人の出征前に此の兒を遺して世を去つた。中佐は官命なれば黙しがたく、歐露を去つて旅順に向うたとき、愛妻が遺愛の幼兒を伴ひて、晝は馬の鞍に乗せてあやし夜は馬槽に入れて寒き夢を結ばせたとか。中佐が旅順に入つてからは、練兵にも砲臺

へも宴會にもこの幼兒を離さなかつたさうである。劍山恢復攻撃の日、幼兒もまた従つて其の麓に在つた。中佐の遺骸が馬脊に縛りつけられて旅順へ歸つたとき、幼兒もまた父の遺骸と共に鞍上に在つて、凱旋將軍の如くに歸つて來たといふことである。

話は八月十八日より四五日ほど後のことであるが、第一回總攻撃中、東鶏冠山のある地隙に一人の兵士が僵れてゐた。頭の繻帯で包んだ上に、血が一面に浸み出て、丁度酸漿のやうになつて、二目とは見られぬ有様であつた。近寄つて見るとまだ息があつた。遠山布教師は彼を抱き起し、水筒をはづして其の口を濕してやり、「氣分をしつかりなさい、苦しいですか？」と聞いたら、彼は「何もいふことはありません。」「何もしつぱりと云つたが、でも何か言ひたさうにもしてゐるので、遠山君は重ねて「あなたにはコンナ立派な働きをして、カウなつたのだから、佛様は御慈悲の心を

以て、あなたを護つて下さる、お念佛をお唱へなさい、安心をなさい。」といつて、暗に最期の迫つてゐることを告げた。彼は點頭いた。併しいひかねてをつたが、思ひ切つていふといふやうな風で、聲を潜めて、一言「國へ歸りたい」といつた。國へ歸る！勇士戰場にありて何故家を思ふぞ！未練？臆病？否、未練といふも臆病といふも、それは時による。力のあらん限り、魂限り、敵と戦ひ、奉公の義務を盡し了つて僵れたものが、血は流れ、命は絶えんとして、過去を思ひ郷を思ふは人としてあるべき情念である。清き涙——愛の涙——忍ぶ涙——この暗涙一滴こそ、故國に眠りもやらで、遠く征戰の人の身を憂ふる親に、妻に、子に對する最後の暇乞ではないか？

遠山君は彼が「國へ歸りたい」といふ一語を聞くと、目に袖を蔽うて、「尤もだ」と聲も潤んだが、これではならぬと勇氣を鼓し、聲を勵まして、「軍人が一度は國を出た以上は、ソナナ女々しいことをいつてはいけません。あなたはモウ逆も此の世では、お國の方に逢へませぬ。よく觀念をなさつて、サア私と一しよに念佛を唱へましやう、南無……」といひかけると、瀕死の彼は苦しい息の内にも滿

身の元氣を起して、「私は……女々しい者は持つてゐません。けれども……」といつて彼は遠山君に縋りついて、口を耳元に寄せ腸を絞るやうに、「私は國へ残して来た子供に、一目逢つて死にたい。」といつて嘔り泣きしながら、遠山君の肩に倒れかゝつた。死に際し己れの愛するものを残して逝くのは、人の最も苦痛とするところである。彼が死に迫つて郷里に残した我子を思うたは、死を恐れ、たにあらざして、これぞ親の至情が發したのである。愛は死よりも大なるもの、人が其の職分を成し遂げて將に死なんとするとき、我を彼岸に導く天使の如き愛兒を思ふことは、清き生涯の最後をして、最も光輝あらしむるものではないか。この兵士は今井國吉といひ、遂に野戦病院で息を引き取つた。

明日の朝から總攻撃といふ八月十八日の夜は、あれやこれやと感慨に耽つて夜も眠られなかつた。煙草の煙を輪に吹きながら、悟つたやうな悟らぬやうな種々な感慨に一夜が明けた。コンナ晩には、日頃口にせぬものも煙草はのんだ。曾て日清戦争に従軍した某將校が、戦争には何を忘れても煙草だけは持つて行かぬといけぬ。攻撃前や、敵前で、煙草を吸ふと、馬鹿に膽が据るものだといつた

ことを聞いてををつたが、實際氣の据る据らぬはさて措き、かゝる時には煙草の煙はゆかしいものである。一本の巻煙草も、切羽つまつた時でないといつてはなぬのである。けれどもモウこれが此の世の見納めになるかも知れぬといつては、一服ナンとかカとか理窟をつけてはまた一服心細い煙草であつた。一本でも落ちたのを拾ふものなら、敵の首でも取つたやうに喜ぶ。誰が落したのか、届けてやりたいなどと思つたりするくらゐである。雨のショボ／＼降る夜、マア一服と袋から引き出したが、ツイ落してしまつて、ドウ捜しても見つからない。翌朝見るとピツシヤリと薙刀のやうに踏み付けられてををつた時などは、泣きたくなつたくらゐである。

折角仕舞ひ込んで置いて使はなかつた香水をあびるやうにふりかけて喜んでゐるものもあつた。香水もカウなると贅澤物ではない。其のゆかしき香は我身ながらも頼もしく思つたりしたのである。昔は武士が戦死の覺悟には兜の中へ伽羅を焚き込んで首が人に渡つても恥かしからぬやうにしたといふが、マアこの筆法であつたらう。

また赤シャツを着てゐるものが澤山あつた。昔の武士は、白い下衣に血を浴びたのは見苦しい死様であるによつて、下衣には赤いものを着たといふことであるが、我等の中には赤シャツを着てゐた嗜の良人も少くなかつた。また軍刀にも日本刀の作り其の儘のがあつたり、鐵櫃からでも引張り出して来たか、軍扇などを持つてゐる人もあつた。

八月十六日であつた。山岡少佐は軍使となり、要塞守兵に向つて、我が天皇陛下の思召を傳へんため、水師營南方墓地に於いて、露軍參謀長レイヌ大佐と會見をした。陛下は旅順要塞の總攻撃を遂行せらるゝに先だちて、非戦闘員を兵火の惨害より免れしめたまはんとの大御心を以て、時の參謀總長山縣元帥を召され、要塞内非戦闘員救助の法を講じた。後總攻撃を開始すべしとの畏れ多き御詔を賜はつた。山縣元帥は感涙に咽びつゝ、直ちに之れを滿洲軍大山總司令官を経て、乃木第三軍司令官に電命した。山岡少佐は乃木大元帥陛下の聖旨を奉じて軍使となり、露軍に使したのである。其の大意は、我が大元帥陛下には至仁至慈の大御心を以て、旅順口要塞内に在りて、戦闘に關係なき婦人小兒、僧

侶、中立外交官、外國從軍將校、其の他非戦闘員を砲火の惨害より免かれしめんことを望ませらる。貴官は避難を望むものを青泥窪に護送し、該地碇泊場司令部に引渡すべしといふのであつた。一體要塞を攻圍するに方つて、要塞内て物を食つてゐるものは、犬か猫でも、要塞外に出すことなくして、糧食の減耗を速かならしめ、陥落の時機を早めるといふのが原則である。然るに旅順要塞の運命は、我軍作戦の全局に至大なる影響を與ふるものであるがゆゑ、速かに之れを我が掌中に收めねばならぬ時にありながら、陛下の大御心が敵軍の抵抗なきものゝ身の上までも及び給ふたとは、いかにも尊き慈仁の御計ひである。我軍はこの聖旨を傳ふると同時に、左の如き勸降狀を發した。

「旅順口の光輝ある防戦は全世界の稱賛を博するに足る。然れども孤立の要塞にして、優勢なる陸海軍の包圍を受け、また適當の期間内に救援の來たるべき望なきものは、其の指揮官にして如何に智謀あり、且つ忠烈なりとも、また其の兵士にして如何に勇敢なりとも、到底陥落を免かれざるものとす。我軍の總攻撃準備は已に整ひ、遠からずして其の發動を開始すべし。而して一旦

之れを開始するときは、旅順口の運命も亦知るべきのみ。此の極際に至り、閣下に告ぐるに閣下にして談判に意あらんには、今日こそ即ち其の時機なることを以てするは、人道に對する予等の義務なり云々。

總攻撃の機は既に熟したり、無益に人命を傷ふことを避けんとすれば、今の時を以て降参あるべきこと——一旦攻撃を開始したるからは、全要塞を陥るゝ迄は其の手を緩めぬこと——また申すまでもないが、文明戦争の規約を嚴守さるゝこと——豫め妥協したる條件に依つて開城をせんと、無條件の降参をなし、又は亂雜に實力に屈服するとの間に大差あるは、閣下の軍人として承知せらるゝところ、後の場合にありては、總て公法の許す範圍内に於いて、克捷軍隊に屬する總ての手段を假借するところなく、實行せざるを得ざるは、固よりいふ迄もない事といふ意味の一書を添へて露軍に使したところが、露軍では大分悲觀的の意見と樂觀的の意見とがあつた。日本軍がかう落着いて、「降参するなら今ぞ攻撃を始めたが最後、もう何が何といつても、金輪際容赦はならぬ。」などと、これではドノみち旅順も永いことは無からうといふものもあれば、日本軍はこれ以上の攻撃

は仕兼ねると見え、餘程手を焼いてゐるに違ひない。嚇したりお爲ごかしをいつたりして、何て承知がなるものか。日本軍も其の實弱つてゐるに相違ないから、今の中こちらから突き出てやらうか、一番露軍の意氣を見せずばなるまいなどといふものもあり、中には返事などやるに當るものか、寧ろ鐵拳を送れと、敦圉いたものもあつたが、それでは軍人の禮に缺けるといふので、翌十七日、山岡少佐が再び軍使となり、軍参謀長伊知地少將以下が土城子で回答を待ち受けてゐると、午前十時露軍の軍使がやつて來た。ステツセル・スミルノフの兩將軍及び太平洋艦隊司令官ウクトムスキ、公爵の連署で、「貴國皇帝陛下の慈愛は、我等の深く感謝を表する所なれど、これ露國の名譽、威嚴と相容れず。また旅順の現狀に照して正當にあらざるを以て、詮議の目的物たることを得ず。また非戦闘員を自由に通過せしめんとする閣下等の懇篤なる提議を利用するの不可能なることを拜告するの光榮を有す。」と云ふ、追がに立派な回答であつた。つまり我には聊か所信あり、折角のことだが御斷りするといふのである。我軍が砲撃を通告したのは、先づ降参の意志の有無を訊きたまへ、露軍が故なく我が勢力下

に屈するものとは勿論思つてゐなかつたのである。軍使は單に 聖旨を傳へるにあつたので、開城勸告は謂はゞホンのつけたりで、ドウてもよいといつたやうなことであつた。一體砲撃豫告は、一般戦術の原則から見ると、不意に敵を襲撃し、先制の利を占むべき趣旨に背く譯であるかも知れんが、要塞の如きは、今日やらうと、明日やらうと、格別機会を逸するといふ譯でも無いから、「明日から撃ちますぞ、大ぶん薬が利いてゐるつもりですから、御用心なされ」といつたところて何の差支も無いことでは、男らしい戦の前振である。

「聊か所信あり」と露軍は悉く守線に就いた。我軍は「然らば」と軍刀の櫛に手をかけて、氷の刃を引き抜いた。大砲にも小銃にも、彈丸を込めた。「撃て！」との號令は、將校の口より迸り出でんとして、機會は迫つた。舞臺は俄かにめざましくなつた。

第二十二 死時の安心

十七日はひどい雨であつた。雨全體が一本の棒のやうなとてもいつたらよいか、ドシャ降りだの沛然たる雨などいふ、まだソナナ優しい雨でなかつた。十八日から砲撃開始の筈であつたが、雨で砲車の輪が地に喰ひ込んで動かなくなつたから仕方なしに止むのを待つことになつた。幸にも翌日はカラッとした日本晴であつたから、攻城準備作業もドン／＼抄取り、これならばといふので、十九日を期して攻撃開始といふことになつた。

露軍はドウかといふに、軍使の往來あつて後、ステツセル將軍は部下一般に對して、

「名譽なる旅順の防禦者に告ぐ。」

本日大膽なる敵は軍使山岡少佐を致し、我に降服を勸告せり、我が祖國の名譽を擔へる我軍の之れに對する回答の當に如何なるべきかは、諸子の既に熟知しある所なるべし。予は即ち絶對に之れを拒絶せり。予は諸子の勇武に

信頼す。諸子須らく各自の信仰及び我が尊敬措かざる露國皇帝の爲に奮闘せよ。神は我等を保護せん。」

とかやうに「要塞の明渡を乞ひたる日本軍に鐵拳をくれたり」と慷慨莊重なる訓示を發した。各陣地ではあちらでもこちらでも話の題目は勸降問題で持ち切つてゐた。そして聊か祝意を表すべしといふので、焼酎を傾けて陶然と酔つて、十七日の夜は雨に降られながら寝てしまつた。これより三日を出てずして世界は端から端まで眼を丸くし、毛髪を立て、悲惨なる戦鬪に驚いたが、その騒動を誰も豫知するものはなく、日本兵も天幕長屋で眠り露兵も砲臺で眠り、黒き幕は靜かに下りて、雨が獨り威を逞しうしてゐた。我等が目前に迫る戦鬪に臨むべく感慨多き夜を、あちらに寝返り、こちらに寝返りしてゐるうちに、無邪氣なる露兵も胸より十字架を下ろして、また熱心に祈禱したてであらう。我等の多くは御守を持つてゐた。八幡様の御守―金毘羅様の御守―水天宮の御守―稻荷様の御守―彈丸除の御守だの、無病息災の御守だの、何だのかだのと、いづれも難有い條件のついてゐる御守を持つてゐた。東本願寺からは銘々

六字の妙號を貰つた。予は釋賢誓といふ法名から念珠まで戴いたから、迷土の旅の用意は出来てゐた。

戰場に在りて、月に雨に心靜かに人生を思つて寂莫を感ずるのは、征人の情である。我等はこゝに及んで深く人生の意義に惑ふやうなこともなかつたが、されど我等が逆旅の安息所たるところに、或る強き力があると思つたのは、何人とも否むことの出来ぬ事實であらうと信ずる。これが宗教といふものか何といふものか知らぬが、我等は寂莫たる身の上に、一種の強き力を感じたのである。人間は誰しもさうであらうと思ふが、「いや孝行もするつもりだが……もつと親にも安心をさすつもりだが」といひ／＼時は去つてしまつて、いざとなつた時に、「しまつた。もつと早く孝行をして置けばよかつた。もつと早く親にも安心させて置けばよかつた」といふことになる。即ち生死の境に入つて、始めて懺悔が始まる良心の苛責にも堪へぬことになつて、未來などいふことも、何となく眞面目に考へ出す。宗教とはコンナものをいへば云ふのかも知れぬ。人生憂喜苦樂するところ甚だ多しと雖も、死に過ぎたる大事は無。我等は

今かゝる危急の機に迫りて、不用意ながらも死することは決して難きことではないと思つてゐた。只生死の際に蒞み、惑はず、偽らず、畏るゝ所なきかドウかと疑つた。宗教に就いて殆んど何事をも思はなかつた我等も、生死の境に臨んで聊か安心を得てゐると信じたのは、遅播き乍ら人間が眞面目になつたためであらうと思つた。

大黒大尉の夫人は頗る熱心な門徒であつた。豪放磊落の大尉に、軍人は生死の境に立つ身なれば常に佛法を信じて、萬一の時に後れを取らぬやうに心掛けねばならぬと、信仰を促すことに甚だ努めたが大尉は、「ナアに！ソナ坊主臭いことは、俺は大嫌ひぢや。」といつて宗旨の話などが出る時には、いつも嫌な顔をして、テんで相手にならなかつた。そのうち動員があつたので、夫人は一層熱心に佛法を説いたが大尉は耳を籍さず、其の儘出征してしまつた。

これにも懲りず、感ずべき夫人は手紙のたびに、「戦死せらるゝといふことは、よく／＼覺悟してをります。家のことなどはドウなりませうとも、露ほども心配に及びませぬから、跡に氣懸りなく、御國のためにお盡し下され。只此の機に

臨んで、切に御願ひいたしますことは、日頃うるさく申上げました通り、心靜かに果無き現世に惑はず、未來世に新しき生涯のあることを思つて、どうぞ佛になつて下さるやう。これが妾今生の御願ひで御坐います。」と懇々と大尉に書いて送つた。それが決して三度や四度ではなかつた。國に在るときは、「何！俺には佛も糞も無いのぢや。」といつてをつた大尉も、夜深うして塹壕の内に在るとき、月清き露營の枕に凭るゝとき考へるとはなしに、夫人の言葉の節々が頭に浮んで來ることも多かつた。大尉は十二月十三日に遠山布教師と逢つたのに、其の時は何の話も無しに別れたが、十五日になると、一寸御苦勞ぢやが露營地まで來てもらひたいと、わざわざ遠山君を呼びにやつた。

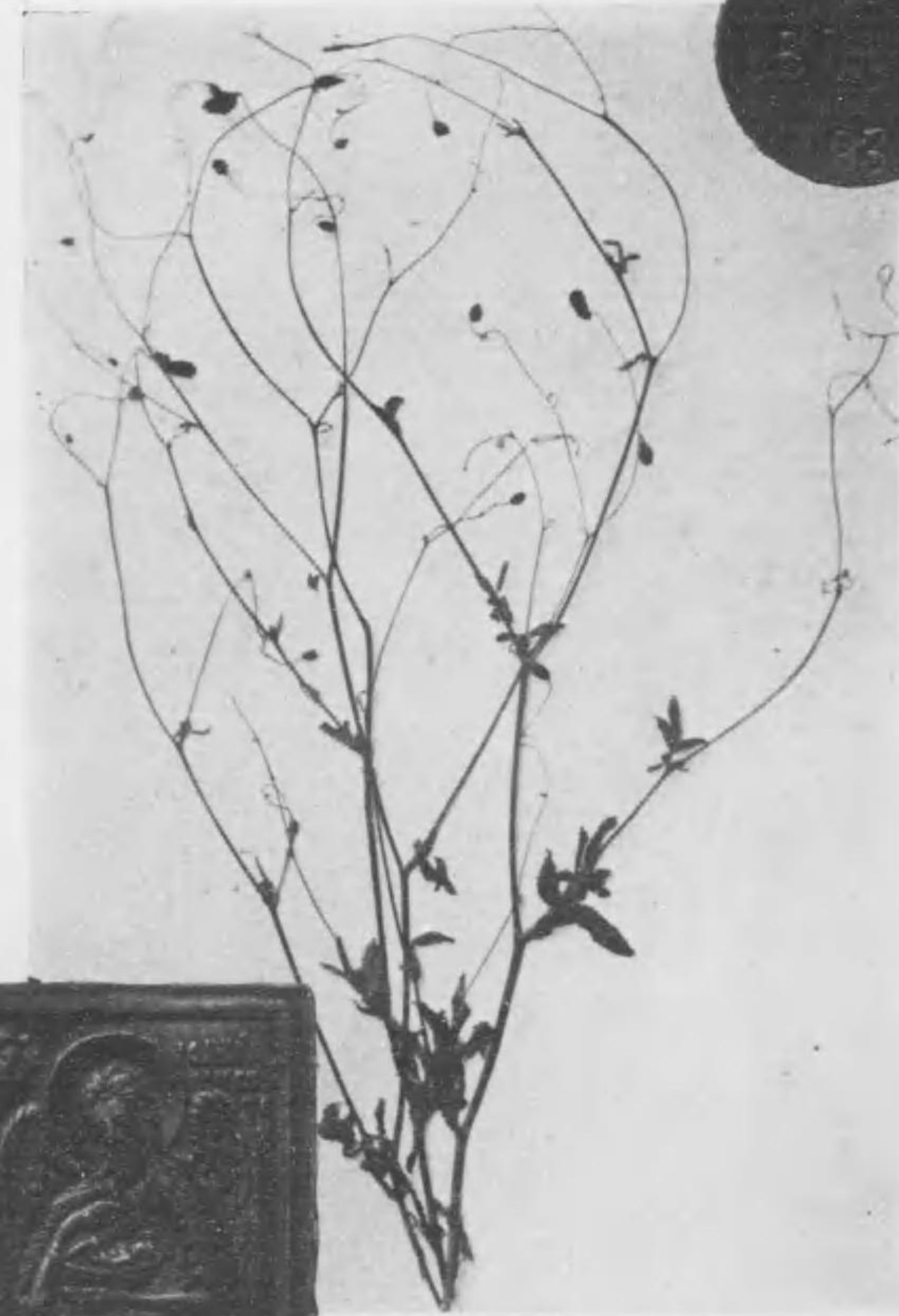
遠山君と大尉とは毛布を被り、高野豆腐をアルミの鍋に入れて煮ながら食ひながら、「一體遠山さん、佛法でドンナものですか。」などと尋ねた。遠山君は「左様佛法でドンナものといはれても困るのですが、マアゆる／＼今晚は談しませう。」といつて頻りに其の道を説いた。さうしてトウ／＼夜を徹した。霜が下りて雪達摩のやうな二個の人影は、身動きもせず語り明かした。大尉は最早

縁なき衆生でなく、何物か偉大なる力に觸れたことはいふまでもなかつた。十日からは北砲臺の攻撃があり、大尉は第一回の突撃隊にも選まれ、第二第三回の突撃隊にも志願して、之れに加はつたが命に別條がなかつた。が併し此の十日の夕方大尉は自分の軍用行李を開けて、頻りに何か調べ物をしてゐるやうであつた。丁度そこへ遠山君が通り掛つたので、「大黒さん、何をしてお出でですか。」と尋ねたら、「遠山さんですか。いやナ、今すぐにすみませうから。」といつて振り返つたが、あとで大尉は遠山君に、「一昨日は難有う御座いました。私も妻の言つてくれたことが身にこたへたやうであります。唯この機になつて私は妻に、私が佛になるから安心してくれといふことの出来ぬのが残念ですが、今まで私の考へがこゝに到らなかつたのは、私が無頓着であつたのだから、今更致方がありませぬ。遠山さん、昨日あなたのお話を聞いて、私は妻の日頃アンナにいつてくれたことが染みく／＼と胸にこたへました。死に臨んでコンナ後れ馳せな考へもするやうになりましたが、それでも私は立派に佛になつて、あなた並びに妻の志に酬いたいと思つてをります。イヤいづれ明日砲臺でお目にか

かりませう。モウこれがお別れてしやうハ、ハ、ハ」と目に涙を含んで、淋しき笑ひを洩したが、十八日午後一時決行すべき砲臺の爆破が、途中電線の切れたために、一時十二分になつて電氣を通ずると、轟然爆然北砲臺も地鳴りがして、噴火山の如き凄じき光景となり、味方の攻路も埋まつてしまつた。午後三時頃になつて負傷者がぞろ／＼歸つて来るうちに、將校の死骸を擔いで歸つて来たものがあつた。「それは誰ぢや？誰がやられたのか？」と聞いたら、大黒大尉！大黒大尉は右肩を打たれて、手がブラ／＼になつてゐた。二十日大龍溝で火葬に附したが、遠山君が遺骨を携へ、聯隊の所在地へ歸つて来て、軍用行李を開いて見ると、襦袢にも、服にも、ハンカチーフにも、一々紙燃して十文字にからけて、一々何の誰へ片身と札をつけてあつた。細君の熱心なる感化、遠山君の信切なる導きによつて、大黒大尉は遂に佛となつて、畏れず、惑はず、欺かず、永く静かに光輝ある眠についたのである。

深き悲哀の淵に沈める人の心を慰め、又は人をして和平の裡に従容として死に就かしむるが如きは、到底理窟や何かで決定されるものではない。雨霰の如

くに降る弾の中を笑つて進んだりするのは決して理窟でない。眞面目に考へれば誰でも弾丸の中を潜るに氣持のいいものはあるまい。飛彈爆鳴を物の數ともせず、呵々大笑しつゝ、大手を振つて歩いたりするのは馬鹿か氣違より外に無い。けれども我等は一體彈丸が降つてゐるのか、降つて居らぬのか、彈丸といふ威念が全くなかつたのである。たゞ眼中に映ずるものは、巨人の如く立てる砲臺と、惡魔の如く囁く敵兵の顔とのみであつた。普通の理窟から推しては出來ぬことも、我等は之れを敢てした。一體人は非常の時には非常の力を出すもので、平素は反對觀念の抵抗のために其の力を表はすことは出來ぬが、非常の時は一尙專念の自個暗示—兎に角宗教みたやうな力に由つて、我等は死生の境を超越することが出来るのであらうと思ふ。



露兵の認識票

(うかもれわ) 草夏の場取

ンコイアの兵露

やつて来る。我軍とても無論同じことであつて、一隊の指揮官の後には、早や交代の指揮官が控へてゐるといふ有様であつたが生に在つて生を忘れ死に臨んで死を恐れざる斯様な行動は大いに宗教の力によりて助けられてゐたと思ふ。否宗教が獨り人心を支配してゐたのであると予は思ふ。

露軍の退却は、予は之れを見事な退却といふに躊躇せぬのである。喧嘩をして横町へ遁げ込むやうなソナ遁げ方をせぬから豪いと思ふ。それこそ堂々たる退却である——退却に堂々たるは少し變だが——一體退却ほど志氣の頓挫を來たすものはないので恐怖心の生ずること退却に及くものはない。その恐怖すべく、戦慄すべき退却に大手を振つて遁げる、敗走でなくて背進する露軍は指揮官の號令や何かで動くものでない。唯一つ精神的指揮者が背後に在つて指揮するに由るので、將校の號令よりも僧侶の號令、十字架の命令が如何に尊いかわらぬのである。露軍の従軍僧は、友軍の退却を見ると、後で大きな十字架を振り煽いださうである。すると今まで退却しつゝあつた露軍が、また再び振り返つて逆襲をしたことがあつたともいふが、海嘯の如く追はれて還る露軍の前に

立ちふさがつて、錦欄の袈裟をかけた軍僧が、黄金で造つた十字架を煽いてゐるといふのは、繪でも見るやうな心地がする。露軍の兵隊は、金光燦爛たる十字架を見ては、再び踵を回して進まずにをられなかつたに違ひない。かゝる勇敢なる軍僧中には、十字架を抱いたまゝ、戦死したものもあつた。日本軍でいへば、差當り成田不動の護摩札でも振り廻すところである。日本軍にはソナ御用もなかつたが、露兵の給養品中には、アイコンや十字架があり、皆一つづつ持つてゐたからゐるから、何よりも十字架が難有かつたのである。露兵は何でも能く祈る兵隊で、何かといふと直ぐどこへも跪き、胸に十字を切つて祈るのである。砲臺の中にも聖像が祭つてあつたぐらゐて、予が旅順へ往つた時、白玉山の裏であつたか、何でも大きな砲臺みたやうな仕掛の山があつたから、あれは何だと聞いたなら、教會堂の敷地だといつた。正教の大寺院を建立するつもりでゐたらしいのである。併しトウ／＼出來上らぬ先に戦争になつて、其の儘になつてしまつたが、露軍が滿洲に足跡を印したるところには、必ず教會堂ありといつた式で、何でも耶蘇を拜み倒してしまふ兵隊と見えた。

可憐なる露兵は、月影くらき夕べ雨のしと／＼と降る夜、砲臺の陰で、胸から小さい十字架を下ろして、手を組んで祈禱してゐたであらうと思ふと、何となう淋しくもまたゆかしくも思はれる。

太白山の戦後、我軍の戦場掃除隊が死體收容に出掛けて、あちらこちらと死骸を搜索して歩いてゐるうちに、高粱畑の中に正しく膝を折つて坐つて、うつ俯しに斃れてゐる者があつた。肩に手をかけて引き起して見ると、彼は合掌してをつた。ノト見ると、其の前の高粱の下葉に錦欄の守袋を懸け、其の下に水筒を少し土にうめ込んで、それに高粱の穂が二三本さしてあつた。彼は胸に血が入染んでゐたから、胸を撃たれたとき、最早命の非なるを覺つて、心靜かに形を繕つて合掌念佛して死んだものと見える。少しも取亂さず、しづかに目を閉ぢた彼の態度は、何たる大往生であらうか。予は常にかう思つてゐる。生死の何のかのと議論する輩に、果して死に就くこと、宛も大道を行くが如きものがあらうか。さやうなものが果して彼の高粱畑で往生を遂げた兵士の如くに、從容たる死を求むることが出来るであらうかと常に疑つてゐる。この兵士の如きは、何に譬

へんやうも無い見事な往生を遂げたのである。立派に往生の素懐を遂げて彌陀の淨土に歸したのである。彼が負傷するとこの高梁の中へ来て靜かに上衣の胸をひらき守袋を取り出して水筒の水を供へた其の様子が目の前に見えるやうである。この兵士の死骸を拾つた一同は唯呆然と佇立して涙を流さぬは無かつた。大勢の中には随分齒を食ひ縛り虚空を掴んで足掻き藻掻いて死ぬるものもあつたが、コンナ安樂往生をしてゐるものを見ると何となく尊い感じが湧かずにをられなかつた。

竹本久太郎といふ兵があつたが、なんでも十二月十日の日であつたとかいふことだ。夕かた遠山布教師の所へやつて来て懐から財布を出して、「この中に四圓八十錢入つてをりますから、どうぞ之れを御本山へ納めて下さい」といふから遠山君は、「本山へ納めるのもよろしいが、それよりか親に送つて上げたらどうですか」といふと、「私も親に送つたらとも思ひましたがこの金が親の手へ届くまでには私もモウ戦死をしてゐます。して見ると之れを送つたばかりに思ひ出の種となつて却つて親に苦しい思ひをさすやうなものでありますから、

どうぞ本願寺へ納めて下さつて私の同向をお頼みいたしたうあります」と事をわけての願であつたから、遠山君も、「それではこれを五圓にして送つてあげましやう」と二十錢を加へて京都へ送つた。四五日すると竹本は几帳面にも遠山君に二十錢を返しに來た。これはマアよろしいといつても、それは私の志が通らぬといつて聞かなかつた。これが攻撃の前夜であつたが、トウ／＼戦死してしまつた。自分の同向を頼んで死んだ迷亂顛倒せざる深き覺悟に對して耻しく思はぬものが、果して幾人あらうぞ。

露兵には随分迷信家が多いやうだが、我々の間にも迷信家は中々少くなかつたやうである。戦争前後には、お社の鳩がゐなくなつた、あれは神様の御使で戦争にいつたのであらう。イヤ八幡様の神馬が姿を隠した。あれも戦に行つたのであらう。イヤ今年に限つて田螺が生かんが、どうも戦があるに違ひない。イヤ何ぢやかぢやとエライ評判もあつたが、戦地でソナ鳩や田螺の御加勢に出會つたことも無かつた。併しカウいふお伽噺を聞いた。ある騎兵斥候が河を渡らうとすると、美しい女が水際で洗濯してゐた。斥候は心にも掛けず、馬を

河に乗り入れんとすると、後から其の女が呼びかけて、そこを涉つては危ないから、河下から涉りなさいといふので、さうかといつて韁を引いて馬首を向け直すと、その女が白い鳩になつて河下の方へ飛んで行つたさうな。此の白い鳩は、お社の御使鳩であつたとしてもいふのであらう。

また或る村では、寒中に三尺もある大きな筈が生えたといふので、ナンでも大變があるに違ひないと、四方八方から見物人が引きも切らなかつたことがある。また或る村では、農家の竹藪の四尺四方の狭い處に、ゴチャ／＼と筈が見事に八本生えた。ところで其の中の六本は腐つてしまひ、二本がズン／＼伸びた。村の長老がいふことに、六本は露國で大敗けぢや、二本は日本で大勝利ぢやといふて喜んでといふ話もあつたが、それはどうてもよいとして、しかしコンナことも強ち馬鹿にしたものでもないと思える。

兵隊で千人結びといふものを持つてゐるものが非常に多かつた。動員の前後に停車場や町の角の多勢人の集まつてゐるところで、手拭くらの大さの白い布と針に糸を通してあるものを出して、「御面倒て御座います、が御願ひ致

します。」などと一人づゝ一人づゝ糸を通して結目をしてもらつてゐるのを見たことがある。さうして之れを結ぶのは女に限つてをり、千人の女が結ぶのださうである。甚だしいのは、女學校の門などへ持つて行つて生徒の歸りを待ち受けてゐるのもあつた。此の千人結びは何にするかと思ふと、彈避けになるのださうである。腹巻にもしたり、服の裏へも縫ひ付けたり、襦袢の上へ襟にもしたりしてをつた。この千人結で可笑しかつたのは、予の聯隊で戦死の魁をやつた何某といふ兵が、血まみれになつて擔架で擔がれて山から下りて來たとき、この千人結が擔架の外に垂れてゐたのを見て、イヤ千人結びは危いと俄に評判が悪くなつて、誰いふとなしに、コン／＼と取つて捨てたものもあつたやうである。折角女千人が一心を籠めた、彈の中らぬといふ重寶なお禁厭が、一時どこにもこ

こにも棄てゝあつた。また、擡拾擡指といふ、何と讀むのか知らぬが、この四文字が帽子の裏から服の裏から背囊の裏から、ベタ／＼と墨て書いてあるのを見たが、これも例の彈避けの禁厭ださうである。此の字にドンナ因縁があるのか知らんと思つてゐたら、

近頃ある雑書に「ソナ」ことが書いてあつたから、序に大要を書いて置く。徳川
吉宗が一日淺草野へ鷹狩のをり、草叢に居た雉子を見付けて一矢を放つたのに
其の矢は羽根をすれ／＼に鳴り響いて飛んで行つたけれども、雉子はビクとも
せぬから、これは不思議と、また一矢を放つたが中らぬ。雉子は依然としてゐる
から、ナニ猪口才など鐵砲を放つたけれども動かぬ。とう／＼網を張らして捕
りはしたが、よく調べて見ると、此の雉子の左の翎の下に、この捺拾捺指の四文字
が染め込めてあるやうにあり／＼と見えたから、奇怪に思つて放つたといふこ
とである。それから此の字に似たものは、武運の守りになるとあつて、御供の人
に寫させられたのを、後の世で武士が武運長久の禁厭にしたのであるといふこ
とだ。昔は子供の護身符といつて、此の字を書いて襟に下げてをつたものもあ
つたといふことである。また字の禁厭となることはいくらもあるものと見え
て、範箴乙の三字も疫病除の符であるとして、武人が戦場に持つて行つたもの
あるといつてをる。

苦しい時の神頼みではないが、兎に角宗敬といふやうな、ソナものを信ずる

るといふことは、身を死生の境に投ずる輩に取つて、必ず必要なことであるやう
に感じた。しかし其の道理に至つては、予の如きものには説明が出来ぬ。唯さ
う感じてゐるので、烟水練は實地の役に立たぬ生死の一大事を理窟や何かで極
めやうとするは間違ぢやと感じたことをこゝに書いたのである。

第二十三 泣いて戦ふ

二三四

八月十九日を迎へた。我が日本陸軍が銃後の力を著大に證明したところの第一回總攻撃の記念日となつた。この八月十九日七年後の八月十九日に於いて予は實に再び旅順に來つて、戦跡の殘壘に足を駐めたのである。

全滅！といふ語は旅順戦を語るところの代表語であつて第一回總攻撃戦況總て非なり。第二回總攻撃戦況總て非なり。第九師團全滅、第十一師團全滅といふ有様で、全滅は旅順戦の物凄いな名物であつた。旅順戦は取りも直さず全滅戦で旅順の運命は全滅によつて決定されたのである。

口でこそたゞ全滅といふが、旅順開城の日、高地の半面は露兵の死骸で青くなり、他の半面は日本兵の死骸でカーキ色になつたことを思へば、天地も悽愴として涙がある如く感ぜらるゝのである。全滅の一語は實に旅順戦を最も簡易に語るところの悲惨なる語であつて、萬斛の涙を含むところの文字である。

予が所屬聯隊の如きは一夜にして數千の兵員が忽ち殘兵患者、輕傷者等を集

めて僅々八九十名になつてしまつた。其の中でも戦闘に堪ふるものは三四十に過ぎなかつたであらう。この兵員を以てして最早如何ともすることが出来ぬ。予が加はつた第一回總攻撃の如き、予の指揮せし中隊は僅に七名を餘すのみであつた。それは後で知つたのであるが、唯それも生きてゐたといふばかりの、皆傷ついて再び戦線の役に立たぬところの七名であつた。聯隊長は幸に輕傷であつたが、一先づ生存者を纏めて大龍溝の谷地に引下り、岩陰に淋しき天幕を張つて、昨日にはる聯隊の非運を見て男泣きに泣かれたといふことである。幾千の銃狹が勇ましく國を出づる時、これが皆生きて歸らうとは誰しも思つてはゐなかつたらうが、一夜の内に殘兵總に八十名などとはまた誰が思ふべきぞ。聯隊長は多くの將校兵卒に取り殘されて、「俺は生きてをられぬ。一つの砲臺も取らずに、コンナに殺してしまつては申譯がない。俺が一人生き残つて何になる？」といつて泣いてをられた。けれどもまた思ひかへして、「三人が四人でも残つてみれば、これも聯隊は聯隊ぢや」と溜息をついてゐられたさうである。當時聯隊長の心事は如何であつたらうか。悲痛とも何とも思ひ出すたび

二三五

に涙が出る。

予が負傷して、野戦病院から擔架で、苦力に擔がれながら大連へ下がる時、苦力は荷物を擔いでゐるやうに、矢無性に走つて、擔架が引つくり返りさうになるから、「ハッ」と叱しながら足を緩めさせて、長嶺子といふところまで來ると、ここが鐵道の終點で、負傷者は此處から汽車に滿載されて大連へ輸送されるのであつた。予が汽車に乗せられやうといふ前線路の側の青い柳の樹の下へ苦力が擔架を下ろして休憩してゐると、今着いた汽車から歩兵の一隊がドヤ／＼と下りて來た。これはいふまでも無く補充兵で、これから戦線へ出掛けるのである。これぐらゐやつて來たところで、ドウなるものかと予は思つてゐた。すると其の隊の中から不意に

「旗手少尉殿が……」と一人の兵が叫んだ。

「どこに？」と皆いひ合したやうに、あちらを見たり、こちらを見たり、こそらあたり一面の負傷者の中を見廻してをつたが、予を見つけると、皆飛んで來て、

「旗手少尉殿！ やられましたか……」と呆然としてゐるから、予が「皆よくや

つて來た。お前等はこれから早く聯隊へ行つて、俺等に代つてシツカリやつてくれ……聯隊は昨夕皆やられてしまつたぞ……」といふと、彼等の中には早や泣くものもあつた。

「聯隊は皆やられましたか……さうして皆どうなりましたか？」小笠原大尉殿は御無事でありませうか？」「林中尉殿は御無事でありませうか？」と皆頼りにする中隊長や、小隊長の安否を尋ねるのである。彼等が頼りにして來た人は、最早此の世の人でなかつたりしてゐることを思ふと、胸が迫つて覺えず涙が頬を傳はつた。

「小笠原大尉殿は、野戦病院まで來ることは來たが、一時間もたゝぬ間に死んでしまはれた……」

「ア、小笠原大尉殿は、モウ亡くなられましたか……」

「ウン、立派に死なれたぞ……林中尉は一つしよに行つた切り、今に逢はんから、無論戦死したのであらう。」

だれも戦死した、かれも戦死したと話して聞かすと、彼等はア、と失心したや

うになつてゐるから、予は「お前等も残念であらうが、それも仕方が無い。皆さう失望してはいけぬ。コンナことを此處でいふのではなかつたけれど、お前等を見たと聯隊の様子を聞かしてやりたかつたから、ツイいつたのだが、これから聯隊へ行つたら、お前等は五人前も十人前もの働きをしてくれ。聯隊長も負傷せられたが部下をカウ澤山殺してナンて後へ下られやう？こんど来る補充兵と死に残りとて、屹度砲臺を取つて戦死者の仇を取らねばならんといつてゐられるのだから、シツカリやつてくれよ、頼んだぞ。」といつてやると、彼等は聲を放つて泣いて、「少尉殿しつかりやります。しつかりやります。」と口を揃へていふのであつた。

聯隊長が役にも立たぬ百人足らずの者をつれて泣く／＼病兵の看護やら、輕傷兵の手當をしながら、せめて一人でも早く元氣にせなければならんと思つてゐるゝ、哀れな岩陰に、今この新銳の補充隊が到着したら、ドンナに心強いてあらうと、予はそれを思つて泣いた。彼等の中には、「これは國を立つ時に貰つて來たのでありますが、モウ入りませんから食べて下さい。」といつて、雜囊から菓

子の袋を出して、負傷者にくれてやるものもあれば、「露兵も大分死にましたか。」などと聞いてゐるものもあつた。「國へ何も用事は無いか。」といふと、「ツイ私の内のにもお會ひになりましたら、無事に上陸して旅順の方へ行つたといつて下さい。」といふものもあれば、「イエ何もしふことはありません。」といふものもあつて、今から第一線へ行つて戦線へ就くものと、負傷して國へ歸るものとが、ここでコンナ別れをするのであつた。これ切り永い別れとなつたものも幾許人ぞ？實に夥しいことであつたらうが、入り代り立ち代り、この柳の樹の下で幾度かコンナ別れをしたことであつたらう。秋風が吹いて、柳の葉が黄ばんでも、旅順はピクとしなかつた。バラ／＼と葉が落ちて、雪が散つても、旅順はピクとしなかつたから、思へば凋落の秋の夕べに、荒涼たる冬の夜に、月に雪に、この柳の樹の下で泣いた當年の人、今日はた幾人か永らへて往時を追懐することであらうぞ！

十八日夜半の月は白銀山の上に昇りて、要塞と市街とを照らし、海上も陸上も、聞として聲なく、たゞ船渠の作業の音のみ、瀕死者の呼吸の如く、幽かに聞え、狼々

二四〇
として犬の吠ゆる聲のみ物凄く、旅順は總てに於いて静かに眠れる夜であつた。この静寂なる旅順の一夜は、遂に再び歸り來たらなかつた。この一夜こそ全露帝國の一隅たる旅順口に於いての最後の平和なる眠りであつた。十九日未明我が野戦攻城砲兵團は、其の數百門の火蓋を一時に切つた。この砲聲だけでも旅順は引き崩れるかと思はるゝほど壯大なるものであつた。併し砲彈が壘壁の上に破裂して白煙と濃褐色の煙と紅の如き火とが砲臺の端から端へ、炎々として野火のやうに立ち登つてゐるのを見て、一たまりも無く破壊されたであらう。守兵はどこに首を縮めてゐるのかと思つたは不覺て砲臺の上では我が砲彈が愛嬌よく砂煙を揚げてゐるに過ぎなかつた。流石の我が重砲野山砲海軍砲を揃へて打つても、砲臺の比類は痛いと痒いとも思つてゐなかつたやうである。守兵は連りと機關銃の引鐵を弄つて、いつても御出てなさいといつた風に待つてゐた。

砲撃のまゝ其の日も暮れ夜の暗黒は静かに幕を下ろした。すると敵の砲臺から探照燈がピカッと二つ、大きな眼の玉のやうなのがクルリ／＼と睨み廻してゐる。眼と眼との間から火の玉がスーと出たかと思ふとパツト開いて空中にマグネシウムの特燈を吊して乙なことをして見せる。これが光つたが最後、満月が雲間から顔を出したやうに、山も谷も晝のやうになつてしまふ。服が如何にカーキ色で、土色と一寸見分けのつかぬやうにしてあつても、この狼火が大アーク燈のやうに空中に吊るされると、折角夜暗を利用して秘密に前進せんとしても忽ち我等の黒い影を地上に投ずるから晝間よりも敵に著大なる目標を與へる。服がカーキ色だといつて影まで薄くするわけに行かぬ。尤も影が薄くなつては大變だが、この火花は勘定にあはぬ恐ろしい奴である。

此の日の成績はどうかといふと、我が砲撃の最高度に達したのは正午頃で、十五分間置きに一發といふ割合のが、二發となり三發となり四發、五發、六發といふ有様で、全線に通じて一分の息繼もなかつたのであるから、随分烈しく打つたも打つたものである。その重なる目標は、要塞の東北正面即ち盤龍山東鷄冠山方面にあつたので、敵砲にも少なからぬ損害を與へたやうであつた。望臺―露軍といふ大鷲巢山―の巨砲は露天砲で、二門ヌツと頭を突き出してゐたが此の日

二四一

の砲撃で、向つて右の砲身の頭を跳ね飛ばした。夕刻我が一弾が敵の兵器庫に落ちて大火災を起した。兵器庫の火光は露軍の背面に於いて恐るべき光を放つて各砲臺を照らしたから、守兵は皆顧みて戦慄したといふことである。軍隊と消防隊とは火の粉の中に飛び入つて鎮火に従事したが、清國時代から貯藏してあつた砲弾と火薬とが爆発したので、少からぬ負傷者も出来たといふことである。此の日最も敵に接近して大いに戦つたのは我が第九師團で、龍眼の旅順水道の水源地の北方に在る水道角面堡―貯水池砲臺―一名クロバトキン砲臺ともいふやうであるが、この堅固なる砲臺に向つた。午後五時三十分、三原大佐の率ゆる突撃隊は、先づ爆薬を以て鐵條網に數ヶ所の破壊口を作つて、何の苦も無しに通過したから、占めたりと思つたは不覺で、今まで沈黙してゐた露軍は俄かに頭をもち上げた。世界に於いて築城の巧を極め、防禦戰團の妙に達したものは露軍であると認められてゐる。日本軍をして何故障碍なく鐵條網を破壊せしめたか甚だ意を得ぬところの如くであるが、サウでない。守兵は機關銃の銃口を揃へて其の引鐵に手をかけてをり、心臓の鼓動は機關銃のそれよりも忙

しく躍つてゐる。けれども指揮官は鐵條網を通過する日本軍を睨みながら、一方に、「マダ、頭を出すな！」と狂ふ駒の手綱を控へてゐるやうに銃手を抑へてゐる。突撃隊がこれではしたゝかにやられると思つた鐵條網も、案外苦もななく破つて出て、まだ撃たぬ。砲臺前五十歩！まだ撃たぬ。三十歩！まだ撃たぬ。二十歩！これまでこらへてゐる守兵は、餘程度胸の据つた者でなければ出来ぬことである。併し露軍は、いつも此の手で引き寄せられるだけ引きよせて置く。我慢のなるところまで我慢する。そして攻者が雷の如き勝鬨の聲を揚げて、今一步で砲臺を乗取るといふ瀬戸際で、「ソレといふので頭を出して機關銃に向け、消火栓から水を噴き出さすやうに、彈丸の掃射を喰らはすから、一發ですむところでも、五發も六發も食つたり、前者を倒した彈で、また後者を倒すといふ有様で、一發の彈丸も數發の役目をして、片つばしから將基倒しに倒して、忽ち全滅の目に逢はせるのであつた。予が盤龍山で見たのは、砲臺に手をかけたが、砲臺の内に飛び込んでゐたり、敵の砲架を握つてをったりしたのがあつたが、皆この手でやられたのである。

第九師團の突撃隊が鐵條網を破つて、敵の砲臺に押し付けて行くと、敵は頭を突き出して、機關銃の銃口を我に向けた。すると天から降つたか、地から湧いたかと思ふばかり、俄かに途方もない大きい奴が四方八方から飛んで来て、突撃隊の頭をたゞきつけた。いふまでもなく要塞の大砲は、どこでもかしくても打たぬといふところは無いので、正射、斜射、大砲の頭さへ向ければどこでも打てる仕掛である。一隊の我が突撃隊を見ると、松樹山、二龍山、寺院砲臺、鉢巻山、東西盤龍山、鷄冠山、北砲臺、望臺、東鷄冠山、白銀山、H砲臺の各砲臺が齊しく起つて砲火を集中したから、目も明けてをられぬ有様で、バタ／＼と倒れ、瞬く間に黒胡麻を振り播いたやうに敵の砲臺の前へ撒布されてしまつたのである。生き残つたものは砲臺の直下に喰ひ付いて、右へも左へも後へも、一步も引くことも出来ず、ただ援兵の来るのを待つといふ有様であつた。この角面堡に向つた第九師團の突撃隊は、此の一戦に於いて其の兵力の三分の二を失つてしまつた。

明くれば二十日、戦況發展せず、僅かに最右翼第一師團方向に於いて、敵に肉薄し、石合戦と小銃戦とを交へて、一局部の敵を驅逐したるのみに止まつた。瀧つ

て十九、二十日に於ける露軍は、ドウかといふに、第九師團の龍眼北方角面堡に對して行つた突撃に對して既に地區守備隊司令官セメノフ大佐より、最早支ふる能はずといふ報告を、櫛の齒を引くが如く、スミルノフ中將の下へ發したけれど、僅かに増援隊の來たるに會うて其の位置を支ふることが出来たは出来たものの、露軍も亦危い瀬戸際であつたのである。

二十一日となる。第一師團は水師營南方の寺院堡壘に對して、盤龍山東砲臺を目標として位置し、第九師團はドウかといふに、午前四時四十分鐵條網の破壊作業の一隊は、敵が強力の電氣を通じた鐵條網を破壊すると續いて砲臺の直下の鐵條網の破壊に従事したが、皆打たれて死んでしまつた。併し兎に角にも突撃隊の進路が開けたので、第七聯隊は午前五時數梯隊となつて突撃したが、進むものも斃れ進むものも斃れ、死骸が敵の砲臺前に長い道を成して斃れてしまひ、聯隊長大内大佐も身に十數彈を蒙つて戦死し、大隊長悉く戦死し、中隊長以下幹部殆んど斃れ、旗手も亦死傷し、軍旗は旗竿が折れて僅かに負傷した一兵卒によりて捧持せられてをつたといふ慘たる有様であつた。第七聯隊は此の一戦に

於いて僅かに七十餘人を餘したといふ悲況に陥つてしまつたのである。我が第十一師團方面はドウかといふに午前四時歩兵第四十四聯隊は東嶺冠山北砲臺の外岸頂を目標として進んで豫て用意した携帶橋を砲臺の外壕に懸けたが向岸に達せず壕底に落ちてしまつた。突撃隊は躊躇すべき時でないの、ドン壕底に飛び下りて向岸へ駆け上らんとしたが敵の狂射を受けて死骸は壕底に散亂し傷者も遂に收容することが出来なかつた。かゝる有様で空しく時を過ぎし午後六時四十分になつたが師團長は、「第十一師團は假令全滅すとも師團名譽のために獨力を以て突撃を執行すべし」といふ命令を軍司令官から受取つた。かゝる命令を下された軍司令官の胸中は如何であつたらう？ 十人行けば十人死ぬる、百人行けば百人死ぬる、行くものも行くものも皆死ぬる。各所に於ける突撃は効を奏せず徒らに斃死部隊を横たふるの慘況に際して乃木將軍の胸中はドウであつたらう？ 思ふも涙の種である。將軍自刃の事、また是等に一因してをるてはあるまいかと思はれる。

予はこの時總豫備隊に在つたが小高き丘の上に登つて前面を見ると敵の砲

臺の前に鐵條網が横に一文字を引いてをり、それに黒い長い棒が山の上から下まで縦に引いてあつて、丁度鐵條網と十文字になつてゐるから、あの黒い棒は何であらうかと眼鏡を取つて見ると其れが突撃縱隊の斃死部隊であるのを見てギョツとしたのである。黒い棒の立つてゐるところは云ふまでもなく敵の砲臺でそこには眞黒に我兵が固まつて斃れてゐるのであつた。そして岩陰や砲彈ですくひ取られた窪みには、あちらに三人、こちらに五人と軍旗を持つてゐるものもあれば、國旗を持つてゐるものもありして、それが生きてゐるのか死んでゐるのか、身動きもせず、轉がつてゐるのが見えたときは、予は覺えずハラ／＼と袖に涙をはふり落して、「ア、皆かうして死んでしまつた！」と歎き、物凄き夜が羽翼を伸ばして、死者の上にも、瀕死者の上にも、負傷者の上にも、蔽はんとする。今にも雨の落ちさうな夕暮岩のゴロ／＼と轉がつてゐる丘の上に立つて泣いた。軍司令官も之れを見て泣いてをられた。師團長も、旅團長も、聯隊長も、皆之れを見て泣いてをられた。掛けがへのない兵隊を皆殺してしまつて、この先どうなる事かといつて泣いてをられた。嗚呼、旅順は實に誰も彼も泣く／＼戦を

したのだ。

二十二日夜零時四十五分に第十一師團長は軍司令官へ暇乞ひの意味に於いて、「師團は全滅を期して獨力攻撃すべしとの軍命令に基づき之れを實行せんとす。其の成否素より知るべからずと雖も或は悲惨なる状況に陥らんも計り難し。師團は唯々命令を遵奉するの一點に於いて突撃以て骨を曝さんのみ。」と報告した。また第九師團長は、「師團が數回の突撃も遂に其の功を收むること能はず今は唯殘兵を集結して唯一回の突撃を執行せんのみ。成否固より決し難し。或は効力無きに終らんか。」といふ哀れなる報告をした。突撃は生存者のあらん限り何十回でも決行するが遺憾ながら成功すまいといふ悲痛なる報告である。今より當時のことを思ふと皆涙の種で、かゝる報告を呈するの止むを得ざるに至つた師團長の心中が思ひやられる。二十二日拂曉第九師團の左翼隊は大突撃を行つたが聯隊長以下大隊長始め幹部みな殆んど戦死して、また如何ともすること能はざるの悲況を再びした。予が聯隊の中隊長某大尉の如きは部下の前に立つたまま、情に迫つて命令を發することが出来ず二人の小

隊長の手を握りて泣く、「予は最早こゝに生き残れる部下に對して前進の命を與ふるに忍びず。君等願くば僕と共に突撃せよ。而して聯隊名譽のため戦死してくれ。」と涙ながらに主従僅かに三人敵壘に向ひて突撃したが見る中に一人の小隊長が斃れ他もまた斃れ最後に中隊長も亦斃れた。この時部下は地隙から飛び出してまた中隊長の後を追うて突撃したが石に躓いたかと思ふのは前にのめり銃をあげたと思ふのは後に倒れて遂に一人の生存者をも残さなかつた。

二十二日拂曉の攻撃もかゝる始末で無益なる犠牲を供するに過ぎずじまひになつたのは残念な上にも残念で、いひやうがなかつた。これではいくら突撃しても奏功の見込も立たず大切な兵隊をムザ／＼屠るやうなものであるから何とか思案せざるなるまいと將軍幕僚額を鳩めて凝議してゐると何が導火線になつて思ひがけも無い奇利を博するものか分らぬもので、丁度午前八時頃に盤龍山東砲臺の東側に當つたところで敵の砲臺から四五間真下の窪みに今また死んでゐたと思つた二人の兵卒がムク／＼と動き出したかと思ふと、其の中

の一人が二抱もあらうかといふ大きな石をかついて窪みを飛び出した。見渡す限り一面の戦死者負傷者で埋まり、一人の來つて援ふ者もないのに彼の一兵卒は何をするのか。石を抱いて匍ひ出したと思ふと、ツカ／＼と走つて敵の砲臺に飛び上り、ズドンと其の石を投げ込んで置いて、チヨ／＼とまた元の窪みに走り込んでしまつた。そして此の二人の兵卒は暫く其の窪みにをって頭を出したりり廻してゐた。そして此の二人の兵卒は暫く其の窪みにをって頭を出したりり引込めたりしてゐたが、其の中に一人かグイと窪みを出て、舳のやうに斜面を駆け下りて、麓の地隙内に這入つてゐると、残りの一人も亦山を下りて、同じ地隙内に這入つてしまつた。石を敵中に投げ込んで歸つた兵卒は、何の積りてコンナ奇藝を演じたのか分らぬが、この勇敢なる動作が、盤龍山奪取の導火線となつたといふのも實に奇といはねばならぬ。之れを見て、此の正面の守兵は必ず夥多しく損害を蒙つてゐるに相違ないといふので、直ちに破壊隊を以て機關銃及び堡壘の一部を破壊せしめた。破壊隊の勇士は、一人も生を完うするものはなかつたが併しこの作業は功を奏した。この破壊によつて漸く足場が出来たので、

突撃隊は軍旗を翻して突入し、こゝに始めて盤龍山東砲臺東方面の突角を占領した。機會逸すべからずと、續々増援隊は繰り込んで來たが、敵は堡壘の一部を失つたけれど、なほ咽喉部に據つて一歩も退かず頭の上の望臺左手前の北砲臺横腹から、側防堡壘P堡壘即ち一戸堡壘―右手前の二龍山等より、シタタカに撃つて來るので、今にも危く見えだが、この砲臺の一角を占領する迄にも、幾千人の勇士を葬つてをるか知れぬものを、若し之れを投棄するの止むを得ざるに至つたならば、軍は將來如何にして攻撃を發展せしむべきか。第九師團長大島中將は、五家房北方の高地に在つて此の有様を見ると、竹内少將の後備第四旅團に増援を命じたが、後備第八、第九聯隊とも、P砲臺で昨夜來非常な損害を蒙つて、將校全く無きに至り、彈藥欠乏のため石礮を投じて戦闘したといふ有様で、戦闘力を有してをらなかつたから如何ともすることが出来なかつたのである。かゝる有様で午後の三時まで持ちこたへてゐたが、右の兵も打たれ左の兵も打たれ齒が抜けるやうにコロ／＼と砲臺の下へ落ちて行くので、心細さは一通りてなかつた。それにまた彈藥が足らぬといひ出したから、この先如何になり行くか、か

二五二
かる時の心細さは一通りの沙汰でない。今まで右にをつた兵卒が早やいつの間にかやらぬなくなつたり左の兵卒がウーンといつてフン反り返つたりするのは心細いどころではないが、薬盒に弾丸が無くなるほど心細いものはないのである。左翼隊長たる一戸少将は之れを見て、戦死者や負傷者の持つてゐる弾丸を拾ひ集めて僅かに急場を支へさしたといふ有様であつた。細帯所にある軍醫が傷者を顧みてゐる場合でないといふので自ら弾薬筒をかついて戦線へ運搬したといふやうなこともあつた。かゝる絶體絶命の有様で午後五時四十分まで持ちこたへたが、好機の乗ずべきものがあつたと見えて敢然として大突撃に移り、歩々抵抗する敵を驅逐して、遂に盤龍山西砲臺を占領するに至つたのは正に六時。この時既に敵の増援隊はフォーク將軍の手を放れて急行しつゝあつたが、我軍は彼の來着に先だつて東西兩砲臺を確實に收めたのは實に幸福であつた。

盤龍山を我手に收めたため、これより右には二龍山を打ち、左には北砲臺を打ちといふ方寸を以て攻撃することの出来る端緒を開いたのであるが、しかし難

戦も苦闘も實はこれからであつた。
八月二十三日の夜が來た。第十一師團は北砲臺及び望臺を目標として攻撃に従事した。歩兵第二十二聯隊と第四十四聯隊とは二十四日の未明望臺に向つた突撃し、一たびは此の地の主人公となつたが、敵の逆襲に逢ひ、劇烈なる格闘もしたなれど如何にせん左右皆斃るといふ有様で、遂に奪還せらるゝに至つた。天明望臺の斜坡にヒラ／＼と淋しく國旗の翻るのを見たが、其の國旗の下には一人の生存者も無かつた。予も亦望臺下に倒れてをつたのである。既に二十三日滿洲軍總司令官より、今日迄の激戦に於いて第三軍將卒の勇敢なるを明かに認む。設令如何なる犠牲を拂ふとも、一旦着手したる攻撃を中止することに勿れとの訓旨を受けながら、攻撃實行の上には事悉く志と違ひ、連日の激戦に於いて僅に盤龍山西砲臺を占領したのみである。しかも二十四日の突撃に於いて第十一師團は頗る悲惨なる情況に陥り、一師團は全部覆没せしが如く、其の状況明瞭ならず。之れより攻撃を繼續すること能はず」といふ報告をするやうになり、軍も遂に強襲法を斷念せざるの止むなきに至つたのは是非なきこと

とはいひながら、實に情ない哀れな次第であつた。一萬五千の戦闘員を失ひ、銃砲弾もまた殆んど盡きたが、十九日以来、我が將校下士卒が敵と咫尺の間に接して、睡らず飲まず、また食らはず、唯一意専心進んで決死的行動をなしたるは、日本軍の勇武絶倫を明かに事實に證し、露軍をして旅順の運命も到底久しきに亘るべからずとの念を抱かしむるに至つたのである。

第二十四 彼我共に危し

強襲を以て要塞を一舉に攻落せんとした第一回總攻撃も、不幸我軍は失敗を以て終り、高地の上に勇敢なる兵士の死屍を累積するに止まつたが、此の總攻撃の敵に與へた打撃は、實に非常であつた。防禦地區司令官ゴルパトフスキ少將の八月二十一日午前十一時頃、スミルノフ中將に呈したる報告の中にも、「目下情況頗る重要な時機に在り、諸堡壘は全く破壊せられ、守兵の大部は戦死し、砲兵もまた既に用ひるを得ず、豫備隊また悉く盡きたり」とある。要塞司令官スミルノフ中將も、老頭山(危險山)に在つて戰況を視察してゐたが、形勢極めて危急に迫るとも、今決して情況を悲觀するの時にあらずと叱咤激勵してゐた。總豫備隊指揮官たるフォルク將軍の手からは、豫備隊も出拂つてしまつて、將軍自ら指揮すべきものは最早一人も無いといふ始末に立ち至つた。將軍もそれ以來は閑散になつて、十二月十五日北砲臺で彼の名將コンドラテンコ少將の戦死するまでは、非役同様であつたのである。かゝる有様で、甲砲臺では十人になつた、

乙砲臺は僅か三人になつたといふ悲況に陥り、現に二十二日を以て盤龍山東西砲臺の攻落せられ諸砲臺また著大の損害を蒙り、守兵も亦著しく減耗したのを見るに、怖氣がついたか、ステツセル將軍は、「最早抵抗の餘力無し。諸君乞ふ之れに處するの道を講ぜよ」といつたといふことである。恐らくこれは嘘であらうが、スミルノフ將軍は、「要塞は未だ悲觀すべき狀況に非ず。予は敵の突撃を撃退し得べきことを確信するものなり。我運若し非ならば、我等は生命を殞すの一事あるのみ。要塞を敵手に委すること斷じてあるべからず」と目に角を立て、案を叩いて極論したとやら。すると「日本軍若し我が防禦線を突破するに至らば、貴下は如何」とステツセル將軍もムキになる。スミルノフ將軍は言下に、「吾等は逆襲以て敵を突破し、底止する處を知らざるべし。閣下！戰場に於いて身命を失ふは軍人たるもの、當然覺悟すべきことなり」とキツパリ答へたといふことである。ステツセル將軍には、ステツセル將軍の考があり、スミルノフ將軍にはスミルノフ將軍の考のあつたことといづれも全力を盡して要塞の非運を挽回せんとしたことはいふ迄も無いが、スミルノフ將軍こそ實に

鐵の如き意志を有する將軍であつたと思ふ。

第一回總攻撃が失敗に終つたことについて残念に思ふのは、開城後露軍の某將軍が、「日本軍が第一回の總攻撃によりて、我が要塞は實に危険の極に陥り、各砲臺の損害は見るに忍びざる景況であつた。日本軍が若し二十四日の拂曉攻撃に於いて、なほ五六個大隊を以てする増援隊の挺進するあらば、遂に要塞を放棄するの止むを得ざるに至つたであらう。現にある一部の守兵は白旗を出すべく準備してゐたのである。惜しいかな日本軍が突貫の聲次第に衰へ、遂に復來たらざりき」といつたが、實に惜しいことをしたものである。當時我軍殆んど全滅して再び戰場に立つべき兵員の無かつたといふことは露軍もよく知つてゐたので、「日本軍の猛烈なる前進は頗る戦慄すべきものありしが、悉く之れを撃退したれば敵は遂に我が鋭鋒を避けて、溪谷の間に潜伏するの止むなきに至れり」といふ記事も見えくらゐである。それは予等の擔架が長嶺子の柳の樹の下の別れをしてゐた時、戰場生残りの者は淋しく溪谷地隙の間に天幕を張つて泣いてをつた時なのである。であるから若し此の時敵が要塞を出て

て大逆襲を計り、北方と連絡を取らんと企てたならば、如何なる結果となつたであらう。實際さういふ評判が、誰いふとなしに起つて、野戦病院などは、この目にあまる負傷者を如何にすべき、敵手に委してジュネーブ條約の下に救護を受くべきや否やといふことなどを、本氣に成つて凝議してをつたやうな状態であつた。負傷兵は天幕から溢れて、野にも、河原にも、屋前にも横たはつてをつたが、この話を聞くと、健氣にも我等は敵國の救護の下に立つことは嫌である。我等は此の處に於いて赤手空拳を以て戦はざるべからず。而して一人も暴戻なる敵手に落つることあるべからずといひ、大いに戦はんと競つたものもあつたが併し、若し敵が兇暴なる舉動に出づるときは、無念ながらも弄殺しになる外はなかつたのである。蓋し戰場では使へるものだけは使つてしまつたので、少しの傷くらゐな負傷兵は、繃帶所や野戦病院には居らなかつたといつてよいのである。「我に未だ一本の手あり、打たざるべからず」といつて一本の手がブラ／＼になつてをつても、戦線から退かなかつた勇敢なる兵士もあつたのである。使へるだけは使ひもし、やれるだけはやつたのであるから、野戦病院などにゐるものは、

見るも慘たらしい重傷兵で、爆薬や砲彈で一思ひにやられたもののみといつてもよいのであつた。頭や手足をザク／＼にやられて、糸よりも細い命を繋いでゐるものが、何て抵抗が出来やう？ さればといつて敵手に落つるは、我等神州男兒の氣性として、如何にも忍びざるところである。最早魂つきて戦ふの術を知らず、抵抗力は絶滅したりとて、今更おめ／＼敵手に落つるは、日本軍人の潔しとせざる處であるので、名譽の捕虜といふ語は、日本軍人には適用し得ねところのものであつた。敵軍の救護下に捕虜となるは、如何に止むを得ね情況であつたにしろ、予は之れに同情を表し得ぬ一人である。

何はさて措き、當時敵が大逆襲に轉じたならば、其の結果は恐らく悲惨であつたらうが、前にもいふ通り、敵も亦出撃するだけの元氣はなかつたのである。嗚呼、八月十九日より二十四日に亘りて作爲したる我が勇敢なる強襲は、遂に其の目的を達することを得なかつたけれども、日本軍人としての眞價は大いに之れを世界に發表し得たので、當時從軍外國武官の中には、涙を流して日本軍人の勇武を賞揚したといふことである。さればこそ、獨逸皇帝陛下も、忠誠勇敢萬國無

比と激賞せられたのである。

予は第一回總攻撃の二十四日未明望臺の突撃に於いて傷を蒙り、敵圍に陥つて、半死半生の目に會つたが、こゝに當時の戦況をば、露軍の記事を藉りて一言附記して置くは、獨り予が思ひ出のために止まるのである。

八月二十四日未明敵(日本軍)は一大密集隊を以て盤龍山東砲臺を踏え、支那圍壁を突破し、大鷲巢山(望臺)に突撃し來たれり。我(露軍)は即ち十字火を以て之れを迎へ、接戦格闘の末遂に悉く之れを殲したり。此の夜敵は九千の死屍を戦場に遺棄せり。夜の全く明け渡るや、スミルノフ將軍は幕僚、副官を従へ、前夜の戦場を巡視せしが、到る處荒廢の狀慘として正視するに堪へず。彈藥盒、血染の衣服、彼我兵士の死屍は、破裂彈によりて荒されたる地上に横たはり、盲障其他の避彈設備は悉く破壊せられ、生存者負傷者は身を山麓に隠し、掩蔽下に在りて疲勞を休めつゝあり。將軍は兵員に挨拶して、其の勇武を賞せり。各兵士は將軍によりて斯く功勞を認められたるを深く喜び、身體疲勞せるにも拘らず、士氣甚だ振へり。

予が實に「荒廢の狀慘として正視するに堪へざる」うちに横たはつて、望臺の中腹に在つたのは、二十四日の天明であつた。そして七年前の予は、七年後同じ望臺に立つて感慨を恣にすることゝなつた。予は望臺の絶頂に足を駐めて、十日の砲撃によつて頭を飛ばしてくれた巨砲の砲身に凭れながら、七年の月日が立つたといふことも忘れやゝ久しく惘然として回想に耽つてゐた。日も日なり、處も處なり、予は廢壘の上に立ちて、覺えず涙を啜つた。

第二十五 殘壘に立つ

望臺に立つて東を望めば虎の如く踞つてゐるのが大孤山である。その右に猛虎の前に縮こまつてゐる羊のやうなのが小孤山である。東鶏冠山北砲臺一戸砲臺（P望臺）、盤龍山東砲臺は眼下に在る。H砲臺は砲臺の左の袂に續いて直ぐ左にある。二龍山は其の左に見える。八里庄の村落がH砲臺の頂を通しで見える。その左に三角形の小松林で右半面が青く色取られ左半面の禿げたる砲臺が彼の龍眼北方堡壘—クロバトキン砲臺である。この砲臺の左の斜面を通して遙かに白堊の壁のゴチャ／＼と固まつて居る一大部落が水師營である。見渡す限り皆山である。山は皆砲臺である。どこまで續いてゐるのか、いくらでも山即ち砲臺が續いてゐる。松樹山、桑子山高崎山、二百三高地と皆波のうねりのやうに老鐵山まで續いて居る。予は友人小田少尉、北砲臺の勇士矢野特務曹長、寫眞師宮城君と連れ立ち、三十五六の温順にして愛嬌ある、ニ、君の馬車に乗つて、こゝまで來たのである。滿洲は時化のあとで、安奉線の鐵橋が毀れた

の蓋平附近の鐵道に大破損があつて遼陽までは行けぬの、旅順も抜けるほど降つたのといふ後で、カン／＼と熱りつけるやうに暑い日盛りであつた。「全く天祐です。二三日前まで降りつゞいてゐましたが雨が降つては砲臺廻りもエライですからなア」と宮城君がいつた。宮城君は白リンネルの詰襟の服を着て、三十七八くらゐか—もつと若いかも知れんが、その見當どころの赤い髭—赤くなかつたかも知れぬが—なんでも赤くはなかつたらうかと記憶してゐる。遠つても少しは赤い方であらう。日露戰役前から旅順に居つて大ぶん露人に知己もあるやうだ。寫眞師が本業であるが、恐ろしい議論家であるといふ評判であつた。成程よく話をする人であつた。

「飯でも食はうぢやないか」といふと、宮城君は「良好の陣地ですなア」とすつかり軍隊式を發揮して居る。小田君は辨當の風呂敷を解きながら、「從卒が作つた海苔巻ですから」との吹聴であつた。宮城君の辨當は途中支那町を通つた時に十錢で買ひ込んだ豚肉饅頭である。望臺の巨砲の間で、日本軍の方に面して我等は陣地を占めた。從卒が作つた御自慢の海苔巻は非常に旨かつた。

干瓢や、椎茸や、何か知らんが肴の切れが巻き込んである手際などは、うまいものであると思つた。昨夕風呂場の窓から老頭山、北斗山を説明してくれたあの鼻の穴の黒い、左の頭に一寸禿のある兵隊が作つたのかしらと思つたりした。小田君はサイダーを抜いたが、一本ひつくりかへしてしまつた。サイダーは白い丸い庭にても敷いたら奇麗だらうと思ふやうな小石の中へ浸みこんでしまつた。宮城君が、「これはドウですか、旨いですよ」と豚肉饅頭を出して、如何にも旨さうに食つて見せるから、一つ頂戴してポクリと食ひ付いてみると驚くべく臭いものであつた。いかにも油臭い饅頭であるから吐き出した。「ハ、ハ、旨くないですか？」といふから、「うまくないどころか、馬鹿に臭い饅頭ぢや。コリヤいかん」といふと、「イヤこの饅頭が食へんやうでは、満洲のこと未だ以て談ずべからずですよ、ハ、ハ、ハ」と舌鼓を打ちながら愈々以て旨さうに食ふから、「こんな饅頭が食へんて仕合せぢや」といつて笑つた。小田君と矢野君とは、一つづつ顔をしかめて食つたやうであつたから、少しは満洲臭くなつてゐる組であらう。お伴の馬車屋のニハの右手に船を二つ、左手に饅頭を二つくられてやつ

たら大恐悦で、右手を見たり、左手を見たりしながら、砲座の後へかくれた。予は砲身を日除とし、岩の出張つたところに胡床を置いて、船を食ひながら、一種荒涼悽愴たる感情に縛られて、咽喉を壓迫せられるやうな感じがせずにもられるなかつた。今座して居るところ、今船を食つてゐるところは、曾て予が一たび望臺の主人となつて足を踏み入れたところ、而して瞬間にもせよ、一度は日章旗を翻したところであると思ふと、今吐き出した豚肉饅頭が散らばつてゐる岩の上も、サイダーが浸み込んだところの小石も、皆舊知の如く懐かしく思はずにはなれなかつた。予は不幸にして望臺の突撃に成功せずして、この砲身の下から追ひ返されたが、この砲身の下は、僅か十数人の残兵——其の内一人も満足な者は無く、予も既に右手が碎けてゐた——と共に喰ひ付いてをたところ、銃の尖に日章旗をつけてゐた一兵が躍り上がつて、無性に旗を振り廻したが、四五遍振つたかと思ふうちに、仰のけにドサツと落ちて来た。躍り上がるものも落ちて来る、躍り上がるものも落ちて来る。其のうち逆襲に遭つたが兎も角も、理が非でも曾て一度は望臺の主人となつたのである。そして東北斜面から、敵の大逆襲を

受けて、地の不利、寡兵の悲しさ、一たまりもなく、圍子のやうに急斜面を轉がり落ちて、支那圍壁のあたりで突戦混戦亂戦して全滅した無念の歴史が添つてゐる望臺である。そして幾百の戦友部下を失つてしまひ、其の死骸は收容すること出来ずして徒らに敵中に委棄するの止むを得ざるに至り、三十八年一月一日初めてこの地を占領した時には、モウ骨になつてゐるものもあつたり、肉片のところどころに附着してゐる骸骨が服を着てをつたり、立派に脚絆をつけたまゝ腐つてゐるのがあつたり、頭髮が僅かに名残の頭蓋骨に残つて、寒い風に吹かれてゐたといふやうな、腥慘たる結果を來たしたところの此の望臺に立つて、予は思へば思ふほど涙ぐんで來て、覺えずハンカチーフを出して眼を拭うた。一行がゐなかつたら——一人ツクネンと此の望臺の上に立つてゐるのであつたら、必ずや聲を放つて思ひ切り泣いたであらう。

予は目を膝の前に繁つてゐる柏の葉によく似た草の上に落してゐたが、何の氣もなしに、「宮城さん、この草は何といひますか」とそれを指すと、宮城君は「それですか。それはナンとかいひましたわい、エート……」と考へる風であつ

たが、「肉荳蔻々々々、さうです。肉荳蔻といひます。」「ニクヅク！ニクヅク！」と予は口のうちに繰り返した。ニクヅク！何となしに殺伐たる意味があるやうに思はれてならぬ。旅順の山にニクヅク！ありさうな名の草であると思つた。ニクヅクは禿頭病の薬であると、宮城君が後で説明をしてくれた。予は小田君の好意で、或る兵隊に髪を刈つてもらつたが、歸京してから禿頭病に罹つた。この稿を起したときも一錢銅貨ぐらゐは禿げてゐたのである。あの望臺の肉荳蔻が、禿頭の妙薬なら、少し貰ひたいくらゐに思つてゐたのである。旅順の山に肉荳蔻といふ恐ろしい草があり、それが禿頭の薬であり、そして久し振りに折角旅順へ往つた櫻井が、禿頭病に罹つたなどは、面白いといへば面白いが、禿頭などはあまり面白くない。

望臺の上は猫の額程しかないといひたいやうな狭いところである。加農砲が二門、ヌツと頭を突き出して高見から脚下の諸砲臺を見下ろしてゐるところの威嚴ある砲臺である。けれども望臺は東鶏冠山北砲臺と盤龍山東砲臺とによつて流れたるところの防禦線の後にあるので、いはゞ北砲臺が右の見張所な

二六九
ら東砲臺は左の見張所である。左右から睨みつけて見る見張所を潜つて、奥の望臺へ闖入するなどといふ、ソナ無鐵砲なことは出来ぬ譯である。予は望臺に立つて我軍があの盤龍山の右の斜面から巨砲臺の左の斜面へかけて、望臺を目標にして来たことを思ふと、よくもソナ所へ来られたものであつたと、凛然として當時の大膽なる攻撃に戦いたのである。望臺は何をいつても百八十五米突の高地である。二百三高地につぐ、兎も角も高い砲臺であるが、砲臺其のもの、價値はあまり無かつたらうと思ふ。唯だ高い山險しい山だけに守者は遠目が利いて防禦にも有利であつたらう。望臺から見る大孤山の裏には、蛇の蛇つたやうな道が絶頂まで達してゐる。あの裏道は八月七日の夕方であつたらう、敵の大逆襲隊がこゝをドヤ／＼とやつて来たが、我軍の急射撃に逢つて、道を變へて右の方へ行つてしまつたことがあつた。そのとき敵の諸砲臺から一齊に打つた砲彈が頂上の岩角にぶち當り、物凄ゐ火花が散つて、大孤山の我兵も大分やられたことが、大孤山の裏道を見てゐるだけに直ぐ胸に浮かんだ。あのゴチャ／＼とかたまつてゐる處は何とかいふ村であつたが、そこに鼻の黒い、そし

て一寸ぐらゐの辮髪に、赤い紐をつないでをつた、それは可愛い子供がゐたが、今でもゐるかしらん。あの七八軒家の見えるところは五家房であらう。五家房の名は、予に恐ろしい思出のあるところで、我が中隊長川上大尉は師團の總豫備隊を率ゐてゐたが、二十三日の夜遽かに命令があつて、五家房へ到つて本隊と共に突撃隊に加はれ、といふので、五家房を搜索したが分らぬ。あちらへ行つたり、こちらへ行つたりしてゐるうちに、夜は暗し隊は見當らず、時間は空しく過ぎる。中隊長は腹を切つても申譯が立たぬといつてゐる。予等も途方に暮れて、百方搜索したが分らず、泣くにも泣かれぬ有様であつたところが、あの五家房である。トウ／＼夜の二時に盤龍山の下の地隙の入口で會つて、突撃の間にも合ひはしたが、五家房の名を聞いてさへ亡き中隊長の顔がアリ／＼と目に浮ぶやうである。五家房はトウ／＼あの夜、發見も出来ず仕舞ひになつたが、七年後の今日初めて望臺から見ると、當夜のことが思ひ出されて悲しくなつた。望臺から旅順の方を見ると、市街の屋根は強き日光を浴びて、キラ／＼と鱗のやうに光り、「あの樹が繁つたら日本兵は嗚涼しからう」と退城の時、振り返り

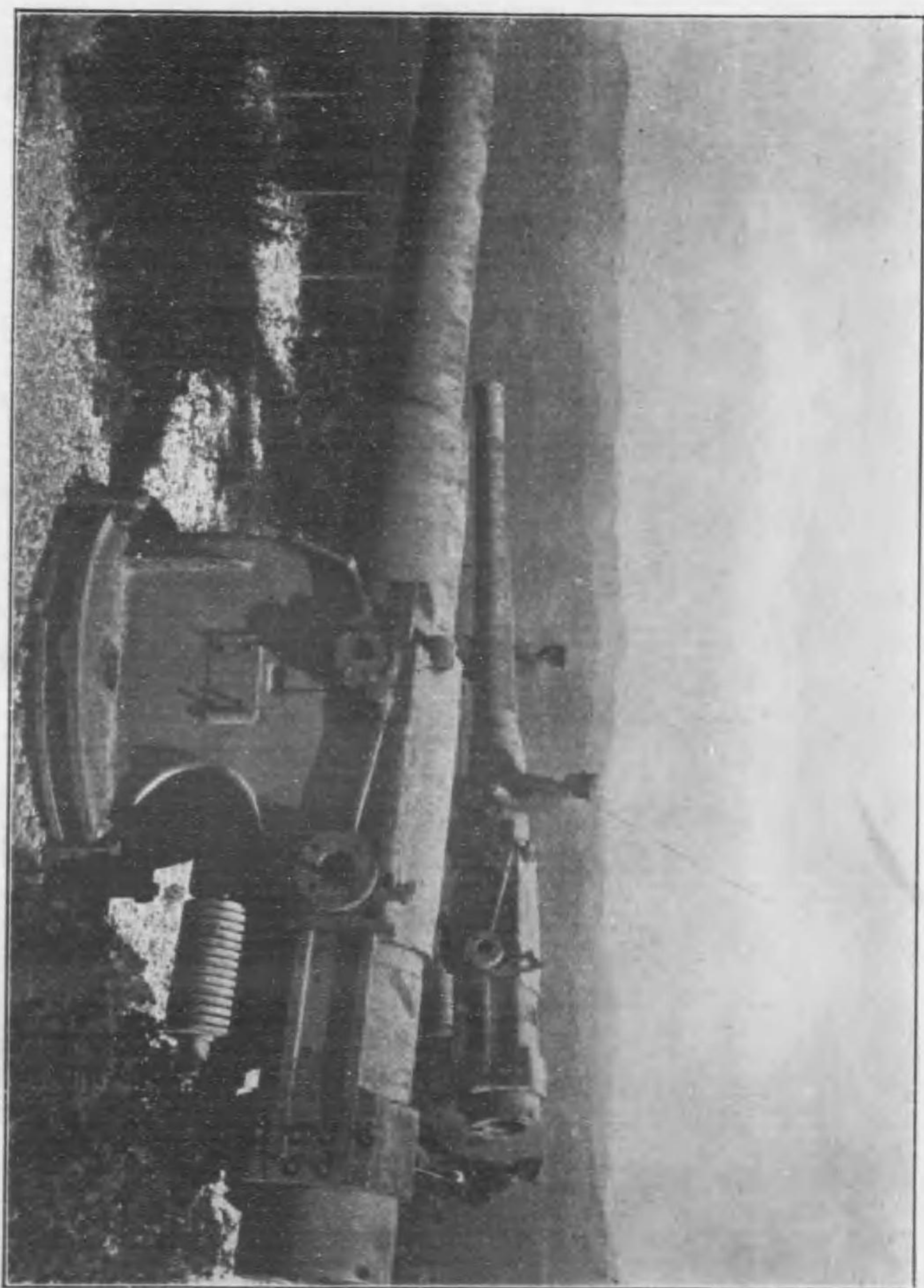
振り返り露兵がいつたといふ、アカシヤが風を孕んで繁つてゐる。露軍弔魂碑
除幕式の時に來たマッセーウイチといふ海軍大佐が、「イヤ私が植ゑた柳が
大きくなりましたよ」と感慨に堪へぬ風で馬車の中で同車した日本士官に語
つたといふことであるが、曾ては樹が一本もなかつた禿の旅順に植ゑられたア
カシヤや柳は、今やドコにもコゝにも黒く繁つてゐる。紺青のやうな海は、瓢箪
の口のやうな港口から、水天髣髴の外に續き、白玉山の表忠塔は突兀として天を
仰いで立つてゐる。

第二十六 流血の地

ステツセル將軍は、「日本軍が最後の豫備隊約一萬青泥窪に到着したるもの
の如し。我等は既に約五倍以上の敵に對して頑強に抵抗せり。今や我等は更
に敵が此の最後の豫備隊をも撃滅せざるべからず」と既に八月二十一日に於
いて訓令を發してをる。スミルノフ中將も亦部下を激勵して、「予と汝等とは
唯一死あるのみ。神は汝等を助け汝等をして職責に忠ならしむること、數日來
死傷せる汝等の戦友に於けるが如くならむ」と告げ、砲臺から砲臺を巡視して、
負傷し、疲勞した守兵と握手して、諭すに、忍耐すべきこと、一死以て守地を離るべ
からざることを以てした。我軍は、陛下の御爲に、邦國の爲に、旅順の山を墳墓
として、死骸の山を築いたが、露軍の善戰善守したことも、また世界の等しく認む
るところで、我等は耻しからぬ相手と戦つたものだと思はねばならぬ。旅順へ
行きさへすれば、死ぬるに極つてゐるといはれたくらゐであり、随分死にもした
が、我等は軍人としては、戦の仕甲斐もあり、御奉公の盡し甲斐のある處へ向つた

ので、何不足のないことであつたと思ふ。

予は一行と望臺の斜面を下つた。足元の浮いた岩が、ゴロ／＼と石切り場のやうに轉がつてをるので、踏み外したら眞逆様に轉げ落ちさうである。よくもコンナ所へ登つて突撃が出来たものだと思ふながら驚いた。この坂を登つたり、園子のやうに轉げ落ちたりしたかと思ふと、全く夢のやうである。予は此の坂を下りながら、敵の逆襲に遭遇してから、ドウいふ道を取つて麓へ落ちて行つたか、どのあたりで踏み止まつて接戦をしたらうか、最後に予は何處で殞れたらうかといふやうなことを考へながら、此處でもあらうか、彼處でもあらうかと、當年の記憶を繰り出だしつゝ、麓まで下りた。突撃のあの夜は空が明るかつたので、望臺の稜線には一列に露兵の立姿が見えてをたが、兎に角山も谷も暗かつたから、我が最後を記念すべき場處に對する印象が明白で無かつた。しかしナンでも敵の塹壕のある側で、其の塹壕には露兵が迂路ついでをつて、その上の一寸小高い處であつたことだけは明かに記憶してゐるので、それを便りに捜して見さへすれば、大凡の見當はつくだらうと思つてゐた。予は望臺の急坂を下



(著者は中央) 遺残の望臺

りながら、かゝる著明なところがあるかドウかと、それにばかり意を注いでゐたのである。

矢野君は、「大尉殿、何を見ても思ひ出が多いてせう。」といったが固より何を見ても思ひ出が多いには多いが、予自らは旅順の山からいへば唯僅かに一點の地表を発見すべく、「塹壕の側の小高い處」は何處であるかといふ念にのみ驅られて、矢野君には、「さうですな！」と氣のない返辭をしたきり、感慨が多いも少ないもない。頭が堅くなつてしまつて、唯呆然としてをつたのである。

予の足は非常に速かつた。小田君も矢野君も驚いてゐたやうである。その昔二つにも三つにも折れた此の脚で、山を登つたり、坂を駆け下りたりするのであるから、負傷した時のことを知つてゐる矢野君は頗る驚いたやうである。予は谷底に下りたかと思へば急に山へ駆け上がり、また下りてはまた登つたりしたから、兩君こそ難有迷惑であつたらうが、予は氣の毒だと思ふだけの實は餘裕がなかつた。「大尉殿、早いですなア。」と小田君からいはれて、初めて兩君に濟まんことをしたといふ氣になつた。これも予が忘れ難き地を踏んだために、あま

りに頭が堅くなつて無中になつてしまつたからであらう。
「到る處墓場のやうな臭ひがするてすなア」と小田君が歎息して予を顧みたとき、予は足を駐めて、塑像の如く我れを忘れて立つてをつた。「塹壕の側の小高い處」なる幻のやうなボーとした處は、予が其處に足を駐むるに於いて、始めて霧が霽れるやうに印象が明るくなつて、亡者の如く旅順の山を迷うた予は、そこに初めて安堵を得たのである。

「こゝだー」と予は思はず知らず叫んだが、こゝを實に予が力盡きて敵中に殞れ、而して露兵に刺殺せられんとまてした地點、その地點である。

旅順の「自分の殞れた處」を尋ねて見るの念は、予が年來の希望であり、また此の旅の第一の目的であつたのである。予は自分の殞れた所を探し當て、そこに立ち立つたが、そこは岩がゴロ／＼と轉がり、夏草が一面に生ひ繁つてゐるところで、何の風情も無い、只の草原石原であるが、これが兎も角も予の故郷である。年久しく住み馴れし家郷を去つて、遠く山川に漂浪した天涯の孤客が、凛然として再び還るの日、豈に圖らんや、雜草深く鎖して荒廢せる我家の斷礎を見つ、

天を仰いで撫然たるの情景を、予は戯曲的にも思ひ浮べて、たゞ暗然として立つた。春風秋雨七星霜その間には石が轉げて谷へ落ちたてもあらう、上から石が落ちて來たてもあらう。草が生えて、其の草が枯れて、また生えて、また枯れて、雨が降つたり、雪が散つたりしたてもあらう。けれども此の幾變遷のあつた荒蕪の地も、予が流血を以て染めたところであると思ふと言ふには、はれぬ懐しき情感が湧き出た。

予は八月二十四日の未明敵と接戦の後、正しくこゝで殞れたのである。そして左手と頭とを打たれ、横腹を刺された一兵を抱いてをつた。彼は暫くして予と別れて、敵の散兵壕を跳び越して歸つたが、死者と予等瀕死者とは敵圍に陥つたまゝ、其處に殞れてをつた。予は前方の塹壕の敵の監視を受けてをつた、動いたらずに打たれる運命であつた。既に予は一度頭を動かした爲に、四五發鈞瓶撃ちに打たれた。予は何處までも死んだ真似を餘儀なくせられた。予が頭のすぐ上へ萬歳と嗷鳴つて狂ひ死んだものと、予が右手のところて予が名を呼び、念佛を小さい聲で唱へて死んだものと、予が左の足の處で顔の眞向から韓竹割りに

割られて虚空を攫んで足掻き藻掻いて死んだ兵とは予を中心にして予に最も接近した三人であつた。予は目を其の三點に落して三人それらの死様に就いて思ふと遽かに身の寒さを覺えざるを得なかつた。嗚呼死んだところの兵士の顔―念佛を唱へて死んだところの兵士の顔―苦しんで死んだところの兵士の顔―色々な死様の兵士の顔が、當年の其の儘浮んで来て予は大なる宇宙の一隅から小さい粟粒のやうな人間が旅順といふ山へ落ちて来てそれが煙になつてポーと消えてしまつたやうに想像し自分はどこから飛んで来てここへ落ちたのか知らぬが今までハツキリと目に映じた自分の戦場がいつの間にやら薄絹をかけたやうに幽幻な舞臺となつてしまつた。

小田君や矢野君は敵とも味方とも分らぬ白骨を拾ひ集めて来て石の上に積み重ねて撫子や萩の花を折つて供へ予等は之れに禮拜した。「墓場のやうな臭ひがするですなア」と小田君がいつたことを思ひ出して、「第一線が砲臺で死んでしまつたら旅團長は旅團の豫備隊を率ゐて砲臺で死ぬ。聯隊が死んでしまつたら旅團長は旅團の豫備隊を率ゐて砲臺で死ぬ。旅團が死んでしまつた

ら、師團長は師團の豫備隊を率ゐて砲臺で死ぬ。師團が死んでしまつたら軍司令官は軍の總豫備隊を率ゐて砲臺で死ぬる。」と軍の決議にもある通り死んで死んで死骸で築いた旅順の墓場は、皆忠義の香がするのだと予は思つた。月凍りて残墟の上に懸る夜―悲雨蕭々として荒草の上に落つる夜―旅順の墓場に散亂してをる個體が起つて號令叱咤し、奮激殺倒するであらうなどと思ふと、予竦然として立ちすくみ身動きもしなかつた。

予は己れの墳墓となるべかりし岩の上に立ちつゝ、矢野君や小田君が積み上げた碎けてそして苦蒸したる白骨を凝視すると、白骨にも涙ある如く感ぜられ予が袖は涙に濡れた。戦友もし靈あらば予の姿を臨んで、何と感じたであらうか。頑石も心あらば予の姿を望んで何と思つたであらうか。我は昔のまゝの我れ。石も亦昔のまゝの山の石。獨り戦友は昔のまゝで無くなつてしまつたと思ふと、予は白骨に對して、そゝろに恥かしい感じが起つた。けれども爰て別れて七年振りに戦友の墳墓を訪うて來た予の姿を見て、必ずや地下の靈も喜んでくれたらうと思ふと、それが嬉しかつた。

予は一行と少し離れて、あちらこちらと彷徨うた。そして昔為たやうに山を登つたり下つたり伏したり匍匐したりしながら、物狂はしき人のやうに、「戦友諸君。私は櫻井である。諸君と共に此處で戦つたが私は救はれて還り今日は諸君を訪ねて来るやうになつた。諸君は此の山の土となつたが私獨り命を全うしたのは、因縁とはいへ耻かしく思ふ。私の新生涯に於いては、たゞ諸君が冥助によつて御奉公の實を擧ぐることが出来ると思つてゐる。私は諸君と共に戦つた此の戰場を踏んで、唯感激に打たれるのみである。」と口號んだ。予は或ひは狂うてゐたかも知れぬ。

予が足の付くところ、予が影の落つるところ、皆戦友の苦闘し、難戦し、忠死したるところ、斷石雜草みな戦友の血もて飾られたるところである。百戦の沙場人再び還らず、徒らに風餐雨打するに委すること茲に七年、何すれぞ感慨の切ならざるべきや。

そのかみの、血潮の色の、偲ばれて、
こゝろあかるゝ、撫子の花

乃木將軍は曩に旅順を訪ひ、夏草茂き戦跡に佇みて、かく咏ぜられしとか。勇士の碧血の残れるかとも見ゆるは、紅き撫子の花である。野菊女郎花萩の花吾木香など、ところ／＼に咲き亂れたるが中に、破れたる靴裂けたる外套の片帽子、弾に射抜かれたる罐詰の殻断れ／＼の骨などの散亂するなど、皆これ傷心の種ならざるは無い。

旅順の白石大尉が前夜の話、五六日前二百三高地へ行つた時も、服を着けた骸骨や、口髯の長く疎に残つて居るのが、土砂の下から露はれてをつたといつた。そしてそれは明らかに露兵であるといふことが分つたから、土をかけて埋めておいたといふことであつた。旅順の山は死骸の山であるから、一雨毎に下から骨が出て来る。予が行つた時は水の岩を流したあとの土崩れの中に骨がいくらかも露はれてをつた。

第二十七 南川の里

當年予は敵中に在つたこと十數時間であつて、或時は敵の狙撃に逢ひ、或時は敵兵の擷むところとなつたが、予の命は正に二時間にして終はるであらうと自覺してをつたのである。二時間！何故に二時間と限られてあつたかは固より予にも不明である。唯何となく二時間を經過せば絶命するだらと思つてゐたのである。予が斷末魔に於いて、二時間の生命あることを自覺したる此の理窟は、予の如きものには分らぬ。

僅かに二時間にして絶命すべき運命に立ち至つた予は、永久的無意識の状態に入るべく、この時予の意識は決して夢のやうな輪廓の分らぬものではなかつた。併し予の意識は肉體を以て密接に圍繞せられありて、それが恰も墓に埋められたる死體が土にて蔽はれてゐるやうに、一として有機的關係を有してをらなかつたやうに思ふ。取りも直さず予は肉體―それは四肢碎けて血が流れ出てゐるところの肉體について、何も思はなかつた。而して何者か、來たつて

予の身體を揺ぶつて身心の分離を催進するやうで、「予は死につゝあるものなり。されど生前と同じく一人前の人間なり」と思つて、曖昧でなく身心の離脱を認めてをつたのである。予は實に最も安樂に二時間を經過して、遂に一度び無意識の状態に陥つたのである。

予が再び生を得たのは偶然の事柄によつて眼を開いたまで、丁度眠りから覺めたやうなものであつた。そして其の間には既に十數時間が經過してをつたことを知つたときは、予は既に東鷄冠山砲臺の地隙に下つて其處で血と泥との溜りに横たはつてゐたのである。

予が此の僅か二時間の命の間には、悲壯また悽愴たる色々の光景を目撃したが、この二時間の生涯は予が全生涯よりも清き尊き神秘的の生涯であつたことを思ふと終世を通じて忘れぬ教訓である。夜來の戦闘も、夜の引明けと共にピタリと止んで、そこには多くの戦死者の死骸が横たはり、こゝには多くの負傷者が呻きつゝ、戦場の名残の幕は開いた。予が今でも思ひ出すのは、予の八七間先きを、コロ／＼と山を轉がる將校のあつたことである。コロ／＼と轉がつて

は、また止まり、またコロ／＼と落ちて行くのである。恰も死骸が自然の重みで山を轉がつて落ちて行くやうであつた。右を見ても砲臺左を見ても砲臺敵は銃を持つてウロ／＼とそこにもこゝにも徘徊してゐる。動きさへすれば撃たれるのである。其の間を彼の將校は死んだ真似をして、山を落ちて行くのであるから旨いものである。この奇藝をやつた將校は、乃ち望月少佐であるが、其の後豫備病院で逢つた時に、「あれからドウして歸られましたか」と聞いたから、「イヤとら／＼轉げて還つたよ」といつて笑つたことがある。少佐は胸部の貫通銃創であつたが、繃帶所から野戦病院から、少佐のやうに面白いことをいつて通つた人は無いさうである。少佐は頗る豪放磊落な奇人、また隊中の酒仙であつた。予は少佐のやう面白い人にまたと出逢つたことがない。まだ動員前のことであつたが、ある日「櫻井君一寸集會所まで来てくれたまへ」といふから、何のことかと思つて、將校集會所へ同行すると、少佐（當時大尉）は、「僕のいふことを此の黒板に書いてくれ給へ」と甚だ真面目であつたから、予はチョークを取つて言はるゝまゝに書いたが、それは頗る珍妙な禁酒廣告であつた。

禁酒廣告

望月儀豫て腦病の處病勢増進の兆あり。由つて自今萬止むを得ざる場合の外禁酒（日本酒）す。萬止むを得ざる場合とは、

- 一 戦地に於いて 天皇陛下の萬歳を奉祝する時。
- 一 他人の御馳走を受くる時。
- 一 毎日午後五時以後。

といふ、禁酒にしては少し險難な、信用の出来ぬ廣告であつたが、其の翌朝少佐に會ふと、「午後五時以後」の續きであつたが大ぶん御機嫌の體であつたので、大笑ひとなつた。少佐は恬淡水の如き人で、金錢などに目が無いから、一圓の紙幣も、十圓の紙幣も、區別が無かつたり、俸給は酒のために引き去られて、僅か一錢五厘貰つたなどと云ふ有名な話もある。金が無くなると、宿車に乗つて將校集會所へ入浴に来るといふやうな、今時見られぬ珍らしい人物であつたが、既に故人となつた。少佐は昔馴染のものが寄るとさはると、よく話題に上る人である。予は望臺の中腹に於いて、またあのコロ／＼と轉つた少佐の事を思ひ出して、覺え

ず失笑した。

さて予は小田君等と戦場の夏草を踏んで徘徊してゐると、殆んど死すべかりし予が不思議の縁から、一勇卒近藤竹三郎の肩に負はれて敵圍を脱したことが、アリノと目に浮んで来る。敵の散兵壕―そこには敵がウロ／＼してゐたところの空壕を飛んで、土壘の崩れから脱出したが、其の土壘の崩れほどの當りてあつたらうかと思ふが、どこもこゝも崩れて、此處といふ見覚えは無縁なかつた。凡そこゝてあらうと思ふところに立つて、近藤上等兵が予を外套で包んで、死んだ真似をしてゐたところは、爰であつたらうかと、當年のことを思ひ出してゾツとした。

予は恩人近藤上等兵の遺族の模様が知りたと思つてゐた矢先―尤も先年高知縣廳で調べてもらつて六彌といふ上等兵の父があるといふことを知つたので、音信もしてをりはするが―四十年の九月頃であつたかと思ふ友人小原驥馬君が土佐郡森村宇南川といふ高知市から十數里もある山奥の一寒村に、勇士の遺族を尋ねて行つたことがある。予は小原君に對し、深厚なる感謝の意を表

すると共に、小原君の物語りによつて、その消息をこゝに略記してみたいと思ふのである。

この森村といふのは、驢げながらも思ひ出のある村である。三十二年の秋予が士官候補生であつた當時、機動演習で、一夜この森村に泊つたことがある。南川の流も忘れぬ。假橋が架つてゐはしなかつたらうかと思ふ。何でも山の急勾配に、あちらに五軒、こちらに七軒と、段々に重なつてゐる村であつたやうに思ふ。さうして予が宿の主人は六十くらゐな老翁であつたが、「此のおんごく(山奥)へマアようお出てなさいました」といつて、手酌でグビ／＼酒を飲みながら、獨り笑壺に入つてゐた。そして「兵隊さん。都々逸ヲ知つとるかエ。」などといつて、「都々逸下手でも、やりくりや上手、今朝も七つ屋でほめられた。」と美音を張り上げて、ナンでも同じ歌を四五十遍も聞かされて、予等は初めの内こそ、「七つ屋で何だろ？」などと不思議がつてゐたが、トウ／＼都々逸に中てられてしまつて寢轉んだけれど、老翁は森に鼻が鳴いても、まだ「都々逸下手でも」をやつてゐた。森村に就いてはコンナ記憶がある。予は自分の恩人が森村の人で

あるといふことを知つた時は、何だか其處に深い因縁が結ばれてあつたやうに思はれてならなかつた。小原君が旅したのも秋―予が宿つたのも秋―黒き杉の森―白き椋の花―赤き鶏頭―黄いろき黍予にはいづれ思ひ出の種とならざるはない。勇士の家はあの家でもあらうか、この家でもあらうかと、大ぶん忘れかけた記憶から摸索して、「都々逸下手でも」の家を思つて見たりした。

久留米緋の單衣を着た、友禪と黒緇子との晝夜帯を締めた鄙にしては美しい女が、縁先の花菱の上に、しをらしく坐り、背の高い骨格の逞しい色の黒い、額骨の秀てた七つ下りの木綿の筒袖を着た六十ばかりの老翁が、庭先で、刀豆煙管をくはへて立ちながら、旅人と話してゐる光景を、予は先づ繪のやうに美しく胸に浮べるのである。

美しい女は、其の手に予が「肉弾」を持つて、その口繪―近藤竹三郎が予を負うて、敵圍を脱するの圖―を示して、老父が初めて之れを見た時、「オー竹か竹か」といつて、オイ／＼泣いたといふことを語つてゐる。

親切なる旅人は、竹三郎の片身でもあればと問ふたら、「竹の狀を出すんぢや」

と老翁がいふ。彼女は走つて奥から手文庫を持つて來た。老翁は其の蓋を取り、無造作に掴み出して、「お客様之れを見てつかアさいませ」といつて差出した一封を旅人は受取つて、其の裏書を見ると、野戰第十一師團歩四四第八中隊第二小隊近藤竹三郎とある。旅人はア、これが此の世に残した勇士の片身であるかと表を返し裏を返しつゝ、見つめてゐると、老翁がまた、「こりや善通寺の病院から來たんぢやが、これを讀んでつかアさいませ、之れにや、俺もシツカリ苦勞したんぢや」といつて差出したのを開いて見ると、全文殆んど假名であるが、之れを拾ひ讀みすると、療治をしたが、肉が巻いてをつて、中々彈丸が取れにくかつたこと―彈丸は長さ四分、廻り八分五厘の砲彈の破片であつたこと―療治最中に筋に觸つて非常に出血したこと―療治の後は痛まぬから安心して下さいといふこと―コンナことが細かしく書いてある。なほ次を讀まうとすると、六彌翁は「其處ぢやッ！俺がシツカリ苦勞したのも其處ぢやッ！」と力を籠めていふから、そこには何が書いてあるかと目を張つて見ると、

「さて私出征以來誠に無事で勤めたのは、なにかといへば、父母家内一同が神

信心及び御ぐわんを籠めてくたされたゆゑと存じます。まことに今度よこし下さつた手紙を見て實に驚きました。何と申して御禮申さうやうもござりません。父母様が神さまに大願を籠めてゐるから身を大切にせよと手紙でうけたまはりまして實に私に力がます。出来まして實に勇んで暮しをりましたが、これほどの大願とは驚きました。今度の手紙によりはじめて承知いたしました。

私は一日も早く全快いたし再び戦地へ還ることを楽しんでをりますから、御あんしん下され度候。」

と書いてあつた。そしてまた「鶏冠山にて露兵と大和魂を競べやひをしたときに、ツイ大和魂が強くて露兵の陣地に跳り込み露兵を殺した愉快は今に忘れません。」などと書いてあつた。

「あぐわんを籠めてくだされたゆゑ」「これほどの大願」とは抑々何のことか。翁は煙管をボンと手の掌でたゝいて、無言のまゝ裏へ駆け行き、制札の如き大きな板を持つて来て、「お客様、これを見てつかアさいませ」と差出したのを旅人は

手に取つて見ると驚くべし、老翁が心を籠めた祈誓文であらうとは。

爲敬神愛國神鳥居建立

近藤 竹三郎

明治三十七年六月二十二日右同人實父該神へ左記誓願致しあり。今回右同人負傷せしも輕少なるにより、爲施本日をも以て該鳥居建立す。

誓願

一 自身不具になるやも少しも厭はず。竹三郎無事歸國するに於いては、拙者左の小指と當年五十三歳の女の長髪とを差上げんと決心せり。茲に併せて誓ふもの也。

明治三十七年十月十日

近藤 六彌

嗚呼之れを讀んで、子を思ふ親心に泣かざるものがあるか。手を救ひたる義人勇卒近藤竹三郎の父六彌翁は實にかゝる起誓をしてゐたのである。

神垣に涙手向けて、拜ひらし、

かへるを待ちし、親も妻子も。

二九〇
とは、畏くも 先帝が靖國社頭に涙ながら額づく戦死者の遺族を思し召されて
詠ませたまひし御製である。功名手柄して無事凱旋するを待たぬ人はなきに
今は骨となりしを思へば誰か泣かざるものがあらう？竹三郎無事歸國させた
まへと、其の親は指を切り髪を切らんと祈る心根は如何に哀れてはないか。闇
にあらねど親心子ゆゑの道に迷はぬはなしとか。親の情をも知らぬ不孝兒は、
この一話を聞いても愧死すべしである。

併し六彌が尊き心も遂に神明に徹せなかつたか彼は負傷後傷が癒えて、「戦
地へ還る」といつた如く再び戦線の人となつたが、三十八年三月奉天の北五百
牛家に於いて名譽の戦死を遂げたのである。予は彼れの戦死が旅順でなくて
奉天であつたとは小原氏を通じて初めて知つたのである。勇士が旅順某所に
於ける忠死の状を語るに甚だ詳かなる人もあつたが、戦場混雑の際のことと
て何かの間違ひであつたらう。しかも此の勇士が善通寺豫備病院に於いて傷
を養ひつゝあつたといふことは意外の意外事にして予は恩人が同じ病舎に起
臥してゐたことは夢にも知らず遂に永の別れとなつてしまつたのである。六

彌翁が苦心も神明の受けたまふところとならずして竹三郎は死んだ。されど
竹三郎は 陛下の御爲に立派なる戦死をしたのである。六彌翁は旅人に向ひ
強く叫んで、「併し竹アお國の爲に死んだから俺や言はぬ言はぬナンにも
言はん！」といつた。我子を戦場に亡うて徒らに未練がましいことをいふも
のがないとも限らぬが六彌翁の如きは情には脆く意には堅き人であるといは
ねばならぬ。

その美しき女は竹三郎の兄梅吉の妻で、其の名も優しきさつきといひ親切な
る旅の人はいふまでもなく小原君である。さつき女は小原君に向ひ、「竹さん
に一つ好きなものがありました。ホ、何だか可笑しいやうですが竹さんは
三味線が好きでした。お父さんも梅さんも、「竹！そんなテンゴノカワは止め
え」と笑ひますと「いんげ大分上手になつたキニのーシ」と言つて可笑しな手
つきでやつてをりました。マア御覽下さい、アレが竹さんの持つてゐた三味線
で御座います」と柱に掛けた三味線を指すのであつた。「兵隊に行く前の晩に、
お酒を飲んで、モウ暫くの間また三味線も弾けんからというて夜の十二時過ぎ

まで弾いてをりました。朝倉の聯隊へ這入つてゐるうちに間もなく戦争になりまして、到頭戦死したので御座いますから、今ではこれが片身になつたので御座います。」と聲を吞んで追懐の涙を催した。柱にかゝれる竹三郎が遺愛の三味線！微風檐端を傳ひ來つて弦上を掠むるの時切々たる響あつて亡き人が徒然とも聞えるであらうか！

予は過ぎし戦場に、夏草しげき勇士が夢の跡を弔ひつゝ、舊きを懐うて新しき涙を絞り、毀れた砲臺の胸墻の上に腕を又き、我れを忘れて、やゝ久しく佇んでゐた。

第二十八 懷爐の殻

予はそこらこゝらを彷徨ふうち、一個の殻れた懷爐の殻を拾つた。赤錆びた無數に穴のあいた、一個の鐵葉板に過ぎぬが、予はこれを見て言ひ知れぬ感に迫つたのである。望臺は一月一日即ち旅順戦の最後の幕を閉ざしたところの戦場であつて、それまでは、我が戦死者の死骸も取れなかつた處である。この一個の懷爐！これを懐にせし勇士の死骸は、寒い風に吹き曝されながら、戦場に委棄せられてゐたのでもあらうが、今や戦場の跡には昔を語るところの名残の品となつて、勇士が忠死の跡を弔ふかの如く思はれ、予は種々なる聯想を催さずにはゐられなかつた。

コンナことがあつた。ある暗い夜であつた。岩陰で天幕も張らず背負袋を枕にしてコロ／＼と寝轉びながら聞いてゐると、今日着いたばかりの補充兵が、「上等兵殿、モウすぐにも戦争の命令が下りませうか？」と何か思ひ出したやうに言ふと、上等兵は、「ウム、そりや無論ぢや。夜が明けん内にまた攻撃ぢや。し

「つかりやるんだぞ」とキツバリ言ひ切る。彼の兵は「そんならモウ此處へ還ることはありませんか？」と問ひ返すと上等兵は「還る！還るどころか、お前！皆戦死の覚悟ぢや……二度とこゝへは還らぬ決心がないといかん。何か、お前はそれがドウかしたといふのか？」と上等兵の眉は動いた。彼の兵は暫く黙つてゐたが、「上等兵殿、それぢやモウこゝへは還れませんか？そんなら私はこゝで襦袢を着換へたうあります、よろしうありますか？」

上等兵は「襦袢を着かへてドウするのぢや？」といふと、彼は背囊を解いて白い一枚の襦袢を出した。上等兵はそれを見て怪訝な顔をして、「そりやドウしたのぢや？」

彼は白い襦袢を持ち上げたまゝ、「上等兵殿これは國を立ちますときに母親が面會に来てくれましたして、これで長の別れになるかも知れんが、お前が死ぬるときには、これを着て死んでくれといひまして、此のフランネルの襦袢をくれました。私はこれを着て立派に戦死をします……」

「ウン、お前のお母さんは、それを着て死んでくれといつたか……お前はそれを

着て戦死をするのか……」と上等兵は聲を震はしながら目をしばたいた。

「ハイ上等兵殿私は戦死します。」

或人は暗い〜岩陰で白い襦袢を着換へてゐる彼を見て、其の健氣にも哀れな心根に泣かざるを得なかつたさうである。フランネルの襦袢！戦死の晴着たる一枚のフランネルの襦袢！母親が我兒のために戦死の晴着を作つた其の裏面には、哀れにも悲しき消息が潜んでゐるでもあらう。衣を削ぎ、食を減じた苦心で、恩愛の襦袢を子の手に渡したのでもあらうが、これを着て死んでくれといふ親の心はドウであらうか？予は戦場の跡で一個の懷爐を拾つて、これもまた慈父慈母が死に行く我兒の懷に入れた恩愛の片身かと思へば、一箇の懷爐！これが唯無意味の捨たり物とは思はれなかつた。

予はこゝに予と同日此の望臺に僵れた友人久野中尉並びに松村伍長の悲壯なる最期を語りたい。先づ話は出征の時からである。

伊豫石鎚山の麓、三澤村の地内に、眞黒に茂つた樺の森を被つて、軒も傾いた草葺の一軒屋がある。これが松村梅五郎といふ豫備兵の家で、人里離れた一軒屋

である。梅五郎には一人の母親がある。既に永い間の病氣で、ベツタリ床にいてをる。いふまでもなく、梅五郎が働かなければ一日の糧をも得ることが出来ず、親に薬を薦むることも出来ぬ。

今日も彼は野良から鎌を擔いで歸つて来て、草鞋を解いて納屋の柱にかけ、鎌を仕舞つて、裏の籠の水で足を洗ひ、爪先に下駄を引つけながら内へ這入つて来て、「お母さん今歸つたぞナ。ナンにも變つたことは無いカナ」といふと、母親は、「アイ／＼何も變つたことはないぞナ。それはさうと梅や、今日役場の小使さんがお出でてナ、これを置いて行かれたぞナ。小使さんの話に、大變な事になつたんぢやと云ひだが、梅や戦でもあれば、おまへも行かんといくまいがナ」と母親が差出した封書を受取つた。胸を躍らせながら表を見ると、召集令狀であつたから、「イエ何！」と、そのまゝ懐へ入れて、「まさかサウ早く戦争もあるまいから、ソナナことを心配してはいかんぞナ。」といつて母親の手前を繕つたが、彼はさて困つたことが出来た、ドウしても今夜の中か明日の朝にも出立しなければならんが、此の病母を獨り残して、どうしたものかと思案に暮れた。かく思ふ

のも實に無理はない。兵隊になつた甲斐あつて戦にも行ける、それは嬉しいに嬉しいが、目のあたり病み衰へた親を残して戦に行かねばならぬ、今の彼の思ひは如何であつたらう？ 彼は母一人、子一人、自分が立つた後は、誰が此の親を見てくれるか？ 杖とも柱とも思ふ自分が死んだら、後はドウなるか？ と考へられずにはゐられぬ。

けれども彼は考へた。何にも知らぬ母親に、今から戦に召されて行きますと言つて、若しものがあつたなら取り返しがつかぬ。不孝には不孝であるが、これは惣じ何も打ち明けずに行かうと決心したのは、何たる慘たらしいことであらう。

其の夜は裏の櫛の森に、コ／＼と夜啼きする怪鳥の聲を聞きながら、破れ障子の隙間から洩れ来る夜寒の風に身を震はせつゝ、母親の肩を撫てたり、薬を煎じたりした。母親が眼を覺まして、「梅やモウお休みんか」といつても、「今やすみませす」といひ／＼、横にもならず看護する彼の胸中は、奈何であつたらう。あれやこれやと過去を思ひ行末を思ひ、この白屋に病母を残して行かねばならぬ

彼は幾度か涙を啜つたことであらう。

梅五郎は予が士官候補生として入隊したとき、新兵で同中隊へ入營したが、素直な、そして元氣のいゝ兵士であつたから、衆兵から尊敬を拂はれてゐるやうであつた。給料も母親に送つてをたといふこととて、いつの間にも孝行兵士といふ名が、聯隊中の評判になつたてであつた。

一夜はまんぢりともせず其のまゝ、夜が明けると彼は竈の下を焚いて、生別れする悲しき粥を煮るのであつた。庭廻りの片付けなどをしてしまつて、何氣なく「お母さん、さのふ役場から今朝来てくれといふたけれ、一寸往つてくるぞナ」といふと、母親は何も知らずに「ア、アイ、往つてゐてナ」と快くいつたのを力にして、彼は窶れた母の顔を見詰めながら、これがこの世の暇乞であるかと思へば、胸も張りさくばかりなるを、「神様、佛様の御助けによる外に途は無」と思つて力なく庭に下りた。草鞋を穿いて敷居を出たが、母にはこれが永の御別れ、此の家も見納めと涙をハラ／＼と落した。

あはれ、梅五郎は戦の門出に一言の別れも告げずして、出てて行かねばならな

かつた。併し彼は徒らに惜別の情に堪へずして泣く女々しい男ではなかつたが、予等は其の情を思うてやらねばならぬ。

彼はトボ／＼として我家を後にしたが、一足行いては立止まり、二足行いては立止りつゝ、拂うても拂うても拂ひ難き涙に困じて効なき露の底深く瞳孔を漂はすのであつた。そしてドウせ母に知れずにするものでもなし、此の儘往つてしまへば、後で母がドンナにか残念に思ふであらうと思ふと、彼はたまらなくなつて、再び我家へ戻つた。裏へ廻り、忍び足で戸の隙間から覗いて見ると、窶れた母親の淋しさうに、薄い蒲團を被つて寝て居る姿が見えたので、彼は胸が迫つて、母に打ち明けやうと思つた折角の決心も、又た挫けてしまひ、トウ／＼何一言の暇乞もせず意を決して出發した。ア、この別れこそ、母子一世の生別、また死別であつた。

彼は役場で受取つた旅費を郵便で皆母に送つてしまひ、船便もありながら、船にも乗らず、車もありながら、車にも乗らず。三十餘里の山坂を驅りとほし、食ふものなければ、岩間の水を掬ひて渴を醫し、根盡きて倒れんとしたことも幾度か

あつた。後に心が残らぬてはなけれども、集合時に遅れては一大事と、晝夜の區別なく山坂を通して驅つた。峠や森や、河原や、村を過ぎて暗中を馳せつゝあつた彼を思ふと不惑に堪へぬ。

松山なる予の聯隊へ到着したのは、丁度夜半であつたので、ドウすることも出来ず、知つた人を尋ねやうかとも思つたが、それもドウかと、營門の前を、あちらへ行つたり、こちらへ行つたりしてゐるところへ、丁度營門を出て来た將校があつた。巡察將校と見え、赤い提灯を下げてゐたが、歩哨に何か一言二言いつて、直ぐに足を右の方へ向けて行き過ぎやうとしたので、梅五郎はツカ／＼と走り寄り、「モシ／＼一寸お尋ねいたします。」と呼びとめて、「今夜はモウ這入られますまいか。」といふと、將校は提灯を高く上げて彼れの顔を見ると驚いて、「松村上等兵ぢやないか？」

「ハア、久野少尉殿ですか？」

「オ、暫くぢやノー、よくやつて来た！」

「ハイ」と彼はなつかしうに久野少尉を見上げて、早や涙が瀧の如く頬に傳

つた。

暗い營門の前で、赤い提灯を中にして、久野少尉と松村上等兵とは立ち話をし、てゐたが、久野少尉は腕を組んで始終「ウンさうか……さうか？」といつてをつた。松村上等兵は少尉殿に逢つて嬉しいといふことを何遍となく言つた。

「兎も角、おれの中隊へやつて来い。」と久野少尉の後について營門を入つた松村上等兵は、第四中隊の一員に加へられることになつた。感慨多き一夜を明かして、明くる朝、梅五郎は「お知らせせずに参りましたは私が悪う御座いました。今となつて見ますれば、なぜ一言申上げなかつたかと残念に思ひます。私は今から戦争にまゐります。立派な手柄を立てますから安心して下さい。どうぞ達者でゐて下さい」と母親に手紙を書いて、それを村役場へ送り、母親に讀んで聞せてやつて下されと頼んだ。孝行兵士松村梅五郎は斯くの如くして出征したのである。

八月二十四日の夜が引き明けると間もなく、盤龍山東砲臺の坂を登つて行く五人の一隊があつた。彼等は少し登つて道が右と左とに分れてをるところの

岐路の辻に立ち止つて何か立話をしてゐるやうであつた。この岐路を右するものは彈丸が中らんが左するものは必ず打たれるといふことを誰いふとなしに言ひ傳へてをつたところである。コンナことはよく言つてをつたものであつて、いつの間にもやら兵士間の申送りともなつてゐたのである。旅順の或る露軍の看護婦がコンナ話をしたことがある。「彈の中の中らんは全く運不運である。ある時暫く振りに郷里の兵士に町で逢つたから一言二言挨拶してゐる中に砲彈が飛んで来て妾には中らんで其の兵士は地上に斃れた。妾は呆氣に取られてドウしたらいいかと思つたが致方もないから司令部へ知らせして死骸を棺に入れやうとすると何事ぞまた砲彈が飛んで来て棺を打ち砕いた。そして妾には何事もなかつた。どこまで彈丸に追つ驅けられる運の悪い人だらう」といつたことがあるが不思議な運命の支配者は實に彈丸である。

ドンナ相談が纏つたか彼の大隊が動き始めたを見ると右の道を行つたものは四人左の道一彈丸に打たれる道を取つたものは唯一人であつた。此の一人は東砲臺を踰えて支那圍壁の側まで來ると立ち止つて右を向いたり左を向い

たりしてゐたがやがて小さい併し力のある聲で「久野中尉殿……」と聲を掛けた。すると直ぐ右手に當つて「オーイ」と地の底からでも起つたやうな小さな聲が聞えたから「居られましたか？」と死者や傷者を飛び越して行き「中尉殿！やられましたか？」といきなり中尉の體を抱いた。

「ウン 松村か、やられた！」

松村伍長は實に屈指の勇士で、これまでに幾度か立派な手柄を立てたのである。「戦闘止むとき無し、彈丸豆を炒るが如し」などと書いて或る人に手紙を送つたといふこともあつたが、之れを見てもその人物の一端が窺ひ知らるゝのである。伍長はある特別な任務を受けて、此の朝の攻撃に與からず翌朝になつて歸つて見ると、聯隊は夕べ全滅したと聞いて吃驚し、「久野中尉は？」と聞いた。「何が何だか分らなくなつてしまつたから、無論戦死せられたであらう」といふものもあつたので、之れを聞くと、松村伍長は何思ふ暇もなく危険を懼れず、戰場に久野中尉を搜索して此處まで來たのである。

「中尉殿！しつかりして下さる！」

「松村！ドウしてコンナ所まで来たのか……お前は早く後へ下がれ。」といひ終るか終らぬ途端に「ウーン」と伍長は中尉の上に倒れかゝつた。

「やられたか？」

「イヤ大丈夫であります。」

「どこかやられたらう？」

「少しやられたやうであります。」と伍長は胸を押へた。

「ひどいか？」

「イヤ、タイしたことは無いやうであります。それより中尉殿はドウでありますか？」

「あれか……おれも大丈夫ぢや」といふうちに、

「ウーン」とまた唸つたから、

「中尉殿苦しうありますか。氣をしつかり持つて下さい……」と伍長はオロオロ聲でいつた。久野中尉は、

「イヤ大丈夫だよ、心配するな」といつたが何を思ひ出したか、

「松村！お前はいつぞや營門の前で、お前の母親が病氣で寝てゐるといつたノウ」といふと、「ハイ」と答へたきり、伍長は中尉の胸に顔を伏せて、太き溜息を吐くのであつた。彼の耳には櫛の森で鳴く鳥の音が聞えたであらう。彼の眼前には軒の傾いた荒屋が現はれたであらう。薄い蒲團にくるまつて寝てゐる、窶れた母の顔がアリ／＼と浮んだであらう。中尉は頭を少し擡げて伍長の顔を見ながら、

「松村！おれも母親一人しかないのぢや」といふと、伍長は夢から醒めたやうに、

「さうで……ありますか？」と驚いて答へた。すると久野中尉は手に持つた軍刀をあげて、

「松村！おれはモウ駄目ぢやから、若しお前が命があつたら、この軍刀を取つて歸つて、片身ぢやというて、おれの母に渡してくれ。さうしてカウいふところて立派に戦死したといふことを、よく聞かしてやつてくれ。」と、中尉の頬には涙が傳はるのであつた。

「ハイ……中尉殿……氣をしつかりして下さい。松村に若し命があつたら、中尉殿の片身も持つて歸りもしましたやうが、中尉殿！中尉殿が亡くなられた後は、松村は誰をたよりにしませう……」

「さうか……松村……」と二人は手を取つて泣いた。

忽ち天から降つたか、地から湧いたか、轟然たる爆音がすると、白煙濛々として戰場を蔽ひ、硝煙の散じたる後には、「久野中尉殿……」と聲を限りに叫ぶ松村伍長の聲のみ寂莫を破つて、哀れにまた物凄く響いた。松村伍長も亦日ならずして野戦病院に於いて、久野中尉の跡を追うて逝いた。母一人子一人の久野松村主従は、かくして戰場の露と消えたのである。

かやうな有様で、聯隊は一夜に全滅してしまつたが、敵壘下僅かに數間の地にころがつてゐた瀕死者負傷者生存者は話すにも話されぬ無残なものであつた。戰場にはカン／＼とした夏の日が照りつけて、何物も目を遮るることなく、石も砂も草も火の如く熱して、死者は既に護謨の如く膨れて、服も張り裂けんばかりになり、今にも腐肉が崩れ落ちんとしてゐた。蛆は早や目にも鼻にも湧いてを

つた。健康者は銃剣を以て穴を堀つて身を隠蔽した。既に銃剣なきものは、手で石を寄せあつめて遮蔽を作つた。そして負傷者を連れて来て、其の中に身を蔽うてやるものもあつた。けれども動くものは忽ち敵に發見せられて狙撃を受けるのであつたから、一握の砂を掬ひ取るにも、一塊の石を動かすにも、並大抵の苦心ではなかつた。重傷者の如きは、苦悶の餘り手足を動かすので、戦友は彼等を抱いて其の手を制し、其の足を押へて、僅かに敵の狙撃を避けたといふ實に慘たらしい光景であつた。されど負傷者の多くは退くに退かれず、動くに動かれず、カン／＼熬りつける日を頭に浴びて、動きもならず、息を殺して夜の到るのを待つのであるから、命の水を得る手段の如きは、無論無かつたのである。そして水筒の水を飲み干して後は、最早如何ともすること能はず、甚だしきは唇を地に接して他兵の小便を泥のまゝ啜つて、漸く渴を醫したのもあつたのである。大小便も負傷者が相重つた其のまゝ、始末で、臭氣と血と汗と——地獄といふものあらば、これが地獄か。何事も實に涙の出るやうなことばかりであつた。この悲絶慘絶なる潜伏中には、敵の爲にムザ／＼と刺し殺されたものも

澤山にあつた。抵抗力なき負傷兵は、暴戻逆なる敵兵を睨んで幾人無念の死を遂げたかも知れんのである。

第二十九 人道の敵

日既に暮れて、残光馬背に落ち、暮雲アカシヤの上に懸りて、風物凄然たるころ、予が馬車は兵營の並木を馳せて、小田君の官舎へ歸つた。

予は露軍が一月一日驚くべき大破壊を以て、根本的に顛覆したる東鷄冠山の跡を訪ひ、また北砲臺望臺、二龍山、松樹山を歴踏して、其の日は歸つた。歸ると間もなく予に面會を求めものがあつた。宮内曹長といつて、曾て予の部下となつて第一回總攻撃の當時、東鷄冠山及び望臺を突撃した一人て、めづらしく生き残つた勇士である。曹長は旅順へ來て、朝夕思ひ出の多い山や堡壘を見るのに加へて、戦友の殆んど總てが死んだ七回忌の其の日に、予と會つたといふのも更に感慨が深かつたらう。予もまた處もあらうに旅順で予の部下でありしところの勇士に廻り會ふといふのも、これも死んだ戦友の引合せてあらうと嬉しくもあり、悲しくもあり、無限の情を催した。砲臺の殘壘に立つて泣いた予は、忽ちに又かゝる人に出會つて、更に涙を増すかと思ふと、感慨無量の語も幾度繰り

返すか知らぬが—予は實に無量の感慨に胸を刺された。

曹長は當年のことを思ひ出しつゝ、眉宇に涙を宿し、愁然として、語るやう、彼は中隊長戦死後、代つて前進の命を下したる予の號令を聞いてから間も無く負傷した。縋帶所へ下がると、懸て死體の如き予が運ばれて來たので、予の名を呼び、予の口に水を薦めたが、木像の如くになつて動かぬ姿を見て、最早此の世の人とは思へなかつたなどと、予の死體が血に漂ひつゝ、擔架に乗せられて、河原の上に運ばれて來た當時そのまゝのことを予の姿を凝視しつゝ、語るのであつた。

予は戦後時々予を縋帶したことがあるの、一つしよに北砲臺の地隙で斃れてをつたのといふやうな人に逢うたことがある。また或る時は予が戦線で斃れて自ら縋帶した、その最初の三角縋帶を野戦病院で解いてくれた人があつて、其の縋帶が見事に血に染んで、一點の白い素地の取りのけも無いほどであつたので、それを記念として保存してゐるといふ人にも會つた。當時死人同様であつた予を憐むのあまり、敵弾下に危険を恐れず、自己の負傷を忘れて予を安全の地に移し、或は予に縋帶を施したる戦友諸君もあつたらう。予が今日在るを得た

るは、全く諸君恩恵の賜物であつて、深く銘肝して忘るゝ能はざるところであるが、併し、途上其の人に逢ふとも、遂に予と如何なる縁故があるか知らずに過ぐることも多いてあらう。予は之れを頗る遺憾に思ふので、こゝに本書を編するの機會を以て、戦友諸君に厚き感謝の辭を捧げ、而して健康と祝福との諸君の上に在らんことを禱るのである。

さて宮内曹長は無事に凱旋したが、中隊長川上大尉の後任たる徳武大尉が中隊を率ゐて、高濱より松山兵營に向つて行進しつゝ、在ると—最初予等と共に此の街道を通つて出征したものは殆んど盡きてしまつて見慣れぬ人が打連れて歸るのはあつたが、—同じ第十二中隊と聞いて、川上未亡人は大尉の遺兒鐵夫君を抱いて、徳武大尉の前に至り、

「鐵夫！お父さんがお歸りになつたよ」と泣く／＼いふと、大尉も心ある人であるから、すぐに鐵夫君を抱き上げて、

「坊や、よく待つてゐた。お父さんは歸つたよ」と右手に戰場で敵の首を斬つた軍刀を肩にし、左手には鐵夫君を抱いて行進した。何も知らぬ鐵夫君は、父か

三二二
—父ならぬ人に抱かれ、小さき手を大尉の帽子より高く挙げて、嬉々としてゐる姿を見て、夫人は素より見るもの皆袖を絞らざるは無かつた。これを大尉の側面に在つて行進しつゝあつた曹長が見て、覺えず貫ひ泣きをしたといふことを話したが、繪のやうに美しい此の一幅の光景——右に斬魔の剣を提げ、左に頑是なき孤兒を抱くの状を想像すれば、何事も戦争の後とはいひながら予は爲に斷腸の情に堪へぬのである。

曹長はまたコンナ話もした。負傷して僵れてゐると、そこに一工兵卒があつて露兵と格闘しつゝあつたが、拳銃で右上膊を打たれたけれども、勇敢なる我兵は毫も屈せず、拳銃を手から奪はんとすると、露兵は我兵の左腕に牙のやうな齒を以て噛みついた。腕も千切れてしまつたかと思つたが、我が工兵は怒髪天を衝くの勢で、そこにあつた大きな石塊を振り上げて露兵の頭に喰はしたから、ウンといつて踏反り返るところを靴で蹴飛ばし、角の立つた鋼鐵のやうな石で叩いて、叩き潰したから、頭がメチャ／＼に碎けて、脳味噌が飛び出したのは、勇ましくも、また惨らしい光景であつたさうである。露兵には氣の毒は氣の毒だ

が、これは格闘の結果、力が劣つたのだから仕方がない。

露兵の勇敢なることは既に之れを述べたが、こゝに曹長の實見としての話によつて憎惡すべき露兵の行爲に就いても、また之れを述べて置かうと思ふ。負傷兵等が僵れて居ると、憎むべき露兵は一々足で蹴つて見て、動くのがあると、鋭い銃剣で芋を刺すやうに突き刺して廻つてゐるのがあつた。すんでの事に曹長も刺されるところであつたさうである。かゝる憎むべき行爲——抵抗力の無いものを弄り殺しにするやうな非文明の行爲は、予も曾て之れを目撃して悲憤に堪へなかつたことがあるが、實に無法なことをすればするものである。是れ獨り頑迷無智なる露兵の蠻行のみとはいへないのである。現に露軍の某旅團は負傷して横臥せる日本兵を刺せとの命令を發してゐたのである。是れ露兵が蠻行を放つたことを最も明瞭に最も確的に自己が證明したもので、最早疑念を挾むの餘地は無い。命令の意は攻撃前進に當り横臥したる日本兵特に仰臥する者に遭遇せば必ず之れを刺殺すべし。如何となれば、日本兵は負傷者の真似を爲して散兵を通過せしめたる後、背後より射撃することあればなりとい

ふのである。かゝるありさうにもない理由の下に創痍に苦しめる憫むべき傷者―全く抵抗をなし得ざる戦闘者に對して危害を加へんとするは如何なることであるか。かゝる残忍非道なる行為を以て天理人道に悖らずとするのであるか。天には神の照覽するあり因果は自然の方則なりいつまでかゝる非行を見遁がすべき。果然あのやうな結果にも終はつたては無いか。

若し日本兵にして死屍たるを裝ひ或は負傷者たる真似をなして敵を欺き之れを不意に攻撃するが如き奇計を弄したるものありとせばこれ或は正當の手段にあらざるを以て露軍は當然其の非行者を捕へて嚴罰し又は復讐するの權利もあるものと言はねばならぬ。然るに戰場に横たれる總ての負傷者を殘殺したる後此の如き殘殺が何故に行はれたるかは對手國の得て知り難き所に屬するを以て要するに負傷者を刺すが如き手段は復讐の目的に適はざる卑劣手段であつて之れを赦すべからざることは最早多言を費すの必要が無い。また我兵の或者は露軍の赤十字旗の下に收容せられたる後生存してありながら刺殺せられたものがある。また或る負傷者は眼球を抉られた。また或者は手足

を切離され耳を削がれた。かゝる虎狼に等しき人道を無視した残酷なる事實は蓋し戦役を通じて各所にあつたらうと思ふ。多數の兵卒のことであるから或は一時の憤激に驅られて非行に及ぶ者が無いとも限らぬ。時には事情の酌量すべきものがないでもなかつたらう。併し苟も一部隊を指揮する司令官が公然文明戦争の法規に違反する命令を發し部下將卒をして之れに頼らしめたに至つては其の罪の大なる二三兵卒の非行とは同日の談て無い。クロバトキン將軍は日本軍の負傷兵又は捕虜を待つに對敵の禮を以てし日本兵の死者に對しては軍葬を施しまた其の重傷者に對しては露國兵と同様の厚遇を與ふべきの命令を發したといふくらゐであるから固より大いに其の厚意を諒とせなければならぬが併しあのやうな蠻行の事實があつて見れば露軍全體は世界の公義人道の大名分に對し決して其の責を免るゝことの出来ぬものである。予は今に及んで露軍の卑劣行為等に就いて多くを言ふことを欲しない。寧ろ露軍に就いて學ぶべきところ頗る多きことを思つて道がに世界の強者として之れを推すことに躊躇せぬものであるが此の項を終はるに臨みて更に一事

を加へて置きたいと思ふのは、露軍が彼のダムダム弾を使用したことに就いてある。予は露軍の使用したるダムダム弾を見たのみならず、予が右手に蒙つたる一發の彈瘡は、正しくダムダム弾であるとの鑑定であつたから、一矢を報いて置かなければならぬ。ダムダム弾は亞弗利加の猛獸狩に使用すべき彈丸で、製造元は亞米利加である。猛獸狩の彈丸を打つてよこすのも随分亂暴だが、併し日本兵を猛獸に見立てたと思へば腹も立たぬ。ダムダム弾は被筒の無き鉛彈で、其の創痕は頗る痛ましく、人體に竄入すると、彈丸は小さな破片に飛散して、全く原形を存せざるに至るものである。それが骨幹等の堅硬なる物體に衝突するときは、忽ち爆裂作用を起して、四面八方の組織中に灼熱せられたる鉛の破片を飛散するが故に、實に憎むべき恐るべき慘劇を演ずるのである。これが顔などに中たつて、口が一文字に耳まで裂けたものがある。鼻に大きな窓があいて、咽喉の奥まで見えるやうになつたものもある。憎むべきはダムダム弾で、露軍はかゝる毒彈を以て正式の武器として使用したるには非ずして、武器の不足よりして、非道と知りつゝ之れを使用したといふことであるが、一發を使用す

るも、百萬發を使用するも、其の憎惡すべき害敵手段に至つては同一であつて、虐殺と何の擇ぶところが無いのである。

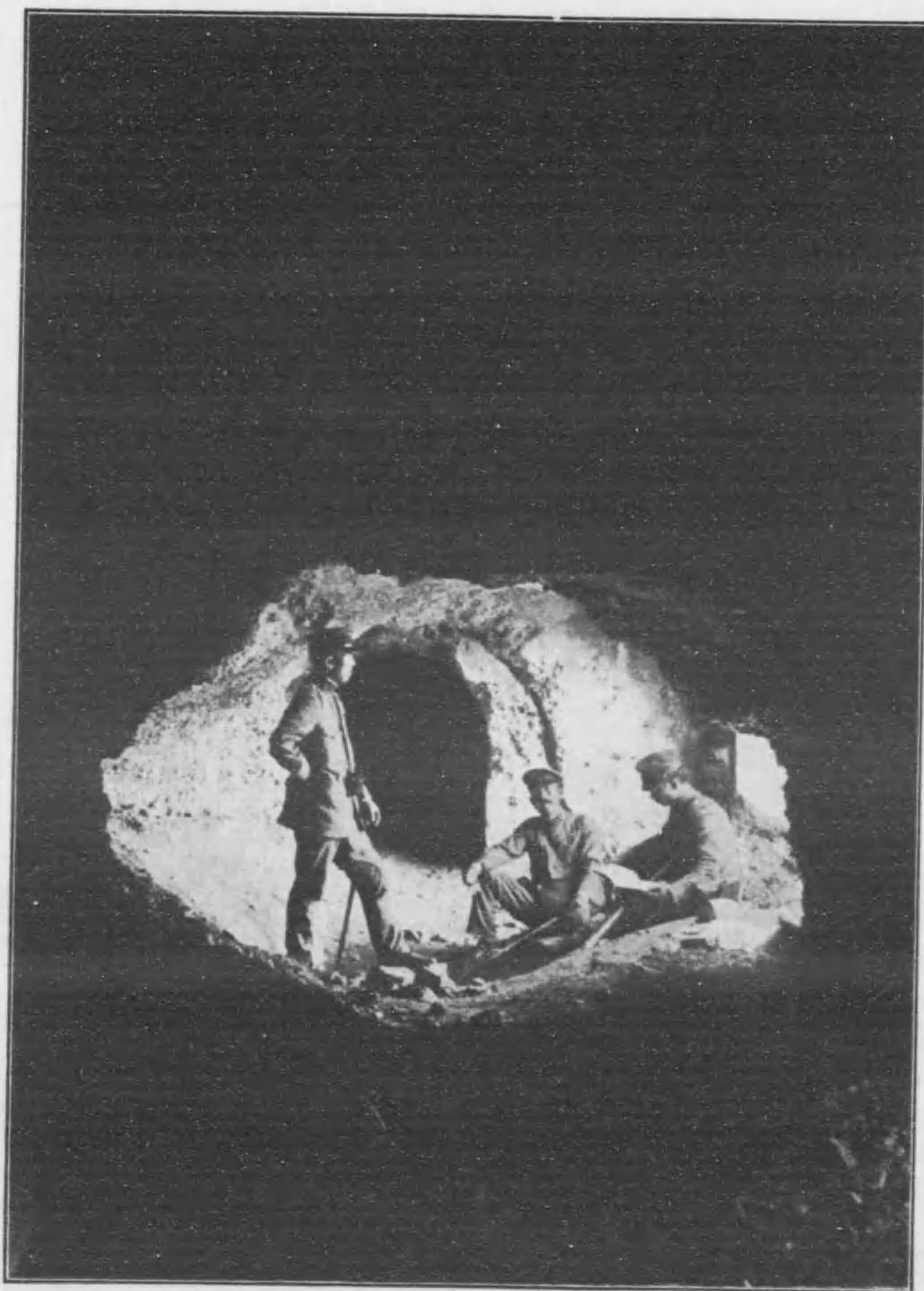
第三十 死の墜道

第一回總攻撃に於いて攻撃を舉行したる東鷄冠山同北砲臺吉永砲臺望臺二龍山松樹山海鼠山及び二百三高地の一部が皆失敗に歸し、また攻撃を續行することの難きに至りたるを以て軍は其の後正攻法により攻路を掘開しつゝ、九月十九日より同二十二日に亘る第二回の總攻撃を行ふに至つた。第二回に於いては中央縱隊即ち第九師團の一部が龍眼北方堡壘に向つて吊ひ合戦をして之れを占領したるに止まり概ね眞面目の攻撃を避けた。この砲壘は水源保護のために設けられた、一名クロバトキン砲臺と稱するものである。十月十三日の夜を以て遂に龍眼に於ける水源の杜絶をなして旅順水道の水口を塞いでしまつた併し貯水地砲臺が日本軍に歸した後でも旅順では左程水に不自由を感じなかつたといふものはこれより先き市中到る處に井戸を掘らしたから、これによりて飲料水の供給を得て餘りあつたのである。食料に窮乏した旅順も水に就いての苦痛は遂に之れを聞かなかつた。予は旅順で露軍の使用した穿井器

なるものを見たが頗る完全したもののやうに思つた。

クロバトキン砲臺の攻撃には第九師團も千餘人の死傷者を生じ、四宇形山、干大山及び第一回總攻撃のを合はせると裕に一萬千五百の兵員を減じて一聯隊僅に三ヶ中隊といふやうなものになつてしまつたのである。第一回總攻撃以來の日本兵の死骸は夥しく堡壘前に放擲せられ中にも望臺盤龍山東鷄冠山の間が最も多く蟲聲唧々たる裡、秋月冷かに天に懸るの下、腐肉累積し、惡臭堪へ難きがため、露軍は石炭酸を撒布して僅かに之れを防ぎつゝあつたといふことである。

二百三高地は既に此の時我が爭奪の目的物となつてをつたのである。九月十九日未明我軍の野戦重砲は砲撃を開始し續いて我が野砲も亦砲撃し、その成果を待つて突入すべく、後備歩兵第一聯隊及び同第十六聯隊は攻撃準備陣地に在りて時機を待ちつゝあつたが、連續射撃のまゝ其の日は徒らに暮れて敵の掩蓋は一つも破壊したものが無かつた。夜に至り掩蓋の二三箇所を破壊口を生じたるを以て兩聯隊は前進攻撃の途に就いたが、今まで沈黙を守りつゝありし



(者著はるて立) 砲臺外岸窺客

守兵は俄かに立つて機關銃を砲臺上に排列して我が前進路を掃射し且つ南方諸砲臺より砲火を集中しまた二百三高地の東北方海鼠山よりする敵の銃火は我が突撃隊を側面より射撃したから死者踏躓して遂に一人の達するものが無い。しかのみならず敵壘下に肉薄したる歩兵隊は敵火のため後方連絡を杜絶せられ進むに進まれず退くに退かれぬ有様となり二十日も暮れ二十一日も暮れ徒らに敵の逆襲を蒙りて如何ともする能はず。二十二日に至り天明大突撃を以て二百三高地の山頂に登つて四方八面を切つて廻り一大掃蕩をやつたがその突撃の聲だけでも二百三高地は引つ崩れるかと思はれるほどであつたに遺憾なるかな敵の爆弾に裂けた我兵の大の字になつて空中に飛び上るもあれば石に當りて腦漿の迸るもあり小銃と機關銃の掃射とによりて遂に亦高地の主たること能はず無念の涙を吞んで一時谷地に退却するの止むなきに至つた。而して兩聯隊工兵隊を合して總員纔かに二百また如何ともすべからざる悲況に陥つた。これ突撃隊が十數回の奮闘と連続晝夜に亘りて寢食を廢したると殆んど總ての將校を失ひたると疲労困憊また失望との結果なりとはいへ、残念

至極のことであつた。

秋も早や十月になつて、戦場の荒草荆棘離々として哀れは愈々深かる中に、背後の整頓と坑路の前進とに力めて、こゝに二十六日より第三回總攻撃を擧行するに至つたのである。

第三回總攻撃に於いて、左縦隊の主なる目標たりし東鷄冠山北砲臺は、如何なる情況にあつたか、予は少しく之れを語らうと思ふ。北砲臺は永久築城にして、旅順背面防禦東北正面中最も堅固に編成せられ、砲數二十門、機關銃十數門を備ふるところの難物であつた。第一回總攻撃の八月二十一日に於いて、工兵隊は電流鐵條網の破壊に成功し、歩兵隊の先頭は砲臺の外岸頂に達して、日章旗を翻したが、壕の幅廣く、底深く、携帶橋も架すること能はず、勇敢なる將卒は壕底に飛下して向岸の斜面に上りたるも、前後左右より機關銃の確射を受けて悉く戦死し、殆んど一名の生存者も無かつたのである。第二回總攻撃に於いては、只攻路を進めて右縦隊及び中央縦隊の行動に對する牽制動作をなすに止まつた。九月上旬より起したる攻路は、第三回總攻撃の十月下旬に至つて、延長四千米突に

達し、攻路頭に於ける彼我の衝突のため、死傷三百餘名を出したが、十月二十三日に至つて敵の外岸頂を去ること實に五十米突まで近接した。この攻路頭の小衝突は、殆んど半時も絶えなかつたのである。十數名より成る敵の決死隊が毎夜堡壘を出て、我が作業兵に向つて襲撃して來るのであるから、敵は拂はねばならず、岩は掘つて行かねばならず、この作業は實に言ふに言はれぬ苦しみがあつたのである。我が攻路が近接すると、敵も油断をしてはをられんのであるから、死力を盡して防害に出掛けて來る。かうなると我も到底尋常の攻路に據ることが出來ぬから、始めて地中に坑道を穿つて前進せんとするの窮策を取らなければならなくなつたのである。敵も之れを知ると、亦地中を傳うて我が作業を防害せんと試み、彼我作業兵の工事が進むにつれて、地中で鼻を突き合はしてゐるやうになり、敵の方で一鍬打つと、こちらの坑路の小石や土が揺れて落ちるやうにもなつた。

我が坑道作業に對して敵が何時爆破を以て防害を試みんとも分らんのであるから、油断はならなかつた。そして爆破のために、我が作業兵の死體を委棄す

るやうなことがあつてはならんと、長い綱を彼等の足に縛つて前進せしめたといふやうなこともあつた。綱を後で引き手繰ると、ザク／＼になつた足だけが戻つて來たといふやうな恐ろしいこともあつたのである。足に綱を縛られて往く作業兵の氣持はドンナであつたらう。後で綱を持つて控へてゐる作業兵の氣持はドンナであつたらう。思うても身震ひがする。二十七日午後一時突如として敵の一大爆破に遭遇し、壯なるかな、我が先頭の作業兵數名は一小肉片だも残さずして粉碎せられた。しかし何が幸福になるか分らぬもので、敵が此の爆破は無論我が坑道を毀壞したけれども、装薬の量を過大にしたため、自から却へて外壕前の鐵條網を破壊し、一大噴火孔を作つて、我軍の探知せんと企てつた。午前一時、我は多量の爆薬を用ひて其の奥壁の外側に装置し、之れを爆破して破墻口を開いたのて、歩兵隊に機關銃を持たせて突進せしめた。これを我軍が始めて敵の地中に於ける堅體を破つて突入したのであつて、此の一個の孔を穿つまでの苦心といふものは、實に一通てなかつたのである。いはゞ此の一個の孔

三二四
を穿たんがために、八月の第一回總攻撃後より二ヶ月間、鶴嘴が棒になるまで掘つて掘つて掘り抜いたのである。二十八日夜に入つては、更に大爆破を行つて、七米突の破壊孔を穿ち、稜や土囊の布に石油を注ぎ、火をつけて此の孔から投げ込んで敵を惱ましたものである。この世からの焦熱地獄は實に旅順の地下に在つたのである。これからしては、土囊を以て一個の障壁を築き、先きへ先きへと押し進めて、漸次占領區域を擴めつゝあつたのである。而も一日の前進工程僅かに二三尺といふに至つては、果して何れの日にも砲臺全部を占領するに至るであらう思へば、随分氣の採める戦であつた。併しこの地下の一障壁を隔て、敵と面すること僅かに四五尺の間に在つて、日夜爆薬を交換し、銃火を交換し、火事場の如き中に在つて戦ひ疲れては敵も味方も、軒聲雷の如く、累石死屍を枕として眠り、目醒めると再び銃を上げて互に鎗を削つて戦つたといふ有様である。「オイ、いゝ加減に降参しろ。」などと敵兵に投降を勧めたこともあり、「日本は此處からどれ程あるか。」などと露兵が問うたりするやうなこともあつた。或時などは向うからブランデーを投げてよこしたこともあつたから、コチラからは

返禮に鎗詰を投げ込んだりして、互に舌鼓を打つて、一盃飲んでは頭を上げてズドンと銃を放し、又た一盃飲んでは銃を放しといふ鹽梅で酒の肴に銃を放したのか、銃の肴で酒を飲んだのか、腥惨たる死の墜道の中に美しい人情が流露たしことを思ふと、戦争もまたゆかしいところのあるものでは無いか。
予が小田君等と北砲臺を訪うて、予が聯隊の破壊したる彼の破塙口から比叻の崩れに傳はつて、穹窖内に潜つて這入ると、直ぐ一個の窓からして、砲臺の外壕を窺ふことが出来た。この窓から外壕を見ると、丁度其處が壕の曲り角で、屈折した穹窖の外壕に面した窓が見える。そして予が立つたところの窓からして、我兵が斜めに四五間先の穹窖の窓に向つて打つた小銃彈が、其の窓の周圍を剝り取つて、角い窓が形も何にもなくなつてしまひ、そのあたり小銃彈の蜂巢ならざるなきを見て、予は恟としたのである。日夜間断なしに打つた彈丸は、皆敵の機關銃が頭を突き出してゐるところの窓に向つて、鋼鐵の如き比叻製の岩屋を剝つたかと思ふと、根氣も能く續いたものであると、そゝるに當時のことを思つて、竦然たらざるを得なかつた。

予は其の窓から外壕に出て、左右を眺めると、素より昔の面影は無いけれども、なほ其の磊々たる比叻の破片破壊せられたる穹窿の惨状を見て、この壕底に埋まつた勇士のことなど思ひ浮べた。

かゝる苦心を凝した上、十月三十日午後一時を期して、予が聯隊の一大隊は破墻孔より外壕に出て、砲臺に飛び上がった。敵の砲身に跨がり、大手を擴げて萬歳を叫んだものもあり、銃剣を揮つて敵の中に割込んで行つた勇士もあつたが、皆バタ／＼とそこに斃れて、また生存者が無くなり、壕の中は死骸を以て満たされ、血は流れ漂ふといふ有様で、一段落を告げたが、風餐雨蝕七星霜惨たる記念の北砲臺は今や荒草茫茫の中に残つてゐるのを見て、訪客は必ずや馬を駐め襟を潤すてあらうと思ふ。我が國民の精神的活記念が實に遼東の一角に残存して、斷石雜草皆當時を偲ぶのよすががたらざるなきを思へば、萬古不滅の靈場たる此の戦跡を永久に保存するの企のありたきものである。年少子弟は是非とも一度は諸戦跡を歴訪して、勇將猛卒が埋骨の地を憑弔するがよい。是れ獨り精神修養上絶大無限の密教たるのみならず、また治に在りて亂を忘れざるの一大

教訓に接する所以であると、予は堅く信ずるのである。

其の後の戦闘に於いて破壊したる外岸の崩れを傳つて砲臺の上にあがると、予が乗り捨てた馬車が幌を懸けたまゝ、馭者のニハの居眠りしてゐるのが、前岸の外壕を踰えて向うに見えた。そして右の方の化物堡壘の草原に、驃馬と驢馬との數頭が、アゴ、アゴといつた風の嘶きを擧げてゐるのが、化物堡壘であるだけに、一層哀れなる感じを惹かれずにはなかつた。

化物堡壘といふのは、吉永堡壘より北砲臺に亘る間に設けられたる敵の掩蔽部であるが、いつの間にか誰いふとなしに化物堡壘と呼ぶやうになつた。それには種々の想像説があつたけれども、何れもこれといふ根據のあるものは無い。一説にはもと此處には山神を祭つた社があつたのを、露軍が築城の際取り拂つてしまつたところが、其れから不思議なことがあつて、或る時は村長の娘が一夜不意に家を出たさき、二日立つても三日立つても歸つて來ないので、神隠しに逢つたに違ひ無いと、鐘や太鼓で旅順の山々谷々を捜し廻つたけれども、トウ／＼行方が分らなかつた。然るに或る日血痕のついた娘の着物を此の堡壘で發見し

たといふことである。また一つには苦力が命令に服従しなかつたとかで、ある日雨のしとくとふる中で露兵が彼を斬つて棄てたのみならず、哀れなる彼の妻を辱めて、これも斬り棄てたといふことで、それからといふものは、變なことばかり續いて雨の降る夜は必ず苦力夫婦の亡霊が出るのとやらで、その青い顔に血がタラ／＼と流れ恨めしげに睨み返す形相たら無いので、哨兵が目を廻して倒れてゐることなどもあつたさうである。予等はこの化物堡壘に時々白煙の上るのを見ることがあつて、敵の炊事場にしてはあまり戦線に近いし、不思議な所であるといつてをつたが、此の不可解な白煙の昇ることからして、我等の間にいつ誰といふとなしに之れを化物堡壘と呼ぶやうになつたのである。また此の堡壘に向つて突撃したものの、還つて来た例が無いといふので、其の名もついた。噂の化物堡壘には如何なる魔性の潜在せしにや。我等は材木の如き手で日本兵の手と足を驚擾みにしてガヂ／＼と噛む怪物の血の滴る其の恐ろしき口を想像してゐたのである。

この化物堡壘と望臺との附近には、時々奇怪なものが飛び出したことがある。

それは日本國旗である。日本軍の手殿しい砲撃から、一時の難を避けんがために宛も日本軍の歩兵が砲臺に肉薄して、國旗を繰してゐるかの如き装を爲して、砲撃を躊躇させた卑劣手段である。この國旗は今や旅順記念館に保存してある。布地は敷布を應用したものであらう、大きなものである。旗竿は野戦電信の支柱である。正當なる抵抗によりて失ひたるところの銃砲器械の如きは致方がないとしても、かゝる卑劣なる記念物の永く後世に傳へらるゝことは、那計り露軍の苦痛とするところであらうか？ さればこそ人間は眞直な行ひをしたものである。因果は觀面未來永劫此の武士らしからざる行爲が、世界の人の胸に刻まれてゐるであらう。かゝる公法を無視したる化物國旗も、化物堡壘であればこそ出られもしたので、滅多な處から飛び出された譯のものでは無い。

第三十一 青年の國

あの山陰に一團この山腹に一團孤雁秋月を渡るの時將士皆眼を閉ぢ唇を嚙み衣の袖を濡しつゝこの先の如何になり行くかを憂ひ悲憤の涙に暮れてゐたのである。旅順の歴史は實に無念の歴史で、堅壘の前に剣を抱いて泣いた將卒は、當年の事を憶ふ毎に、轉た襟の寒さを覺ゆるてあらう。

諸ともに見ばやと思ふ人はみな、

昔の下なり、秋の夜の月。(稗所教子)

予等はこの情で泣いてをつた。秋とはいへ、滿洲はもう寒い切るやうな風が吹く。生残りの兵士が石塀を拵へて、中に五六人づゝ這入つて、寒さを凌ぎつゝ、トロくと思ふかと思へば、また夢が醒め、氷の如き秋天の月を眺めつゝ、身震をしてゐた。

第一回第二回第三回總攻撃の失敗よりして、軍の状況は最も痛心すべき状況に陥つた。敵の第二太平洋艦隊即ちバルチック艦隊が本國リポを發し世界

史上未だ曾て聞かざる大膽なる航海の途に上つたこと、北方に於いては沙河會戰後露軍が續々増援隊を送りつゝあつて、其の來着するを俟ち、大舉して攻撃移轉をなさんと計畫せること、此の二つの重大事件が伴つて來たため、我軍は其の發展如何によつて或は悲しむべき戦況に立ち至らんと限らぬことになつたのである。即ち露軍は海陸兩方面に優勢を加へつゝあるの時に際して、我軍前面の状況が依然たるに於いては半死の運命に立ち至らしめたる要塞をして、俄かに活氣を呈せしむるに至るてあらう。砲臺の一突角を占領せんとするにさへ、幾何大の犠牲を供したかも知れぬのに、ましてや一度活力を要塞に與ふるに於いては、この先たとひ幾年を費すとも、たとひ幾萬人を殺すとも、之れを手中に收めることは出來ぬかもしれぬ。否又遂に如何なる手段を盡すとも、之れを抜くことが出來ぬであらう、そして世界の物笑ひの種を貽すてもあらうかと思へば、此の時ほど心を痛めたことは無い。

十一月二十六日には中村少將が(今の侍從武官長)特別豫備隊なるものを指揮して、皆白樺をかけ、要塞内部に突入する目的を以て松樹山に向つて突撃した

たが、これも不成功に終つてしまつた。當時中村少將の下したる命令は、涙なく
ては読み難きものである。一人の生還するもの斷じてあるべからず。本職の
次には第二指揮官として某聯隊長を、第三指揮官としては某聯隊長を豫定すと
いふやうな豫め自己に代るべき指揮官を定めたるなど、以て當時の悲慘なる情
況を察することが出来る。

併し要塞の守兵は自己の前後にかゝる優勢なる増援隊の來たりつゝあるこ
とを知る筈は無論ない。最早要塞に對する希望も、半ばは之れを放棄してを
たかも知れぬが、追がに之れを口に出すものはなかつた。併しこゝに露軍のた
め最も痛心すべき一大事件が起きて來たといふものは、食料品の缺乏を來たし
たことである。中にも肉類は七月下旬よりは全く之れを口にすることが出来
なくなつたので、八月に入つてから止むを得ず軍馬を屠つて食ふに至つた。龍
城の守兵が馬を屠つて食らひ、其の血を吸つて命を繋いだなどは、昔の戦記で
讀んだことだが、それが現に旅順にもあつて、八月以降は肉といへば馬に限つた
ものであつたさうだ。また十月初めより要塞の支持も困難を感じ、砲彈缺乏の

ため所望の射撃を行ふこと能はざるに至つた。しかし設令糧食缺乏の爲に守
兵の體力が漸次衰弱して戦線に立つこと能はざるものを、夥しく生じ従つて病
者も續出するに至つたにしろ、かゝる理由の下に大露國の要塞が日本軍に降服
しやうなどとは、露軍は夢にも思つてゐなかつたのである。

肉類の缺乏と共に野菜の缺乏はまた非常であつた。旅順には空地が尠い畑
地などはあまり見られぬところである。それで野菜は日本軍の攻圍を受くる
以前、要塞前地に在る土人に獎勵して耕作させてあつたが、運の悪いときには、ど
こまでも悪いもので、丁度收穫期に、その地區が悉く日本軍の占領區域内にはひ
つてしまつたため、折角骨折つて作つた野菜を日本軍に献上してしまつたとい
ふやうな事になつたのは、可笑な譯だつたが、これ以來露軍の野菜缺乏といふ
ことは、想像よりも甚だしいものがあつた。これまでは海上よりの密輸入で多
少は凌いでを つたが、八月旅順沖の海戦後、この糸のやうな命の綱が切れてしま
つてからは、最早どうにも動きが取れなくなつた。

日本軍には乾燥野菜といふものがあつて、牛蒡、胡蘿蔔、甘藷、馬鈴薯、芋、蓮根、慈

姑、南瓜、百合などのいづれも石のやうに固まつたのがあつたが露軍はかゝる調法なものを持つてはゐなかつたかのやうに見える。

人間が野菜を断つと壞血病といふ恐ろしい病氣に冒される。難破船が救助されて、船員が今にも死にさうになつてゐたのをある氣の利いたものがあつて、玉葱の汁を飲ましたら見る／＼内に元氣を恢復したといふ話もある。旅順戦では露軍も壞血病といふ日本軍以外の一大勁敵を控へて非常に難儀したのである。兵卒は野菜を食はずとも生命を失ふことなしなどといつて、テラから菜園などを設ける考へがなく、野菜缺乏といふ事實が迫つてから初めてピツクリしたものもあつたが、モウ後の祭りて手のつけやうがなかつた。幾萬金を出しても菜つ葉一株も買へないやうなハメになつて、開城のときには黄金の鉢に大根が植ゑてあるなどといふ珍事があつたさうである。この盆栽のやうな大根鉢を朝夕眺めて、萬一の用意にしてをつたものと見える。ステツセルも開城の時、「壞血病といへる無慈悲なる一勁敵は更に我が要塞に侵入し、兵士の冒險心、耐忍力は殆んど底止する所を知らざるにも拘らず、遂に如何ともすること能は

ざるに至れり」といつてをる。即ち旅順開城の一原因は糧食缺乏殊に野菜の缺乏にあつたことはいふまでもなく、日本兵に震へ上がつて菜のやうに青くなつた露兵君も、しまひにはモヤシのやうにへろ／＼になつたかと思ふと全く氣の毒である。

要塞の糧食を食ふのは自分で砲臺を認るのと同様で、要塞の命數はこれ一つでも定まるくらゐのものである。併し旅順では守兵が皆能く戦つて、能く死んだから開城前には、夫れでもまだ一ヶ月を支ふるに足るだけの糧食を持つてゐた。十二月二十九日夜の將官會議に於いて、ステツセルは健康兵僅かに八千を餘すのみにして、最早今日の場合日本軍に抗するの餘力無し。要塞の運命を決すべきの時機到來せるに非ざるなきやと告げたとき、開城を可とするものは、旅順聯隊の存在せざることを、友軍の救援頼むに足らざることを以てしたが、スミルノフは、「守兵の數三分の一に減じ、砲半數を減じ、糧食僅かに一ヶ月を支持するに足るが如き情況は、要塞を防禦する者の豫期せる所なり。第一線の防禦難きに至らば、第二線に退くべし、第二線難きに至らば、第三線に退くべし。吾人が開

城を決するは、單に糧食の多少如何にあるのみ」といつて聽かなかつた。遂に極力抵抗を繼續するの意見に歸したが、ステッセルも亦た其の意氣を壯なりとして、一場の悲壯なる訓示を與へたといふことである。一ヶ月を支ふるの糧食を有してをりながら、何故數日を出てずして、旅順は開城するに至つたであらうか、予は最早多くを語るに忍びぬ。いふまでもなく、此の會議に於いて、既に開城の意見は期せずして有力なる將軍の頭にあつたのであらう。

此の會議のとき、極東赤十字總裁陸軍中將バラシヨーフの意見が頗る重きをなしてゐたといふことである。バラシヨーフ將軍は、耳の遠い人であつたが非常な勉強家で、將校が馬車で駆けつてゐるのを見ては、厭な顔をしたり、若い士官が夜更までトランプを闘はしてゐるを見ては、これでは露軍も負けるに極つたといつて、ひどく憤慨してをつたといふことである。將官會議の席上で、日本は青年の國であるといつて、大いに警告を與へたのみならず、一隊の指揮官をつかまへて、あなた等は軍人だから死にたからう、老鐵山へ立籠つて死守もしたからう。併し人道といふことについても、一考はして置いてもらひたいといつたと

やられて、この一言がひどく將軍達の耳に應へたとみえて、開城の一動機ともなつてをるといふ噂である。

籠城して居つた或人に聞くのに、肉や野菜は非常に缺乏したが、酒はイクラでもあつた、併しビールは尠かつたといふことである。肉一片が五圓したこともある。鶏一包が十五圓から二十圓まであつた。麵包一片十五錢くらゐはしてゐた。鶏一羽が十五圓から二十圓まであつた。随分亂暴な話である。鏡湯が一圓別仕立の蒸風呂價十五圓也は實に驚いたものである。軍人は手當がよくて、平素十圓取りの者は十倍の百圓貰へる、百圓取りのものは千圓貰へるといふ勘定らしかつたから、工面もいゝには違ひなかつたらうが、かう無茶苦茶な値段では、茶の一ばいもウカ／＼は飲まれぬ仕誼であつた。それでも露人は「構はぬ致方が無い」といつて我慢してをつた。これが日本人ならず、に「困つたなア」といふところであるが、露人はさうは決して言は無い。これも神意の存するところであらうなどと思つて諦めてゐた。露人ほど神様をかつぎ廻るものもない、ナンでも神様でなければ、夜の明けぬ國と見える。「道へ水を撒いてはどうか」と巡查がいふと、今に神様が雨を

降らすだらう。」などといつて澄ましてゐる。食ふに困るのも神のなすところ、戦に敗けるのも神のなすところ、ドウにも致方が無いなどと思つてゐるから、ノンキなものであるが、そこにまた豪いところもあるやうに思はれる。

第三十二 腕の電柱

二百三高地の石を割つたら血が出るとは、ありさうな話である。まさか血も出まいが、二百三高地は、彼我の兵二萬人の死傷者を作つたところで、全山血に浮いたのであるから、石から血が出さうにも想はれる。十一月二十六日より十二月六日に至る間、即ち第四回總攻撃の大部は主として二百三高地の戦鬪であつたが、予は最早多くの戦況を語るまい。一體戦鬪といへば、弾丸が飛んで來る、石が飛ぶ、コロリと轉げる負傷者もあれば、ウーンと踏反つて死ぬものもある。大戦であらうが、小戦であらうが、之れにかはりは無。唯その弾丸の分量や、コロリやウーンの數が増加するのみである。二百三高地の名を聞いても身震ひし、たくらゐであるから、如何なる慘劇を演じたかは、最早繰り返すの必要を認めぬ。旅順では人間の命が安かつた。人間もコンナに脆く死ぬるものかと思ふと、不審なくらゐである。人の死骸を珍しがるのは、まだ一人か二人のときで、カウ山一面死骸で埋まるやうになつては、大根が芋か、轉がつてゐるよりも、尙感覺を

引かなくなるものだ。

予が旅順第二日の訪問は、二百三高地であつた。この日は朝から少し遠廻りをして、二の馬車を驅らしたため、二百三高地の麓へ来た頃は、二の馬車が四五間づつ行つては馬を駐め、後を振り向いては何かモジャ／＼と頻りに喋つて、ブンブン腹を立てゝゐるので、初めの中は何の事だか分らなかつたが、漸く豫定よりも大分遠道をしたので、約束の賃金を増してくれといふ途中での催促であることが分つた。ヨロシイ／＼といつてやつても却々安心が出来ぬとみえて、幾回となく馬を駐める。しまひにはモウ馬を動かさぬと来たので閉口してしまつた金を前渡しすれば、いゝ加減な苦情をつけて、可なりな頃に馬をとめて動かさぬ後でやるといへば安心しないで、馬を動かさぬ。いかさま困りものは、二の馬車である。

二百三高地は戦後、死骸の後片付をするに、手のつけやうが無かつたさうである。麓から死骸を引抜くと、ズル／＼と山の上から死骸が下つて来たといふやうなこともあつたのが二百三高地で、これを聞いても、足の踏みどころも無く、

一面に死骸が埋まつたことを想像し得られる。敵の堡壘を爆發しては、我兵もその土砂を引被つて、幾十人ともなく地中に埋まり、また爆發しては埋まり、何回となく引つくり返したので、山の底まで死骸が詰まつてゐるわけである。一雨毎にコロ／＼と骨が出て来るのもそれがためだ。二百三高地といふ墓場には、これから何百年たつても、日露勇士の骨が盡きて無くなることはあるまい。帽子や外套の切れさへ、七年の今日でもまだ昔のまゝである。朽ちてもをらぬところに、戦後早々の趣きがあつて、壯烈なりし状を思ひ浮べしめる。

二百三高地の塹壕で思ひ出したが、北砲臺の塹壕で土中からヌツと突き出てゐる死者の腕に電話線の巻きつけてあつたことがある。この一事を以て既に戦闘の何者なるかを説明して餘すところが無いと思ふ。死んでも腕を伸べて、電話線の支柱になつてゐる兵士に思はず敬禮したが、二百三高地の塹壕には、腕の電柱がソコにもココにもベタ一面にあつたといふことである。

二百三高地は堅固なる工事を施してある陣地ではなかつた。高地の頂上に登つて見ると、一幅の俯瞰圖として、旅順市街と西港の全部と東港の大部分とが

手に取るやうに見える。椅子山、案子山、鴨湖嘴、堡壘などは眼下に見える。かゝる要衝の地點に、何故永久的築城を施さざりしか、これが甚だ疑問である。日本軍の攻撃を受くるに及んで驚いて工事を始めたくらゐなものである。それとも備砲の如きは僅に三四門しかなかつたやうである。工事の費用も竭きてしまつて最早こゝまで永久的工事を施すの餘裕がなかつたといふことであるが或はさうかも知れぬ。日本軍が主として要塞の東北方面即ち北砲臺、二龍山に手をつけたけれど、奏功しないので、止むを得ず、二百三高地に主力を移したが、是れまた斃死者の山を成すに止まつて、東北方面と同一寧ろそれ以上悲惨なる状況に陥つた。併し最早引くに引かれぬハメに立ち至つたのみならず、二百三高地の價値は、旅順内部を俯瞰し得るの利益あるを以て、一度び我が有に歸したならばその瞬間を以て旅順に致命傷を與へたと同然で、最早旅順は抵抗の餘力はないものに極つてゐたのである。露軍が二百三高地の喪失は、かゝる大事であるから、日本軍の攻撃を受けつゝ、一方工事を督勵して遂に永久堡壘に讓ることなき三條の散兵壕と強固なる二條の鐵條網とを廻らし、頂上の鞍部―二百三高

地は馬の鞍のやうな山である―に堅道を穿つて、塹壕と塹壕とをつなぎ、其の塹壕は軌條と鐵板とで蓋うた。

十二月五日午後四時四十五分を以て、遂に之れを占領したが、開城後露兵の死骸を收容したる數が五千四百であつた。前後恐らく七千以上の露兵の死骸が横たへられたことであつたらう。占領後直ちに頂上に觀測所を設け、六日午前十一時、旅順港内の霧が晴れると共に、我が二十八榴彈砲八門は、港口内に在る敵艦に向つて射撃を開始した。丁度要塞の裏から射撃するのであるから、如何な旅順も之れには弱つた。これより先き旅順市街に在つた將校の或る者は、日本軍の砲彈が市街に落ちて屋根を打ち抜いたり、人を斃したりするので、危険であるからといつて、家族を砲臺内の兵舎に連れて行つた。家族も亦主人と共に砲臺の中に居ることを非常に喜んでをつたといふ有様であつた。山の上は空氣もよし、見晴しはよし、子供は珍しさうに、窓際や廊下や倉庫の廻りや砲臺の中心庭に出て、飛び跳ねて遊んでをつた。時には大砲の上へ上がつて鬼ゴツゴツしたり、大砲を打つ砲手の眞似をしたりしてをつた。また兵隊から戰の話の聞き

たり、機關銃の射撃を見たり、狼火が花火のやうに空で破裂するのを見たりして躍り上がつて喜んでをつた。併しそれも一時で、前面よりする日本軍の壓迫が激しくなつて、砲臺も大抵は半ば破壊されてしまつたのみならず、二百三高地の砲彈が背面を攻めつけるので、如何な子供も首を縮めて穴の底へ引つ込んでしまつた。

二百三高地の上で支那人が箒を持つて迂路ついでゐるのを見た。予等を見ると直ぐ岩の陰へ隠れてしまふが、彼は重に小銃彈の打殻を拾ふものと見える。何か目ぼしいものが落ちてゐないかと睨み廻してゐるのだらうが、今はモウ何も落ちてゐない。其のひかし死骸の山であつたときには、少しは懐を肥したてあらう。予等は今日でも唯一人で此の山上に立つのは、何となく氣味悪く思ふのであるが、箒をかへて塹壘の間を徘徊する支那人等には、何等の感じもないのであらうか。

二百三高地を下りて新市街に出ると、煉瓦作りの半成家屋がいくらでもある。それを見て同行の或人は、日本人は、アンナ大きな家を貰つても、とても經營が出

來ぬ。日本人が來ると、折角積み上げたアノ煉瓦を皆崩して、其の傍に小さな小屋を作つて住んでゐる。如何にもコントラストが面白くないかといつたが、全くアンナ大きなのを貰つても始末にいくまい。露人は追がに大國の民たるだけあると思はれる。總てについて、危大なるところに露兵の眞味がある。

市民は砲撃の間は避難もするが、砲撃が止むと、平日の如く街路に出て、往來も相當に賑つてゐたといふことである。砲撃も半年から續くと、いつまでも怖がつてをられぬと見える。旅順の日本橋—舊市街より新市街に至る橋—の傍の石塀に掩蓋を作つて、そこには女子供や又は將校の妻君なども避難してをつたといふことである。そして通行人の雨宿りてなく、彈宿りともなつてをつたさうだ。

二百三高地から歸つて、白玉山に登り、納骨堂を拜して表忠塔に登つた。表忠塔は地盤より二百十八尺の高塔で、總階段は二百六十七ある。これは數へて見たのだ。予はナンでも兎角數へて見る癖がある。階段などは第一道がしたことが無い。表忠塔の階段は二十七の階段が九つ、二十三段のものが一つある。コン

ナいらぬ計算も處が處物が物だけに念を入れて見た。

白玉山から見る景色は、旅順第一といふ評である。白玉山上旅順の八景などいふものが、木標を建て、書きつけてあつた。老鐵の残雪、爾靈の夕照、龍河の煙雨、水營の朝霧、白銀の秋月、模珠の遠帆、虎島の晴嵐、西港の浮鷗、これである。併し旅順には名所も何もない。唯老鐵山は獨り雄大なる景色を見せてをる。旅順で見るべき景といへば老鐵山の遠見ぐらゐなものであらう。

夕暮にながめ見渡す水師營

其の名も高き白玉山

こはれた堡壘が見ゆるぞエ。

アラ汽車の音笛の音

田舎も汽車があるかいナ。

なんどといふ俗語が残つてゐる。「田舎も汽車があるかいナ」などとかういつたら三文の値打もないが見るべきものは實に何も無いまた、

夕暮に眺め見渡す旅順口

其の名も高き黄金山

こはれた船が見ゆるぞエ。

アラ露西亞が泣く、露西亞が泣く、

旅順に名將(名所)がないかいナ。

などといふのもある。旅順で見るべきものは露西亞も泣き、日本も泣いた砲臺の残壘のみである。これは見なければならぬ。

第三十三 少年密使

旅順でクルスタ、アルベスといふ獨逸人の經營してゐたアルベス商會で飼つてゐた鸚鵡は、砲彈の飛來する音を真似るので有名であつた。シユー、ブリッ、パンパン、ゴゴロとやつたり、ブスン、ヒュルンなどと氣の抜けた音まで中旨いものであつた。鸚鵡のドロン、ゴロ／＼には愛嬌があつたらう。けれども火の出るドロン、ゴロ／＼には頭が飛んだり、腕が千切れたり、とんでもない愛嬌であつた。旅順の屋根の上、街衢の上には日本軍の砲彈が日々夜々破裂したのであるから、鸚鵡も日々夜々追ひ／＼と多忙になつたことであらう。十二月に入つてから、旅順は日本軍の全線から砲彈を浴びせかけられた。そして露兵は防いで防いで防ぎ切れない日本軍を辛うじて支へてをた。露軍の眞價は、實に十二月以降即ち既に或る將軍連が開城の止むなきに至れることをすら考へてをたつて、僅かに鐵の如き意志を有する將軍の力によつて支持されてをたつた此の期間に存することと予は思ふ。前後腹背みな敵を受けながら、毫も其

の態度を變ぜず、飽まで自己の盡すべきを盡したる彼等に對しては、そこに多大の勇氣を認むるのみならず、將來露國を研究するものは、彼が艱難に處して愈々其の本領を發揮するの一點に着眼せねばならぬと思ふ。露國が敗軍の結果に失望落膽することなく、ますます志氣を鼓舞奮勵しつゝあることは、今日の實狀である。一體戰に敗けては何にもならぬ。併し折角勝つても國民の氣に弛みが來ては、敗けたよりも却つて恐ろしい結果を來すかも知れぬ。勝者は往々志氣が沈靜して、敗者は反動として却つて志氣が熾んになる例は尠くないと思ふ。予の「肉彈」が會て露西亞に於いて翻譯せられた時、ボルツガロフなる一志士がこれに對し、日露戰爭の結果に見て憤慨した一記事がある。それには露軍が何を以て敗北の辱めを受けしかに就いて熱血の文字を揮ひ、來たるべき戰爭に於いては、一歩たりとも日本人に譲らざるの覺悟を爲すことが極めて緊要なることを切論してゐる。そして日本人をして、吾人に大敗を與へて却つて勝利の道を教へたる瑞典人たらしめんことを切に望むといつてゐる。一語の中に、實に涙の痕が見えるやうである。そして露國人は宜しく「肉彈」を讀みて、這般の

敵について研究すべしと薄氣味の悪いことをいつてゐる。最後にこの一節があることを、我々日本人は忘れてはなるまい。我等は決して露國を敵として斯かることをいふのではない。泰平無事を夢みてゐるものに向つて、何の日にまた軍旅の勞に従はねばならぬことあるを警告して置きたいのである。ポルトガロフは念佛三昧に日を送る念佛教徒のごときにも一大痛棒を加へてゐる。少しは眼を醒まして宇内の形勢を見るがよいといつてゐる。露西亞には随分世捨人然たる輩が少くないが、これ等の輩には一服の清涼劑となつたであらう。そして過去の悲惨なる戦役の苦痛を忘るゝことあらば、遂に東より西より、某々國のために奴隸の軛を以て威嚇せらるゝに至るであらうといつてゐる。また我々露國人は好戦國民である。縱令今日敗を取るとも、吾人の囊中にはなほ火藥あり、露軍の名譽はなほ未だ失墜せずと痛論してをる。

さて予はこゝに二百三高地に於いて落命したるところの、隠れたる露國の一勇者を紹介して置かうと思ふ。これ特に日本少年者のために何等かの刺戟を與ふるに至つたならば、予の幸とするところである。

この勇者は兵士では無くて、一個の少年である。年僅かに十三歳の少年であるが、丁度日本の金鷄勳章のやうに武功拔群を表彰するところのゲオルギ勳章を胸間に輝かした勇士である。この少年は名は何といつたか、旅順にあつた露人さへ之れを知つたものが少い。併し此の勇敢なる少年兵は屢々日本軍の攻圍線を出入したといふことは事實である。

何でも旅順の終りに近い、十二月の或る寒い夕方であつた。二百三高地の谷間を、チヨロ〜と走つて居つた一人の少年が、日本軍の砲彈に打たれて、パツタリ僵れた。あたりの兵士は危険をも顧みず、争つて其の少年を救つて、安全の地に移した。

息も絶え〜なる少年の前には、ステツセル將軍が立つて、少年の勇武を激賞した。將軍は此の勇敢なる少年兵の血に塗れた、光輝ある姿を凝視して、熱き涙を落したのは何故か。

この少年兵の雙肩には頗る重大なる任務が負擔されてあつた。ステツセルの爲には實に掛けがへの無い秘密傳令使であつたのである。將軍はこの少年

を失つて、一隊の指揮官を失つたよりも尙苦痛であるといつたさうである。少年はステツセルの密書を懐にし、日本軍の攻圍線を潜つて、友軍との連絡を圖つたのである。彼は林檎の如き赤き其の頬に土を塗り苦力の着るやうな汚い青い支那服を着け、破れた帽子を冠つて、野獸走禽と雖も這ひ出づる隙もなき、日本軍の前哨幕を大膽にも潜つたのである。晝は或は岩陰に潜み、或は民家に隠れ夜は出て、潜行匍匐し、あらゆる艱難辛苦を嘗めつゝ、クロバトキンの許に使したのである。幾度か日本兵の誰何をも受けたらう。幾度か日本軍の大部隊に遭遇して、膽を寒くしたこともあつたらう。荒野を渡る風の聲にも、枯葉を拂ふ雨の音にも、狐村を彷徨ふ里の犬にも、幾たび唇を震はしたか。併し丹心愛國の少年傳令使は、首尾よく、極めて危険なる、併し極めて光輝ある任務を達したのである。クロバトキン將軍は少年の頭を撫しつゝ、其の剛膽にして機智に富むところの行動を歎賞しつゝ、手づからゲオルギ勳章を授けて、武功拔群を全軍に布告したといふことである。

この少年は任を終はると、直ちに踵を返して再び旅順へ歸つた。そしてまた出て復た還ること前後實に三回、日本軍の前哨幕を出入すること六度。砲火の巷を往來して、三個のゲオルギ勳章を胸間に輝かし、最後に二百三高地の谷地より、旅順新市街に入らんとするとき、日本軍の砲弾に打たれて一命を殞さなければならぬことになつたのである。

少年傳令使は旅順赤十字病院で落命した。彼れの白きベットの上には、將軍から、兵士から、また市民から贈られた花環が、堆高く積まれてあつた。冷き枕の邊りには、親もあらず、兄弟もあらず、少年は唯獨り淋しく死んだ。精神上多大の感動を與へたところの少年のために、將士皆涙を呑んだ。勇少年が死を恐れず、敵の重圍を潜つて、斯かる大膽不敵なる行動を敢てしたといふことは、世界戦史上稀有、否寧ろ絶無のことであらうと思ふ。こゝに更に哀れなる一話がある。戦後態々歐露より戦死者の墳墓を訪ねて、老鐵山の麓に集まつた順禮は非常に多かつた。近頃でもまだ此の種の順禮は少くないといふことである。予が旅順へ行つた少し前の話である。これ等の順禮の中に、十五六の花耻しい一人の少女が交つてをつたといふことは頗る異

彩を放つた。いづこの誰の冢を弔はんとて遙々旅順三界まで来たのか。

此の少女は彼の少年傳令使の妹であることが後で知れた。少女はドウ尋ねても兄の墓らしいものは見當らぬといつて目を泣き服してをつたといふことである。

墳墓を訪ねて来た順禮は、三十九年より四十年にかけて非常に多かつたさうである。そして大抵は女であつたのは特に注意を値ひする。夫の墓を探しに來た妻もあれば兄の石碑を建てに來た妹もあり弟の墓を弔はんとて來た姉もあつた。みな老鐵山の麓の埋葬地へ行つて搜索して居つたが、誰の墓はドノあたりにあるといふやうな旅順から歸つて來た兵卒の話を便りにして探すのであるから中々見當らない。けれども彼等は、凡そ之れぞと思ふのを寫真に取つて國元へ送り彼の兵卒に問ひ合はせその返事を待つてまた搜索するといふ風で、毎日五六里の道を馬車にも乗らず小さい子供の手を引いて、墓探しに行つてをつたものさへある。彼等は決して富有者のみでは無い。中には誠に見すばらしい風をした婦人もあつたが皆何を置いても展墓のために遙々一人旅をし

て來ることをも厭はなかつたやうである。下士の妻などは人に金を借りてゐても一度はこゝへ來なければならぬやうになつてゐた。そして支那人の下宿にをつたり間借りをしたりしてゐて、戦場の跡を尋ね、墓參りをするので半月や一ヶ月は滞在してをつたものもあつた。

これを見ても露國の婦人は甚だ愛情に深いもので、彼の一時の感情にのみ馳せ易い一部の婦人とは、そこに大變な相違があると思ふ。彼等はまた優しい主婦であつて、皆境遇に甘んじて、忠實に働いて居る。けれどもまた彼等は勇敢にして男子にも劣らぬ氣力を有してゐる。旅順でトウ／＼終りまで殘留してゐた陸海軍將校の婦人は五六十人もあつたが、皆兵士と異ならぬ働き振をしたといふことである。總ての婦人がみな非常に女性的である半面に於いて、また非常に男性的である。中には兵卒として戦線に立つたものさへある。曾て予が見た外國某雜誌には、我が運送船常陸丸を撃沈しつゝある露艦の上に、一婦人が立つてハンカチーフを振つて歡呼してゐる繪があつたが、之れを見ると軍艦にも乗り込んでゐたやうである。また或者は頭髪を短く切つて軍服を纏ひ少し

も耻らふ風もなく、酒蛙々々として兵士の列中にあつたものもある。かゝる小説的の事は露國婦人の好んでするところと見え、戰場に於いて男装をなし、良人や情夫と共に馳驅してをつたものもあつたさうである。彼等男装したる女兵の中には、熟練した射手などもあつて、或る女は其の夫が戦死した後、塹壕に陥止まつて、百七十人の日本兵を射殺した後、自らもまた戦死したといふことである。恐ろしい女もあればあるものである。

第三十四 惨中の人道

北海道渡島國江差街道の或る路傍に「旅順院誠忠義烈居士」といふ墓が建つてゐると、近頃友人から聞いたが、随分思ひ切つた戒名をつけたものである。併し旅順の山谷を埋めた勇士皆是れ「旅順院誠忠義烈居士」ならざるは無いのである。旅順では頭を出しさへすれば死ぬるに極つてゐた。足を前へ出しさへすれば死ぬるに極つてゐた。併しながら勇敢なる我兵は、ドウしたら死ぬるのドウしたら生きるのといふ問題を考へてゐたものは、無論一人も無く、最中自己の功名を立てるの立てないのといふ問題でなくて、一兵卒の頭にも帝國陸軍の名譽といふ觀念が織んで、如何にしたらば當面の戦況が發展するかを考へてゐたのである。生命などはあつても無くつても、それ等はテんで問題になつてゐらなかつたのである。たゞの一兵卒といへども、「どうしてをらなくても師團長なり、聯隊長なりがやつてくれる。我等は命令のまゝに進めといへば進む、死ねといへば死ぬる、唯其の義務を盡すにあるのみだ」といふやうな、ウツチャリ

な念慮を抱いてゐるものは無かつた。人よりも先んじて、我こそ彼の堡壘内にはひつて、敵兵の多寡を搜索してやらう、我こそ彼の機關銃を破壊して、攻撃の進路を開いてやらうと勇み勇んで、我も我もと必死の勇士が飛び出して来たのは指揮者にとつてドンナに嬉しかつたか知れぬ。「決死の覚悟」などといふことを考へてゐる内は、或は覺悟しなければ出来ぬ死かも知れぬが、モウかうなつては死の問題を蚤の食つたほどにも考へないので、そこに妙味があると思ふ。

旅順院誠忠義烈居士の戒名を聞いても、當年の事が切りに思ひ出される。十二月二日北砲臺で、我が攻路頭にあまりに死骸が多くなつたため、一先づ其の始末をしやうと、我兵の一人が坑路の上に飛び上がつて、何といつてよいか分らぬから、ハンカチーフを振つて、「お出てなさい」とやつた。ところがこれが通じたものか、敵の一大尉が出て来た。そこで死體收容の意を告げると、先方も承知したから、兵が擔架を擔いで死體を拾ひ集めたが、その間敵の將校はこちらの攻路を覗かうとする。こちらも向うの壕内を覗かうとしたが、お互ひに見せまいとする。何かグチャ／＼と談しかけては向うが來やうとするのを、こちら

は向うへ連れて行かうとし、向うは來られてはたまらぬから、我の方へ歸さうとする。寄つたり寄せたり、それは可笑しい圖であつた。また彼我の兵卒は、一見舊知のごとく、我れより酒を呉れてやれば、先方からも酒を持つて來てくれる。互ひに盃を交換して、覺束ない支那語や手真似で、勝手なことをいつて話してゐる。其のうち續々と向うからも出かけて來て、ガヤ／＼と園遊會のやうに騒ぐ。中には酒にかけては大分豪傑の先生と見た彼れの一將校が、廻らぬ舌で、「日本兵も強いが露兵も強からう！」などといふから、我兵も鸚鵡返しに「露兵もなかなか強いが、日本兵も強からう！」といつてやる。すると彼は「露軍には、一人も出でて開城を乞はうなどと思ふものはない。露兵が死に絶えて後なら勝手に旅順へお這入りなさい。」などといふから、こちらも負けてはをらず、「日本兵が死に絶えるまでは、攻圍を解きませんぞ。」といふ。そして互に盃を舉げて笑ふ。その中死體の收容も出来たので、互に握手して、「いづれまた後刻」といつた風に別れて、彼は砲臺の内に、我は攻路内に影を没すると、忽ち戰場は打つて變つた舞臺となつて、ピュ／＼と彈丸が唸つて、人を收容した身が、幾人とも知れず、收

容されるべき運命の人となつた。戦も随分現金なものである。併しそこにまた人情の美點が流露してゐるとおもふ。擔架で運搬してゐる日本兵の死骸が、彼等露兵の前を通ると、彼等の多くは擧手の敬礼をする。ゆかしいものである。これこそ文明の戦争である。彼等露兵の面前に於いて、勇敢なる働き振りを見せた戦死者の骸に對して敬意を表するところに美しい人情も表はるれば、悲哀なる戦争の面影も見える。彼のクリミヤに於いて要塞の側に井戸があつて、そこへ敵味方の兵士が水を汲みに来る。この井戸の周囲では敵も味方もなく、互ひに水を汲んだり汲んでやつたりして、別れるときには、「いづれまた戦場であ目にかゝりませう。」と再會を鐵火の間に約して去つたといふことである。慘中にもなほ人道はある。予は會て露軍の害敵手段について、少しく之れを説きは説いたが、露兵が我が死者に敬禮した一事を以て、既に其の全體を抹殺してもよいと思ふ。

彼の北砲臺に於ける情況はドウかといふと、我が師團は十一月二十六日に於いて大爆破を企てたが僅かに比頓壁の一部を損傷したのみで功を奏しなかつ

た。日没青木聯隊長は軍旗を立て、胸牆上に登つて指揮し、突撃を決定したが、これも成功しなかつた。十二月十八日坑道の極端に藥室八ヶ所を設け、二千三百キログラムの驚くべき火薬を裝填して、午後二時十五分大爆破を行つたが、その勢に乗じて突撃した突撃隊の殆んど全部は、爆破の餘波を受けて掩蓋下に埋没してしまつた。夜に入り、第十一師團長、鮫島中將は内野參謀長を伴ひ、胸牆上に登つて全身を露はした。後備歩兵第三十八聯隊大隊長岩本大尉は既に敵の猛射を受けつゝ、二個中隊を率ゐて敵の壘庭にあつて、連りに敵の壘内に偵察兵を放つたけれど、未だ内部の情況を知ることが出来なかつたが、併し成功の見込があることを報告した。師團長は大膽にも砲臺の胸牆上に立つて、月光と雪の光とに透し見て、我兵の壘庭にあるものは悉く死者にあらざること及び敵の動搖せる色あること、今にして突入せば成功疑ひなきことを見て取り、直ちに意を決して突入すべきことを命じた。岩本大隊の突入に續いて、青木聯隊も胸牆を越えて、壘の咽喉部附近に突撃した。師團長が月光を浴びて自身胸牆上に在つたときの態度は、鬼神の天より下りしかとも見えたとといふことである。この場

合師團長を失つては、其の先が大變であるといふので、幕僚が將軍の足を持つて後へ引いたが、將軍は再び胸牆上に立つ引いても、飛び出すさうして微笑を合せて立ちつゝ、砲臺を見下してゐられた姿を見て、皆涙ながらに拜したといふことである。

この突撃で、敵は旅順第一の永久築城たる北砲臺を棄て、退却した。放棄するに臨み、外岸穹窿より咽喉部に至る通路咽喉部兵舎の二階より後方に通ずる通路及び外壕橋梁を自爆して去つた。砲臺の全部を確實に占領したのは、夜十一時五十分であつた。吾人が北砲臺で忘るべからざるは、露軍の名將コンドラテンコの戦死である。將軍は北砲臺の陥落する三日前、即ち十二月十五日夜九時頃、穹窿内て下士の殊勳者にゲオルギー勳章を授與し、終つて十數名の將校と擬議しつゝ、あつた時、日本軍より放ちたる二十八榴榴彈のため、穹窿を粉碎せられ、將軍は頭蓋骨を破壊せられて、敢なき最後を遂げた。將軍は工兵大學校を卒業したる人、築城に關し特に豊富なる學識を有する人たりしのみならず、また人格の人であつて、防禦の中心人物として、衆望を一身に擔ひ、旅順要塞の爲に

は掛けがへのない名將軍であつた。コンドラテンコの戦死が旅順開城の一原因となつてゐることを見ても、如何に旅順の爲に大切な人であつたか、分かる。ステツセル將軍は、コンドラテンコの戦死を非常に悲しんで、要塞全部の將軍を失つたよりも惜しいといつたさうだ。旅順を去るときにも、ステツセルは將軍の墓前に別れを惜んだといふことである。將校兵卒も將軍のためなら命を惜まぬといつて、其の麾下に於いて戦闘することを非常の光榮としてをつたといふことである。「あの人の爲なら死ぬる」といふことは最も大切なことで、部下に此の觀念が缺けてゐては、いかなる勇將も戦は出来ぬ。高壓的に部下を動かさうとしても、中々意圖の如くなるものでない。それでこそ一隊の指揮官たるものは、人格の人でなければならぬのである。コンドラテンコ將軍は、かの人格の人否、神格の人乃木將軍のやうな人でもあつたらうかと思はれる。予が北砲臺を訪うて、將軍戦死の跡に到つた時、剛勇を以て聞えたるウメンコ中佐以下十三名が將軍の死骸を圍んで死したる當時のことを想ひ浮べて、覺えず身震ひした。予は比叻の斷片にも、なほ將軍の血を見るやうに思はれてなら